
月と影と踊る

水城おとは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と影と踊る

【Nコード】

N1494P

【作者名】

水城おとは

【あらすじ】

舞台女優を目指して上京した大山咲。生活費とレッスン費を稼ぐために、専門学校時代の先輩・由美の誘いで夜のお仕事・キャバクラで働くことに。『オヤジの隣に座って酒作って、楽しく話すだけ☆』と聞いてたけれど、実際はなんだか大変。夜の仕事は未知のもの・人・出来事がいっぱい！咲は舞台を目指しながら夜の世界で働けるのか？一体どんな事が待ち受けるのか？

***登場人物紹介* (前書き)**

執筆中なので、話を追うごとに人物紹介を追加していきます。

1／19 細田 追加しました。

登場人物紹介

＊大山咲 おほやまのあ Ⅱ ミキ (20)

主人公。舞台女優を目指して上京。舞台の専門学校を出るも、バイトとオーディション、レッスンの毎日で貧乏状態だった。出演が決まった舞台のチケットノルマが払えず、大金が急遽必要になり専門学校時代の先輩・由美の誘いでキャバクラ『MOON』で働き始める。

＊由美 Ⅱ まりあ (21)

咲の先輩。大手芸能プロダクションに入って、ドラマや映画で女優をしたと思っていた。細身・中背の美人だが、本人はそれを『どっちつかずのツカエナイ容姿』と言って自虐する。『MOON』で働いて1年ほど。現在『MOON』の不動のナンバーワン。

＊林田 (35)

『MOON』の店長。水商売歴15年のベテラン・やり手店長。プライドも高いが、そのやり方には批判も多く、トラブルも多い。髭づらでカッコイイと称されるが、女癖・酒癖は悪く、以前働いていた店もそんなトラブル絡みで辞めたといわれている。

＊岩村 (27)

『MOON』のボーイ。水商売は7年目。林田が『MOON』を立ち上げる際に引き抜いてきた。時期店長を狙っている。店では重要なポジションであるキャストの付回しをしている。

＊宮道 (26)

『MOON』のボーイ。由美Ⅱまりあとは同じ頃に入店。水商売を始める。元・小学校教師。

＊ゆい(20)

『MOON』のキャスト。由美Ⅱまりあが来るまではナンバーワンだった。18歳から夜の仕事をしているが、現役大学生。

＊三上啓二(25)

『MOON』のオーナー。闇金融・デリヘルの社長。若いころから飲み歩き、店長・林田とは長い付き合い。

＊アキラ(21)

『MOON』のキャスト。自称・スーパーヘルパー。どんな相手でもそつなく接客をこなし、ビジュアルも良いが、お客さんに営業をする気は全く無くヘルプ専門を自負する。上野のキャバクラ時代から店長・林田や三上とは知り合い。咲Ⅱミキとは仲がよい。

＊エナ

『MOON』のキャスト。細くて小柄で目が大きくて、アイドルみたいな容姿。歌舞伎町でも有名な人気嬢・藤咲エナ。まりあとは親友で、初期はまりあの専用ヘルプだったこともあり、今でもたまにヘルプに着くこともある。

＊細田亮(23)

『MOON』のボーイ。水商売歴1年。岩村にくっついて色々教えてもらってる。将来的には自分で飲食店をやりたいと夢見てる。

1、ポケットのメモ（前書き）

舞台に憧れている人、夜の世界に憧れている人も、夜の世界を覗いてみたい人も・・・やっぱり働くって大変。

1、ポケットのメモ

11月。この季節の東京の街の風は寒い。

重たいレッスンバッグを担いで、ため息をつく。先ほどまでダンスでびっしょり汗をかいた背中が、夕暮れの空気にとたんに冷えて体が凍りついた。

私は大山咲。おおやま さき 舞台女優を目指して地方から上京。舞台の専門学校

を出たものの、もちろんすぐに女優なんてなれるわけもなく・・・バイトとレッスン、オーディションがの往復の毎日。レッスンはもちろんお金がかかるし、オーディションがあればバイトも突然休まなきゃいけなくて稼ぎもバラバラ。女優志望なんだから、綺麗にしたいのはヤマヤマなんだけど・・・そんなお金なんて全然ないんだよね。

寒くて思わずコートのポケットに手を入れた時、ガサツと一枚のメモが手に触れた。

「いいバイト、ねえ・・・」

専門学校の頃の一年上の先輩からもらったメモ。もうね、コレだけは絶対にやらないと思ってたんだけど。いわゆる『夜のお仕事』。お水のお仕事ね。その先輩は本当に綺麗な人なんだけど、なかなか希望の芸能プロダクションに入れなくて、生活費稼ぎとレッスン費稼ぎのために『夜のお仕事』を約1年前にはじめたってワケ。どんなこたわりか分からないけど、

「どうせ夜働くなら歌舞伎町でしょ！」

とか言っちゃって・・・今じゃすっかり小慣れた感じ。こないだダンスレッスンの帰りらしい先輩に中野でばったり会って、このメモを渡されてしまった。なんでも女の子一人紹介したら先輩にもバツクがあるからとか、今本当に女の子足りないからとか色々早口で説明されてしまったのだ。

もちろん、メモをもらってしばらくは放置していたんだけど・・・

・たまたま先日受けた舞台のオーディションが受かったのだが、舞台の出演者には『チケットノルマ』が40枚ほどあるという話を、制作さんから昨日聞かされたのだ。1枚3,500円のチケットを40枚・・・20歳のレッスン貧乏にあえぐ私に、すぐに払える金額じゃなかった。

背に腹は代えられない

そう。せっかく合格した舞台のキャリアは欲しい。急にお金は必要。でも無い・・・なら、なんとしても自分で用意するしかない。舞台の目指すことは両親の反対を押し切って決めたこと。生活費も授業料も全部自分で賄うことを約束して目指した道だ。いまさら実家の親に泣きつけることができるものか。気がついたら私はメモを見て先輩に電話をかけていた・・・

「おまたせ～～！！！」

西武新宿線の出口で待ち合わせをしていた私の背後から、やたらとハイテンションな声がした。

派手な化粧に長い髪をぐるぐるに巻いて、派手なファーがついた黒いダウンジャケットに寒そうなくらいに短いミニスカート、黒いニーハイブーツ・・・一瞬人間違いかと思って急いで視線をそらした。

「ちょっと！ 咲！ なに無視してんのよ！」

「うわっやっぱり由美先輩！？」

変われば変わるものだ……。先日会ったときは、レッスン帰

りでお互いスッピンで飾り気の無い服装だったから変わった感は無かったが。今日は由美先輩のあまりの変貌に驚いた。外見が変わるとキャラも変わるもののかな？昔から美人だったけど、こんなにテンション高いキャラでもなかったような・

「ちよつと咲ちゃん、これからお店に行って店長に面接してもらおうけど、お店では私のこと　まりあ　って呼んでよね。間違っても由美とか本名でよばないでよね。」

「・・・は？　まりあって？？」

由美先輩は耳元で小さく囁いた。

「何って、源氏名よ源氏名！　みんな本名以外の名前つけてお仕事するの。ウザイ客とか嫌な女とかに本名とか色々バレるとめんどくさいから、本当にやめてよ！」

「あ、はい・・・」

う、ウザイ客って何？　嫌な女って・・・色々バレると面倒って、何ですか？？　由美先輩からは『ただオヤジの隣で酒作って、楽しく話すだけのお仕事だから☆』とかしか聞いてませんけど！？

・
私の不安な不安な未知の世界への挑戦が始まろうとしていた・・・

2、二つ目の名前

新宿歌舞伎町…

人生で一度も踏み入れた事の無い街。暗くなったこの時間に、今まで足を踏み入れようと思ったことも無いこの通り。平日の夜だというのに、こんなに沢山の人が集まるものなのかと、ちょっと圧倒されてしまった。ただただ、早足に歩く由美先輩の後ろにびったりくっついて歩く私。

一人じゃ絶対来れないよ…

行き交う女の子はみんな華やかで、そして綺麗で。通りの店は夜だというのにキラキラと、そして騒がしく。テレビやドラマの中だけで見ていたような黒いスーツの男の人や、怖そうな人、髪の毛をぴっちりまとめて着物をぴしっと着た『いかにも』といった女性や、頭を盛った可愛い女の子…何もかもが初めての、別世界だった。

歩く途中、何人もの黒いスーツの男の人が由美先輩に声を掛けていたが、先輩は足をとめることも無く、軽くあしらっていた。

「咲ちゃん、ここ歩く時色々話しかけられるけどテキトーにかわしてね。テキトーに。」

「テキトーにつて…言われてもあの…。」

だいたいあの黒いスーツの人たちが何なのかわからないままテキトーにと言われても…と言いかけた

時、先輩の足が止まった。

「まりあさん、おはようございます!」

なんだかやたらデカイ声。声の主を探したらちよつと小太りな黒いスーツの男が店の前の掃除でもしてたのだろうか。ビルの前でホウキとチリトリを持って立っていた。20代半ば…まだ30代じゃ

ない。カッコイイとは言い難いけど、髪の毛なんかちょっとロン毛で流していたりして。あ、なんかピアスつけてる？一応身なりには気を使っているようだった。

「おはよ。店長来てる？」

由美先輩はチラっと私の方を振り返った。

「この子、話してた子。今日面接してもらおうハナシだったんだけど。」

「は、はじめまして！大山咲です！」

とにかく挨拶！挨拶しなきゃ！と、ちょっと焦りながらも頭を下げた。

一応、水商売の面接とあらば、やはりオシャレしておくべきだろうなど、自分の中では一番可愛いピンクベースの花柄のミニワンピースとそれに合うような茶色いブーツを合わせてみた。コートも自分の中では一番オシャレな部類に入るキャメルの皮ジャケットを着ていった。カバンはお気に入りサマンサの白いキルティングバッグで、昔デイト用にと買ったバッグだった。まあ正直、どれも安物ばかりで・・・しかも一年以上前に買った年季が入ったものばかりだったけど・・・精一杯のオシャレだった。

小太りの男はチラリと私をみて、くしゃっと微笑んだ。

「早く咲ちゃんも、まりあさんみたいな服とかバッグ買えるようになろうね」

・・・。

おお。

やっぱり安物オンボロはばれちゃうのね？！

「は、はい！頑張ります！」

恥ずかしい…。あまりの恥ずかしさに全身から汗が吹き出てきた。確かに由美先輩が持つてるバッグはブランドとかはわからないけど、かなり高そうなバッグ・・・私は焦りを隠そうと、アタフタ威勢良く返事をしてしまった。

小太りの男はそのまま私たちを店内に案内してくれた。どうやら地下に降りる店らしく、ちょっと急な階段を私たちは降りていったのだ。

「うわー・・・」

重い扉の先に見えた世界に、私は目を見張った。高級ホテルのレストランかと思う、毛足が長い絨毯が敷き詰められた店内。豪華なシャンデリアに綺麗な花。一番端の席が良く見えないほどの広さ。小学校の体育館くらいはあるんじゃないかと思った。ふかふかのソファーに、大理石らしきもので作られたテーブル、そこにはシャンデリアの光をうけてピカピカ輝くグラスが並べられていた。

一人あつけにとられている私をよそに、由美先輩はさっさと中へ入ってく。

「咲ちゃん、こっち！」

言われるがままについていけば・・・なんともう一つ大きな半透明のガラス扉がある。

「面接は、ここのVIPルームでやるみたいだから。入ってて。」

「び、VIPルーム・・・」

なんでも通常のフロアよりも高い料金設定の場所で、それなりのお客様が使うとか・・・簡単な説明だけをして由美先輩はどこかへ行ってしまった。

だだっ広いVIPルームとやらに一人・・・今まで座った事がないようなふかふかソファー。こんな世界があっただと、軽いカルチャーショックを受けた。不景気不景気とか言いながら、まったくそんな暗い話題とは無縁な世界のようにだった。

「お待たせ。まりあの後輩なんだって？」

ちよつと怖そうな、ひげ面の男が入ってきた。・・・この人が店長！？

「はじめまして。店長の林田です。」

「は、はじめまして。大山咲です。」

手渡された名刺を見ると・・・見た事もないようなデザインの名刺。なんていうか、和紙みたいな模様がある、厚手であんまり触りすぎると毛羽立ってきちゃいそうな名刺だった。

「じゃあ、とりあえずこの紙に簡単な履歴書いてね。簡単でいいから。」

簡単な履歴・・・今まで書いてきた履歴書とはまったく違う履歴書。書くものは名前と住所、年齢、あとは服のサイズや身長・体重、スリーサイズ、今までの水商売履歴などだった。もちろん今までの水商売暦が無い私は書くことができず、やたら多くスペースがとられた水商売履歴は真っ白で、なんだか情けない履歴書に見えた。

「ふーん。初めてなんだね、水商売。服のサイズは7号か9号か。ふーん。スタイルはまあまあ良いんだ。タバコは？吸うの？」

「いえ。吸いません。」

「お酒、強い？」

「そんなに強くもないんですが、大好きです。」

こんな感じで、履歴を見ながら店長と一問一答。一体この職種の面接がどんなものかわからないから、全く終わりが見えない。なんだか不安がむくむくわいてきた所で、店長が履歴を見るのをやめた。

「じゃあ、今日から働いてく？」

「は？えっ？今日からですか？？」

面接じゃなかったのー？それって採用なのかな・・・どうなんだ。

「細かいことはおいおい教えるから、まずは一日働いてみて。給料も今日終わったら決めようか・・・。あ、そうだな前まだ決めてないんだっけ？そうだな・・・。ミキなんてどお？」

「え・・・その」

・・・いきなりどうだと言われても。答えに困っていると、店長は強引に

「よし、今日からミキで決定！！」
と勝手に決められてしまった。

私は大山咲。

でも、これからこの場所では『ミキ』という新しい名前と呼ばれる。
本当にやってけるのかなあ・・・。

3、はじめて、だらけ。

ミキ・・・

そんな新しい名前をつけられた私。

まずは衣装を選ぶように店長に言われ、連れて行かれた小部屋。そこにはズラーっと並んだきらびやかなドレスの数々・・・。

キラキラのспанコールやラインストーンが光るドレス。さらさらとした美しいサテンのドレスや、ゴージャスなレースがふんだんにあしらわれたものまで。

今までこんな綺麗なドレスを近くでみたのは初めてかも。

「ここにあるドレスは全部、店服。お店のドレスだから。好きなの選んで。」

「は、はい・・・」

それにしても、どのドレスもボディラインばっちり出る感じだし。なんか露出も多いような・・・

「あんまり好みの無いかもしれないけど、稼げるようになったらみんな自分で好きなもの買ってるから。ミキちゃんもすぐに好きなもの買えるようになるから。がんばってー」

いや・・・ただ生活費とレッスン費稼げるようになればいいんですけど。別にドレスなんて何でもいいんだけどな。

そんなことを考えながら、とにかく一番ボディラインが目立たなそうで、一番露出が少なそうなドレスを選んでみた。

紫色の、спанコールがちりばめられたベアトップのサテンのロングドレス。ちょっぴり引きずる長い裾がなんだか上品でお姫様みたいだった。

「え？そのドレス？なんか地味だな……。もつとさあ……。そう、胸元バーンと開いて、スリット入ったドレスのほうが受けると思うけど……。まあ今日はいいかあ。」

店長は若干……。というか、かなり不満げに私を見たが……。しようが無いじゃないの！無理なものは無理だし！

その後はメイク室に突っ込まれ、なんだかギャルみたいな美容師さん？に有無を言わず髪の毛をぐるぐるに巻かれ、いわゆる『盛り髪』というすごい頭にされてしまった。

我ながら……。似合わない 涙。。。。

たまにコンビニで立ち読みする雑誌を見ては、誰でも『盛り髪』にすればそれらしく可愛くなるんだと思っていたけど……。私のはなんだか、髪の色も暗いこともあって 田舎くさく感じだった。そう。無理してがんばってる田舎のヤンキーみたいな。鏡で自分自身をみながら、ちよつとため息をつく。

自分じゃ結構マトモな顔してるし、スタイル悪くないほうだと思ってたけど……。鏡に映る野暮ったい姿を見る限り、自分のそんな自信は思い込みだったと思った。

その後は、店長からお酒の作り方とタバコの火のつけ方、グラスの拭き方なんかを一通り教えてもらった。

そして今日だけ使う自分の名刺……。『カラ名刺』という店名だけ入った名刺に自分の名前を何枚か書かされた。お客様に渡すのだそうだ。

『MOON』 どうやらそれがこの店の名前らしい。緊張しすぎて店の名前を確認する余裕もないまま、ここまでいたことに正直びっくりした。

あとはお店の従業員・・・ボーイと呼ばれる人たちの説明と紹介をされ、時間まで待機席で待つように言われた。出勤時間には皆接客していない時間は『待機席』と呼ばれる場所で、一箇所に待機をして待つのだという。

フロアとは少し離れた場所の小さなスペースに、ソファが並んでいた。他の子が来る前に、座って待っていたが、時間が近づくにつれて、一人、また一人と女の子がやってきた。

(う、うわぁ・・・・・・・・・・！)

みんな、可愛い。すごい綺麗。そして、エロいいい！

正直、素でほかの女の子達に見とれてしまった。

ボディラインくっきりのドレスを堂々と着こなし、クビレを強調してる子。

胸元が大きく開いたドレスから、惜しげもなく豊かなバストを見せ付けてる子。

超々短いドレスを着こなす美脚の子もいれば、

アイドルみたいにちっちゃくて可愛い子や

まるでハリウッド女優のようなゴージャスなオーラの人まで・・・

みんな芸能人みたいにはっちり化粧して、本当に綺麗。

同じ人種だっけ？私。と、すら思った。

待機席に着けば思い思いの席に座り、携帯をいじる子もいれば、

隣の子とおしゃべりを始める子、メイクの確認をする子など様々だ。

「ねーね。こないだ買い物行った時に会った人、あれ、あんたの客じゃなかった？」

「あー、あれね。あいつ、もう切った客なんだけどさあ。こないだ偶然会っちゃったから、調子こいてまた電話とか来るようになってうざいんだけど。」

「え、なんで切ったの？」

「やらせろってうるさいし。全然金使わなくせにさあ。」

「あー．．それ超ウザイ。顔もきもいし。」

．．．．．

「さつきメイクルーム居た子、前の店で一緒だった奴．．あいつ、超ーむかつく女なんだけど。」

「わかるー。さつき、ブスのくせにヘアメに色々文句つけてたよねえ。あ、来た来た．．」

．．．．．

こ、

怖い世界だね．．．。

私、一日ちゃんと持つんだろうか。

そういえば由美先輩．．じゃなかった、まりあさんの姿が時間になってもどこにも見えなかった。私と一緒に随分早い時間にお店に着いたはずなんだけど？

怪しまれない程度に、なんとなくあたりをキョロキョロ見回してみたら．．まりあさんの気配すら無い。

「いらっしやいませ！」

ボーイの大きな声が響いた。店内が微妙にざわつく。と、同時に待機席も微妙にざわつき始めた。お客さん．．？が入店したのだ。

そのざわざわはフロアの置くのほうへと消えて小さくなり、代わって待機席のざわざわがはつきり聞き取れるようになってきた。

「．．．また？」

「むかつく」

「．．．今月もう毎日同伴じゃない？」

「また今月も．．」

「またVIP？」

何か．．．確かにみんな、誰かの悪口を言ってるような．．．。

待機席のこそこそ話が聞き取れるようになり始めたころ、そんな空気を破るようにボーイが入ってきた。

「ミキちゃん！よろしく。まりあの同伴のヘルプ！」

「え・・・？」

「まりあさんが同伴で来たお客さんのヘルプに入って！」

え？私？？へ、ヘルプって、何？

というか・・・悪口いわれまくりって、由美先輩・・・まりあさんの事だったの！？

なんだか色々ありそうな『MOON』というお店。・・・今日一日、大丈夫かな、私・・・。

4、彼女がナンバーワン

まりあさんのヘルプ……それが私の初仕事だった。

「指名の女の子が他の席に行ってる時とか、着替えてる間、指名嬢に代わってお客様のお相手をするのがヘルプだよ。」

席に案内しながら長身で細面のボーイ・岩村という若い人が教えてくれた。

「たまに指名の女の子と一緒に接客することもあるんだ。ヘルプの仕事は指名嬢がいない間、お客様を飽きさせないこと。指名嬢を立てる事。それから……まあ、後はまだいいか。ミキちゃん、まりあさんの後輩なんだって？じゃあ大丈夫だよ。よろしく！」

「えっ？あ、あの……」

気がつけば、数時間前に面接をしたVIPルームに連れてこられていた。

VIPルームに来るお客さんって、い、一体どんな人よお！？怖い人とか……？よく聞く♪チャララ♪って曲がかかってきそうな人達！？

重々しい気持ちと共に開いた扉の奥には……美しいピアノのBGMとキラキラ輝くシャンデリア。一番奥の席へと進む。そこには……

「こんばんは。はじめましてだよね？」

ソファに座っていたのは、なんとも気のよさそうな、ちょっと太目の……頭も薄い、ニコニコしたおじさん。50代後半くらいかな？服装はそんなに派手な感じじゃないし、むしろ普段着みたいなトレーナーにスラックス姿だった。

……VIPに来るお客さんって、超怖い人ばかりだと思っていた私は、少し安心した。

「は、はじめまして。さ……いえ、ミキです。お隣失礼します。」

どうにかこうにか、さっき教えられたばかりのお酒の作り方を思

い出し、水割りを作る。氷を静かに入れて・・・お酒入れて・・・水入
れて・・・ええと最後に混ぜるんだっけ。

「そうそう。マドラーで混ぜる時には、片手はグラスに添えてかき
混ぜたほうが綺麗に見えるよ。」

私の無言の作業を見守りながら、ニコニコと太目のおじさんが教
えてくれた。

「あ。ありがとうございます！いえ、すみません・・・その、今
日はじめてでまだ慣れなくて・・・」

焦りながらグラスを拭き、おじさんのコースターへ乗せる。おじ
さんはそれでもニコニコしながら続けた。

「いいのいいの。最初はみんな初めてだから。今日はまりあちゃん
から水商売初めての子が来るからって呼ばれちゃってさ。あ、何か
好きなドリンク頼んでいいよ。」

「はい・・・ありがとうございます。」

まりあさんから呼ばれた??? いったいどういう事だろう。結局
そのおじさんにドリンクのオーダーの仕方も教えてもらい、どうに
かレッド・アイを注文し、ようやくおじさんと乾杯をすることがで
きた。その後はおじさんがニコニコと、先程まりあさんと一緒に行
ってきたレストランの事や、美味しかった料理のこと、こないだ行
った出張先での不味いレストランの面白話などを話してくれて、私
はただただ、おじさんの面白い話に夢中になり、すっかり楽しませ
てもらった。

「あのお・・・まりあさんから私のこと聞いたって、本当ですか？」

ある程度お酒が進み、話にひと段落ついたところで、私はおじさ
んに思い切って聞いてみた。

「ああ、そうだよー。まりあちゃんの後輩なんですよ？まりあちゃ
んはすっかりベテランだからさあ。誘い方も上手になってね。つい
つい誘いに乗っちゃたよ。僕ね、水商売初心者の女の子が大好きな
んだ。」

おじさんはニコニコと、ちょっぴりお酒で頬を染めながら話す。

「初心者が好きっていうよりは、初心者の子の成長を応援するのが好き、なのかな。」

「応援・・・？」

私は半分以上に減ったおじさんのグラスに氷をいれ、また水割りをはじめた。

「うん。夜のお仕事初めての女の子で、この子は！と思った女の子を指名して、人気嬢になっていくのを応援するのが好きなんだよ。しかもね、面白いことに僕が指名した子はみんなお店のナンバーワンになるんだよね。」

「ナンバーワン！？それじゃあ、まりあさんは・・・」

「はははは。今日入ったばかりじゃまだわからないよね。まりあちゃんは凄く人気があるんだよ。そんな彼女も、最初に会った日は君と同じで初めての水商売、初出勤の日だったんだ。」

ま、まりあさんが、ナンバーワン・・・。確かに、もともとスタイルもよくて、学校でも結構モテたし、綺麗な顔立ちだとは思ってたけど。まさかナンバーワンとは。

「まりあさん、綺麗ですもんね・・・」

思わず感嘆と、どこか諦めの入ったため息をついた。舞台や芸能界もそうだが、夜の世界も、私なんかが働ける世界じゃないのかなと。

「・・・確かに彼女は綺麗だけどね。必ずしもナンバーワンがお店で一番綺麗だとか、一番可愛いからナンバーワンになれるわけじゃないんだ。僕も女の子を綺麗とか可愛いだけで選ばないんだよね。何ていうかな・・・直感かな？この子がどんな成長をするのか見てみたいっていう、只の興味かもしれないけど。まりあちゃんなんて、出会った初日は・・・」

「ちよっと！飯岡さん！余計なこと教えないでよお！」

おじさん・・・飯岡さんと言うらしい。飯岡さんが何か言いかけた時、まりあさんがやって来た。

キラキラとラインストーンが散りばめられた、真っ白いロングドレ

ス。まりあさんの綺麗なボディラインがくつきり強調され、とても素敵だった。くるくる巻き上げた髪はハーフアップにされ、お姫様みたいな小さなティアラがちよこんと乗せられていた。まるで本に出てくるお姫様……。恥ずかしいのか、ちよつと顔を赤らめているのが本当に可愛らしいと、女の私でも思った。

まりあさんが飯岡さんの隣に座るので、私は席を移動し、二人の対面のスツールに腰掛けた。

「いいじゃないかー。せっかくミキちゃんの初日なんだから。なあ？」

「えっ！？ いや……。そのお」

私は恐る恐るまりあさんのほうを伺う。

「もう！ その話は、お店のみーんなが知ってるから、別にいいんですけど。まりあの中では、もう忘れたい話だったのになあ……」

そういつて、まりあさんはちよつと頬を膨らませるた。

「はははは。そう怒るなよ。ドンペリ1本で勘弁してくれるかな？」

「えー。今日はミキちゃんの初出勤の日なのに、ふつーのドンペリ1本だけえ？」

「まいったなー。じゃあドンペリのゴールドなら許してくれる？」

そんなやり取りが交わされ、目の前にはシャンパングラスとドンペリのゴールドとやらが並んだ。これが……。TVとかでよく見るドンペリってやつかあ……。なんだか緊張しちゃう。そもそも普通のドンペリとゴールドってどう違うんだろ？

三人で乾杯し、初めてのドンペリのゴールドとやらを飲んだ。なんだかちよつと、苦くてきついお酒だった。

「……。それでね、まりあちゃんの初日。もうびっくりしたよー」

お酒が進みさらに饒舌になった飯岡さんが楽しそうに話す。

「まりあちゃん、初日はミニスカート丈のドレスだったんだよね。初日にかかわらず一生懸命お話してくれて、その時点で結構印象は良かったんだけど……。僕がトイレに行くので一緒に席を立ったとき、ポトツとね。床に落ちたんだよね。」

「そう。ちょっと店服のドレスの胸元のサイズが合わなくて、ぶかぶかでね・・・」

お、落ちた??

「なんだと思う？僕初めて見たよ。ボトツと、肌色の楕円形のものが・・・あれが世に言うヌーブラなんだって初めて知ったよ！いやーいい勉強になった！」

飯岡さんと一緒にまりあさんも笑う。

「ね。勉強になったでしょ？ヌーブラはずっとつけてて、汗かくとはがれてきちゃうのよ。もう、本当にはずかしいー。ミキちゃん、絶対に誰にも言わないでね！」

「は、はい・・・」

笑いたいのをこらえて、控えめに笑いながら返事をした。ヌーブラ落ちるなんて、なかなか無いけどなあ・・・

「あのまま一緒にいれば、そのうちパンツも落とすんじゃないかと期待したんだけどね。」

「こらっ。ミキちゃん居るんだからエロ禁止！」

まりあさんがふざけて飯岡さんの頭をどつく真似をする。なんか、まりあさんと飯岡さん、本当に仲が良いって感じた。

「いやー嘘嘘！・・・あの一瞬でね、僕の中では決まったんだよ。ヌーブラなんて、そう簡単に落ちるもんじゃないよ。それだけあの日緊張して、冷や汗かきながら接客していたのかと思うとなんか応援したくなってね。ヌーブラも綺麗に手入れされてたようだけど、随分年期が入った物だったし。そりゃあ粘着力も落ちるよ。落とした瞬間、まりあちゃん真っ赤になって泣きそうになっちゃったもんだから、思わずその場でボーイ呼んで『このままこの子を指名する』って言っちゃったよ。まりあちゃんは、ぱっと見た感じじゃ綺麗で華やかで、派手な生活してるように見えるのに、その辺のギャップも好感が持てたのかなあ。」

飯岡さんはグラスのシャンパンを飲み干し、さらに赤くなった顔をくしゃっとして私に微笑んだ。

「見た目の綺麗さも、ある程度は大事なんだけどね。それだけじゃないんだ、この仕事は。だから面白いし難しいんだよ。」

「見た目だけじゃない・・・？」

目をぱちくりしている私にまりあさんがささやいた。

「まあ色々、ね。そのうちわかるわ」

色々・・・かあ。そう私がつぶやこうとした時、またもやボーイが現れ、まりあさんに一言何か話すと、まりあさんは私に『じゃあ、またしばらくよろしく♪』とだけ言い残し席を立てしまった。

見た目だけではないって、一体どういうことなんだろう。一番可愛くて、綺麗な人がナンバーワンになるものじゃないの？ますますもって、夜の仕事への不思議は増えるばかりだった。

5、時給

「お疲れ様でした！」

水商売初日。仕事が終わったのは午前0時過ぎだった。結局今日は最初から最後まで、まりあさんのお客さん・飯岡さんの席に着いたまま。たまにまりあさんが戻って来ては一緒に話し、まりあさんが再び席を外したら飯岡さんと談笑する。。。といった感じだった。着替えをしようとメイクルームに向かうと、ほかの女の子達もまばらにメイクルームにやって来た。もうすでに帰ってしまった子もいるのか、始業時よりも随分と少ない。

・・・結構、労働時間って融通効くのかなあ？慣れない夜仕事で、正直もう眠い。飯岡さんの席で、あのジャンパンのあとも、ピザだのポテトだのフルーツだのかなり食べさせてもらって、お腹もいっぱい。酔いもだいぶ醒めたけど、ちょうどいい具合に気持ちよく、眠くなってきたのだ。この時間、いつもならお風呂からあがってTV観てるか、すっかり眠っている頃だし。

「あ！ミキちゃん、着替える前にこっち、店長室に来て！」

大きな声で呼ぶのは、出勤前に外であった小太りのボーイ・宮道だった。またもや宮道の案内でフロアの奥の扉から店長室へ。

「失礼しますー。お疲れ様です。」

「おう！お疲れ！そこ座って！」

なにやら書き物をしていた手を止め、店長が机から顔をあげた。店長室といっても、ほんのタタミ数畳分しかない、パソコン機器やら雑誌やら、ごちゃごちゃとした事務室のような部屋だ。

「あ。これ・・・まりあさん？」

あれこれあたりを見回していた私の目に飛び込んできたのは、壁に飾られた大きな・・・ポスターのような写真だった。そこに写るのは、多少化粧や色々な効果でかなり美化されているが、さっきまで

一緒に席に座っていた、まりあさんだった。化粧品のコマーシャルかポスターかと思うようなポーズ。そこには『club MOON 櫻井まりあ』とでかか文字がのっかっていたのだ。飯岡さんの話から、まりあさんがナンバーワンだってことはわかったけど、まさか本当に・・・そしてこんなポスターまであるとは、かなり驚きだ。これだったら、下手に売れないタレントやアイドルなんかよりずっと目立つし、それらしい。

「そう！これは今年の、まりあのカレンダーの時に作ってもらったやつ。まりあに聞いてなかったんだ？あいつがナンバーワンだってあ、忘れないうちに。これ今日の給料。」

「は、はい。ありがとうございます。」

中身を確認すると・・・福沢諭吉が2枚と、小銭がいくつか入っていた。た、たった4時間で！！？？単純計算だと、時給5,000円くらい！？

店長が差し出した領収書にサインをする。毎日働いたら、いったい月にどれだけ稼ぐことができるんだろう・・・。

「いやー、まりあはさあ、凄かったよ。入ってたった2週間で、前のナンバーワンだった奴を追いぬいちゃってさ。もう伝説だね。」

「に、2週間！？」

おお・・・。2週間なんて・・・どうやってそんなできるんだ！？

「ミキちゃんは、今日は働いてみてどうだった？やる気になった？できそう？」

そんな2週間の伝説を聞かされると、なんだか私にできるものなのかと不安になり・・・すぐに店長の問いに返事をする事ができなかった。

「まあ、まりあは特別だとして。2週間でそれだけ成績出せる子なんて滅多にいないから、安心して。それに・・・まりあから言われたんだけど、まりあ専用のヘルプで出勤するなら、それでもいいよ。時給も保障できるし。」

「専用の、ヘルプ??」

「うん。今日みたいに、まりあのヘルプに専用に入ってもらう子でこと。まりあ指名のお客さんの席には、まりあが認めた子……つまり決まった子しか着けないことにしてるんだ。もちろん、ミキちゃんにも新規のお客さんも掴んでもらいたいから稼働してない時は、どんどんフリーの客につけていくけど。どお？」

どうも何も……意味がよくわからないので、断ることもできないというか……。

私がまたもや返事に困っていると、店長が畳み掛けた。

「ぶっちゃけ、時給って人それぞれなんだ。初めて歌舞伎町で夜働こうと思って提示される時給なんて、実は他の子と比べてめちゃくちゃ安く叩かれたりするんだよ。その点、まりあの専用ヘルプだったら、まりあと上手く仲良くやってりゃ、ある程度高い時給も保障されるし、楽だと思うよ。初心者で最初からこのいい環境で始められるなんて、ラッキーだとおもうけどなあ。」

「じゃあ、それでおねがいします……。」

なんだか半ば強引に決められた感じだったけど、時給5,000円も、もらえることになったのは良かったのかな？

「ああそうだ。絶対他の子に自分の時給とか、いくら給料もらってるとか話すのは、この世界絶対に駄目だからね。人によってみんな時給違うから。」

「は、はい……。」

この世界絶対に駄目って……。そんなに時給って違うものなのかな。とりあえず年齢確認の為、健康保険証のコピーをとってもらい簡単にポラロイドで証明写真となるような物を撮り、預かってもらっていた荷物と私服を受け取り、店長室を後にした。

人がほとんどいなくなったメイクルームに入ると、始業時より雑然と、あちこちにサンダルや脱ぎ捨てたストッキングやコンビニの袋などが転がって、ゴチャゴチャしていた。

「おつかれ。」

「まりあさん!？」

メイクルームの端の椅子に、すっかり着替え終わったまりあさんが座っていた。

「どお？働くことにした?？」

「はい・・・。とりあえず、しばらく頑張ってみようかと。あ、まりあさん専用のヘルプだって。ありがとうございます。」

着替える手を急がせながら答えた。

「うん。よろしくね。飯岡さんも凄い喜んでたし。ミキちゃんのこと、気に入ってた。」

「あ・・・ありがとうございます。」

ジャケットをしめ、急いでストールを巻く。

「送りの車出るよー!ミキちゃん、早くー!」

この大声は、宮道というボーイの声だ。すっかり宮道は『小太り・大声』というイメージで定着しちゃったな。

急いで荷物をまとめてメイクルームを出ようとする。が、まりあさんは悠々と動こうともしない。

「まりあさんはまだ帰らないんですか?」

「うん。これからアフターだから。まだ帰らない。お疲れさま。またね。」

「お、お疲れ様です・・・」

仕事中に客席で見た笑顔とは違って、疲れきったかのような笑顔だった。

そりゃナンバーワンで働いてれば、さすがに疲れるのかな。

私はものすごい眠気と戦いながら、急ぎ足で宮道の案内で送りの車へ乗り込んだ。

明日から本格出勤。とりあえず頑張るぞ。

6、ヘアメのさっちゃん

次の日の朝、目覚めたのは10時過ぎ・・・平日にこんなにゆっくり起きたのは久しぶりだ。

「稽古は明日から、かあ・・・」

出演が決まった舞台の稽古は明日の夕方から。大体夜9時には稽古は終わる。稽古場も中野近辺とあって新宿と近いこともあり、稽古後急げばなんとか『MON』には出勤できそうだった。そのあたりの時間の融通なども、今日出勤してから店長と色々話す予定。

今まで働いていたファミレスは、この舞台のオーディションの為に突然休んだ為、先週であっさりクビになっている。ぶっちゃけ夜の仕事が嫌だとか、合わないとか、そんなことを言ってる余裕はなかったのだ。それに・・・

「チケットノルマ40枚かああ。」

3,500円のチケットを40枚＝14万円、いきなり今月末には必要なわけだ。もちろん、40枚分全部定価で売り切れば全く問題がないのだが、そうもいかない。だいたい芝居仲間でチケットをお互い売りさばく時は、若干値下げして買ってもらおう。定価3,500円なら、良くて3,000円かな？もちろん知人・友人に買ってもらう時も、なんだかんだ定価では売らない。安く売っても枚数売って観に来てもらう方がなにかと良いからだ。ある程度知名度のある俳優さん・女優さんなどは中規模の劇団の公演チケットな、手売りで200枚以上さばいたりするという。もちろん、その人のチケット販売数＝いい役・・・という図式が無いわけではない。舞台だって赤字がでるよりは黒字のほうがいい。商業演劇なら儲からなければ意味は無い。そう考えればチケットが売れる役者と売れない役者、どちらが選ばれるか・・・わかりきったことだ。

もちろんそれは舞台だけではなくて、映画やドラマでもそう。実力はさておき、集客が見込める人、数字が取れる人にオファーが集

中するわけだ。

舞台に話を戻すけれど、チケットを売り切ってから、後でチケット代を制作に納める場合はまだ良いが、今回のようにチケット代を先に納めるタイプだと、自分の蓄えがなければかなり厳しい。もちろん、舞台公演中はリハーサル日を含めてバイトもできないし、衣装代やメイク用品などは基本的には本人の持ち出しなので、いつもよりも稼げないどころかお金がかかる一方だ。売れない役者仲間では借金を抱える人も結構いる。

今ならまだ11月の初め。週5日くらいでキャバを頑張れば、何とかチケットノルマ分と生活費は稼げるんじゃないかな・・・？と、電卓で皮算用してみた。

とっぷり日が暮れた頃・・・昨日と同様、7時過ぎに着くようにお店に向かった。一人で初めて足を踏み入れる歌舞伎町。ドキドキしながら早足で、昨日まりあさんと一緒に歩いたゴチャゴチャした通りを抜ける。途中、黒服の男が何人か声をかけてきたが、思いつきり早足で無視して通り抜けた。背後から『無視すんなよ!』とかいう捨て台詞も聞こえたけど・・・そんな言われ方して、誰が止まるか!と、思いとにかく真っ直ぐお店を目指して歩いた。

「お、おはようございまーす!」

「あ、ミキちゃん、おはよう! 今日からよろしくね! 頑張って!」

これもまた、昨日と同じく宮道が店の前を掃除していた。小太りの顔をクシャクシャにつぶして笑った。まったくイケメンではない宮道だが、彼の笑顔はやたら人懐っこい。

「大丈夫? 走って来たの? 顔赤いし、息切れしてるけど・・・」

「え!?! 本当に?」

私、そんなに必死に歩いてたのかな・・・。

「中に入ったら誰かいるから、ヘアメの順番とか聞いてみて。」

「は、はい・・・。」

ヘアメ・・・? ヘアメ・・・ヘアメ・・・ああ。ヘアメイクのことか? ? ? なんとなく言ってることが理解できたような気はした。知ら

ない言葉が沢山だなー。これも『業界用語』ってことかな??

店の階段を降りると、ちょうど岩村というボーイがやってきてすぐにヘアメイク・ヘアメに入るように言われ、メイクルームへ連れて行かれた。もうすでに着替えを終えた女の子がホールにうろろしていたり、メイクルームで着替えをしていた。メイクルームには昨日のギャルみたいな美容師さん?を含め3人くらいのヘアメらしき美容師さんと、ヘアメイクしてもらってる最中の女の子が居た。「今日から入店したミキちゃん、よろしくね!この人、ヘアメのさっちゃん!」

昨日のギャルみたいなヘアメの美容師さん?・・・さっちゃんがちょうど手が空いたので、岩村が声をかけた。そのさっちゃんは表情ひとつ変えずにダルそうにうなずく。

「・・・どんなのにします?」

気だるそうに私に聞いてきた。ど、どんなのって言われても・・・どんなのがあるんだ??すぐに答えない私にイライラしたのか、さっちゃんは貧乏ゆすりはじめた。さっちゃんの様子を見て、岩村が口をはさむ。

「ミキちゃんは昨日みたいな盛った巻き髪よりも、ストレートのほうが似合うと思うんだ。髪の色も落ち着いてるし。さっちゃんの腕で上手いこと清纯派ストレートヘアにしてよ!」

「・・・はい・・・」

岩村の言葉に、さっちゃんはやる気の無い返事。岩村は『よろしく!』とだけ言い残しメイクルームを後にしたが・・・終始機嫌の悪そうなさっちゃんと私は無言のまま、ただ目の前の鏡を見つめていた。

さっちゃんは全く笑顔を見せないが色も白くて、かなり可愛い。ショートパンツから見える足はびっくりするほど細くて長い。おめめもパッチリでくっきり二重。目の周りはマスカラだのシャドーだので結構真っ黒メイクで髪は金髪、ぐるぐる巻きの髪。爪もきらきらネイルをしていて、首や手首にはジャラジャラとしたシルバーの

アクセサリーをつけている。どうみてもヘアメのさっちゃんのほうが私よりもキャバ嬢らしかった。

「・・・髪の毛、結構長いですね。」

ストリートアイロンをあててたさっちゃんが突然口を開いた。見かけによらず、結構声が低くてびっくりする。タバコとかでハスキーボイスになった感じ？

「は、はい！もう1年くらいのばしてます！

本当は美容室に行くお金が無いだけなんだけど・・・。確かに気がつけば私の髪は胸の辺りよりも長くなっていた。

「・・・結構毛先ばらばらだから、ちょっと揃えたほうがいいかも・枝毛多いし。」

「・・・あ・・・はい・・・」

とほほ。プロがみたらすぐわかるんだよね。舞台終わったら美容室行きたいな。

「・・・結構、髪、黒めだから、長いとスゲー重いけど、ちょい明るくしたら色々遊べる長さかな。」

さっちゃんは手を休める事無く、鏡越しに私を見るわけでもなく淡々と話す。・・・この人、何なんだろう・・・?? 超愛想無くって、ぶっきらぼうなんだけど、言ってることは割りと親切というか・・・

「あの・・・このお仕事、長いんですか？」

実は結構いい人かな? と思って、ちょっと話しかけてみた。

「・・・別に・・・。」

え、エリカ様か!?

「美容師さんなんですか？」

「・・・」

今度は無視ですか・・・。

「や、やっぱりプロは上手ですよねえ。」

「・・・ちっ・・・」

こ、今度は舌打ち!!!?

二言、三言話して、私は、さっちゃんとの会話を諦めた。それから

しばらく私は鏡の前に置いてあったファッション雑誌を見たまま。さっちゃんは手を動かしたまま、無言の時間が続いた。

「はい、終わり。」

程なくして、ぶっきらぼうにさっちゃんと言う。

「あ……」

目の前の鏡には昨日とは別人の私が居た。昨日は違和感たっぷり、で頭が浮いていた状態だったが、今日は全然違う。ほんの少しだけ頭の後ろだけを盛ったストレートヘアで、とってもナチュラルで清潔感があった。

「ありがとうございます……」

私は、ダルそうに椅子に座るさっちゃんに礼を告げてメイクルームを出た。さっちゃんはため息をついて返事すらしてくれなかったが……。

メイクルームを出たところで私は早速岩村に捕まり、今日のドレスを選んでおいたと無理やり渡されてしまった。

「ね？俺の言ったとおりこの髪の方がミキちゃんにぴったりでしょ！？だからさ、ぴったりのドレスも選んでおいたから！」

「はあ……」

髪型はともかく、ドレスまで？なんていうか、強引だな。ドレスはちよつと自分で選びたかったんだけど……手渡されたドレスは昨日とはイメージの違う真っ白の、短い丈のドレスだった。正直、似合う似合わないよりも、サイズが入るかとかデブが目立つかどうかのほうが気になるんだけど……

おそろおそろ着替えてみる。嫌だな、太ってみえたら……いやいや、それよりサイズ入らなかつたらマジで恥ずかしいんだけど！面接時の履歴書には7号か9号とは書いてみたが、7号は入らない訳じゃないけど、ちよつとキツイ。

「……おお」

……結構、いいんじゃない！？岩村が選んだドレスは白いシフォン素材のひざ上丈のドレスで、裾はひらひらと、足がちょうど細く

見える丈の長さだった。気になるウエストラインはストンとしたデザインで体のラインを拾わずごまかせる。胸元にはひらひらとレースがついて可愛らしいが、適度に胸の谷間をみせていて、肩紐はシンプルにキャミソールのような感じの細紐。思い切り肩と胸元を出しているので逆にすっきり華奢に見えた。

昨日の紫のドレスと巻き髪は野暮ったく見えたが、今日の自分は結構可愛いんじゃないかと思った。

「良いじゃん！！あ、あとウチの店は生足禁止だから。必ずストッキング履いてね！サイズMでいいよね？あと、サンダルもこの店の使って。」

着替えた私を見た岩村がストッキングと、白いサンダルをよこした。

「あ、ありがとうございます・・・」

手渡されたストッキングを見れば・・・高級ブランドのストッキング！！タダの肌色ストッキングなのに、一足、1,500円もするシロモノだ。いつも二足525円のストッキングの陳列棚から、憧れの目で見っていた高級ストッキングだ。一速1,500円のストッキングなんて誰が履くのよ！？って思ってたけど、まさか私が履けるなんて・・・

ごそごそとメイクルームのはじでストッキングを履く。なんというか・・・やっぱり二足525円のストッキングとは履き心地が違う・・・ような気がした。つま先の切り替えが無いとか、お尻部分の切り替えが無いとか・・・そういう細かい部分はよく作られてると思った。・・・が、所詮庶民の私には一足1,500円のストッキングの違いと、二足525円のストッキングの違いはよく分からない。伝線しにくいとか、そんなのか？

生まれてはじめての高級ストッキングを履いた私は、再びフロアのソファに腰掛ける岩村のところへ行こうとした。

「あ・・・」

ちやうどメイクルームを出た時に、帰り仕度をしたヘアメのさっ

ちゃんと鉢合わせた。もここのニット帽をかぶり、黒いショート丈ダウンを無造作に羽織って、これまた無造作にヘアメ用品が放り込まれた大きなバッグを担いでいた。

「お、お疲れ様です・・・」

とっさに頭をさげて挨拶をする。

「・・・おつかれ・・・」

怒ってる訳じゃないんだろうけど、相変わらず不機嫌にさっちゃんへ答えた。ヘアメの時で、さっちゃんとはあまり会話はできないとわかったので、再び小さく会釈してさっちゃんの横を通り過ぎようとした。

「・・・その安い時計、合わない。」

「え!？」

すれ違い間際、さっちゃんが再び口を開いた。こ、この時計・・・確かに高級じゃないけど、20,000円くらいで高校卒業の時、自分へのお祝いに買ったものなんだけどな・・・見た感じもシルバードでシンプルな時計なので色んな服に合うから重宝してたんだけど。

「でも、これは・・・」

私が言いかけた時、さっちゃんが不機嫌にさえぎった。

「安物ならさ、しないほうがいいって・・・金持ちの客に、時計、持ってないって言えばいいじゃん。・・・そんなんつけてたら、あんた安モンのままだよ。」

「・・・あの。」

「安モンの女の髪なんて、いじりたくないんだけど。」

「・・・」

ポカーンとしている私をよそに、さっちゃんはスタスタと店を出てってしまった。

安モンの女って・・・店の女の子は十分怖いとは思ってたけど、ヘアメも十分怖いって!!!ヘアメのさっちゃんって、一体何者なの!?!なんていきなり、そこまで文句言われなきゃなんないの!?!

・
。『MOON』出勤一日目・・・なんだか、大変な予感がある・・・

7、担当・岩村

「安い女…」

ヘアメのさっちゃんを通り魔的な一言に、高級ストッキングに浮かれていた私の気持ちは一気にどん底まで落ちてしまった。

そりゃ、高級ブランドの服とかバッグとかアクセサリーなんて、全く持っていないけどさあ…

そう言い聞かせながらも、昨日店に来た時の宮道の言葉も蘇る。やっぱり私、他の子に比べると貧乏くさいのかな。うう…

浮かない顔でフロアのソファで待っていた岩村の所へ戻った。

「あ、あれ？すっかりテンション下がっちゃってるけど、どうしたの？」

「あのー…」

先ほどの出来事を岩村に話してみた。

「あー…さっちゃんか。」

岩村は苦笑いをして、ため息をつきながら腕を組んだ。

「ごめんね、ミキちゃん。さっちゃんはね、悪い子じゃないんだけどさあ…なんていうか、口が悪いっていうか、表現がストレートすぎるっていうか…」

岩村は困ったように苦笑いを浮かべたまま。

「でもねえ、さっちゃんはある程度見てヘアメの腕は超上手くてね。引っ張りだこなんだ。今日もこの後、新作ドレスのネット通販の撮影にヘアメで呼ばれててさ。知らないかな？ドレス屋の社長兼モデルもやってる姫華ななって子。」

姫華なな…あ、知ってるかも！？キャバ用のドレスのデザインとか、服のデザインもしてる元・キャバ嬢のギャル社長だ。

「その姫華ながさあ、さっちゃんをメチャクチャ気に入ってね。さっちゃんのヘアメじゃないと絶対にどの雑誌でもテレビでも出た

くないっていうんだよね。この歌舞伎町でも、さっちゃんにヘアメしてもらいたい売れっ子嬢や、雇いたい店は沢山あるんだよ。」

「そう…なんですかあ…」

それであんなに尖った性格なのか。

「まあ、さっちゃんの言動は良いとは思わないけど、さっちゃんは長年、夜の世界の売れっ子を沢山見てきてるからね。言ってることも、結構凶星だったり、的を得てる事が多かったりするよ。」

「う…」

私の貧乏臭いのは、さっちゃんだけに指摘されたわけじゃない…。わかつちやいるけど、改めて自分にへこむ。

「まあ、気にしないで。さ！ミーティングするよ！ミキちゃんには今日からしっかり頑張ってもらうから、お店のルールとか色々説明するから！」

「は、はい。」

岩村は目の前に新品のファイルと、新品のノート、ホチキス留めしてある薄い冊子を2冊並べた。

「今日からミキちゃんの事は、俺が担当としてしっかり育てるから！これは今日からミキちゃんに使ってもらう名刺ファイルと、顧客管理ノート、うちの店の就業規約と、俺が作った接客マニュアル！」「ええっ!？」

「就業規約…お店のルールはしっかり覚えてもらわないと、トラブルの元だからね！いくらまりあさんの専用ヘルプだからって、ルールは一緒だからね！」

た、担当って何それ？それに、名刺ファイル！？顧客管理ノート!??？そ、それから就業規約と岩村さんが作った接客マニュアルって、何!??

これ…就業規約と接客マニュアルって、絶対に全～部覚えなきゃいけないの？

薄手の冊子とは言え、舞台のセリフもこれから覚えなきゃいけないのに、また覚えることが…そう考えたら頭がクラクラしてきた。

8、商品

岩村考案、接客マニュアルと、『MOON』の就業規則を目の前に、頭が真っ白になった私・・・。

「まず何でもルールは守らなきゃね！」

就業規則には事細かに禁止事項が書かれていた。

- ・ヘルプの席では指名の子の了解無しにお客様に自分の番号やメアドを教えるはならない、とか
- ・ヘルプの席では基本的にヘルプはタバコ禁止（私はタバコ吸わないから、これはあんまり関係ないか）、とか
- ・店での衣装は週に2日以上、黒色の衣装を着てはいけない（なんで？）、とか
- ・お客様に他の女の子のプライベートな話をべらべらしゃべってはいけない、とか
- ・無断欠勤は罰金2万円、当日欠勤は罰金1万円、週末・イベント日は罰金2倍（怖わあああ！）とか、
- ・遅刻は30分につき時給の1/2罰金、とか
- ・イベント日・強制同伴日にノルマ達成できないものは日給半額。数ヶ月改善が見られないものは解雇。（おおおお！？解雇！？）とかとか色々・・・。

まあ、なんとなく理解できるものもあれば、水商売初心者の私には、まだ理解できない規則も色々あった。

時給が破格に良い世界だけど、罰金の内容も破格なものにはちよつとびびった。それにイベント日とか強制同伴日って?????またもや謎の恐怖ワードが登場しちゃったよ。ま、ね・・・世の中、そんなに上手い話はないんだよね・・・。

「ウチの店は歌舞伎町でも時給が高いお店だけどね、その分キャストのみんなに要求することもレベルが高いんだ。あ、あと規則で重要なひとつが・・・店内恋愛禁止!」

「て、店内恋愛!?! お客さんとですか?」

「違うよ! お店の・・・まあ何ていうか、俺たち黒服とか男子従業員。」

岩村はそういつて、わざとらしく髪をかきあげた。・・・正直・・・
・・・キモい(笑)

「・・・ぷっ・・・! 無理ですよーあはははははは!」

思わず笑い転げてしまった。いや、岩村は別に不細工でもないし、わりとカッコいいほうだと思うけど・・・いや絶対に誰もあり得ないでしょ。宮道とかもつと無理だし! あ、でも・・・店長は割りとカッコイイほうかな。ワイルド系っていうか・・・。

「・・・あのね、ミキちゃん、そこまで笑わないでくれる?」

「ご、ごめんなさい・・・だって・・・」

苦笑いの岩村がちよつとふてくされた。

「とにかくね、店内恋愛は禁止。ばれたらキャストは即クビ! 男子従業員は罰金100万だからね。」

「ひっ100万・・・ですか!?!?」

明らかに桁が違う罰金額に、あごが外れそうになった。

「コンビニだつてさ、店員が勝手に店の商品もって帰ったり手をつけたら、いけないだろ? キャストはね、お店にとって大切な商品なんだよ。俺たち男子従業員の仕事は商品を磨き上げてお客様に提供すること。キャストが気持ちよく接客できるような環境づくりも俺たちの仕事。原石を見つけ出して、磨いて、ダイヤモンドにするのも俺たち仕事なんだ。ああ、ダイヤになるには本人の努力も絶対必要だけだね。」

私たちは、商品・・・そうか、タレントさんや女優さんも自分自身を『商品』として仕事をしている。それと、同じことなのかな?

「素のままの自分で接客勝負できる子は、そういないんだ。だからキャストのみんなには自分を商品って自覚して、自分磨きをしてもらいたいし、キャストとしてお客様が満足するように演じて、接客してもらいたいんだ。おとはちゃん、女優目指してるんでしょ？じゃあ、言ってることって、よく分かるよね？」

「はい。・・なんだか今の説明、凄くよく伝わりました。」

素のままの自分で接客勝負できる子は、そういない・・か。まりあさんも演じて接客してるのだろうか？いったいどんな『まりあ』としてお客さんの前にいるのか・・。先日飯岡さんの席で一緒になった時は、至って普通の・・私が昔からよく知る由美先輩Ⅱまりあさんだった。そういえば学校に居る頃とくらべて、まりあさんは今はテンションが高くなった気がするけど・・それも『まりあ』を演じ続けてる影響なのかな？

「わかったところで・・・岩村特製・接客マニュアルを今日から実践してもらうから!!」

にかにかと、もうひとつの冊子を手渡す岩村。

「まりあさんの専用ヘルプといえど、まりあさんがお休みの日やヘルプが間に合ってる時はフリーのお客様や他の子の指名の枝にもどんどん着いてもらうからね！ちなみに。毎週木曜日はまりあさんお休みだから。」

「え？木曜？・・じゃあ今日は・・」

今日は間違いないく木曜日だ。

「ビンゴおー！じゃあまず、今日は初級編からいってみよっか！」

「ええっ」

「このマニュアルはね、おれの7年の水商売人生で学んだものをまとめた、いわば『売れる法則』の集大成！？ふふふ。」

なんだかちょっぴり、この岩村って人は自分に酔ってる感じするんだよねえ。中身は分からないけど、自画自賛とか・・・ともあれ、水商売初心者の私にとっては、何でもありがたいことには変わらないのだ。

「よろしく・・・おねがいます・・・」

なんだかよくわからなけど、お店が開くまでの時間に、『岩村特製・接客マニユアル初級編』を、みっちり叩き込まれることになった。

9、スーパーヘルパー

開店までの小1時間・・・みっちり『岩村考案・接客マニュアル
初級編』を特訓されたワタシ。

結構役立つものから、今の私には『そんなこと何か意味あるの?』
という物まで色々あった。お客様への挨拶の仕方、席の座り方、ラ
イターの火のつけ方、灰皿の交換のタイミングや片付け方、テーブ
ルクリーニングやお絞りのたたみ方に至るまで・・・それから、ボ
ーイさん達への『灰皿』とか『おしぼり』とかのサイン?とかもね。
本当に細かい接客マニュアルだった。本当なら開店まで時間がある・
・予定だったものだから、仕度が済んだら軽くご飯でも食べようか
と思っただけど・・・そんな時間はもう無さそうだった。買っでき
たコンビニのおにぎりは持って帰って家でたべようかな。

それはそうと今日はまりあさんが休みの日だったのか・・・誰
も知ってる人が居ないと、やっぱりちょっと不安だな。私は昨日と
同じく待機席へと移動した。開店時間に合わせて続々と仕度をすま
せた女の子達が待機席に集まっていた。私も座ろうと、空いた席を
探していた時・・・

「あ!ミキちゃん!こっちこっち!」
「?」

ソファの端に座っていた女の子が声を掛けてきた。

「はじめまして!あたし、アキラ!ミキちゃんも、まりあさんのヘ
ルプなんでしょ?隣座って!」

私と年は同じくらい、色白で茶色い髪をグルグル巻いた盛髪にし
た、ちよつと綺麗な顔立ちの子だった。ミキちゃんも・・・ってこと
は、このアキラさんも、まりあさんのヘルプなのかな?

「今日はまりあさんが休みだから、ヘルプの子もほとんど出勤して
ないからさー!よかった、ミキちゃんが居て!」

「う、うん。」

そう言うときアキラさんは自分の名刺を取り出して、なにやら書き始めた。

「はい、これ。あたしのメアドと電話番号！まりあさんのヘルプの子同士、結構仲良くやってるから、よろしく！あ、ミキちゃんのも教えてー」

「あ、う、うん・・・」

なかなか積極的な・・・私はすっかりアキラさんのペースに飲み込まれていった。アキラさんは本当に気さくで、私が夜の仕事はじめてだと話すと色々教えてくれた。

「この店はね、店長が3年前に立ち上げたお店なんだ。ここ大箱のお店だから、オープン頃すっごい話題になったんだよ」

「へー・・・アキラさんはオープンから居るんだ？」

「あ、アキラさんってやめてよ。アキラでいいって！」

アキラ・・・っていきなり呼び捨ては言いづらいなあ。アキラさ・・・アキラちゃんはタバコを取り出し火をつけた。

「うん。もともと前は上野のお店で働いてたんだけど、そこに店長とオーナーがよく飲みに来ててね。で、一応スカウトされてきたわけ。」

「オーナー？」

オーナーって、まだ会ったこと無いけどどんな人なんだろう。やつぱりこういうお店のオーナーって、そっち系の・・・怖い人！？

「オーナーは闇金とか色々仕事やってるんだって。オーナーはさ、アタシが売れる子だと思って上野からスカウトしたみたいなんだけど、残念ながら、アタシお客さんにメールとか電話とかデートとかして営業する気全く無い子だからあ。どこ行っても最初は見た目だけで結構いい待遇してもらってるんだけど、全然指名とらないからがっかりされるんだよねえ。」

そう言っときアキラちゃんはイタズラっぽく舌を出した。

「まあ、『スーパ―ヘルパー』って感じ？営業は全くしたくないけ

ど、ちゃんと席ではキレイな接客はするからねー。どんなお客でも、とりあえずこなせるから。ヘルプ専門って、しょぼく聞こえるけど、どんな人にも合わせるって、結構大変なんだよ。」

「はぁ・・・」

スーパーヘルパー・・・か。ヘルプも結構大変そう。

先ほどの岩村の接客マニュアルを使った特訓？の際も、似たような事を言ってた。ヘルプの仕事がちゃんとできない子は指名を取ることはできない、って。昨日席に着いた飯岡さんはとってもいい人だったけど、難しい人もいるんだろうなあ・・・

「アタシ達、まりあさんが居る日は、まりあさんの専用のヘルプだけど、それ以外の日は他の子と一緒に。フリーにも付回されるし、他の子のヘルプにも平気で使われるからねえ。だからまりあさん休みの日はチーム・まりあメンバー少ないんだよね。アタシはお金稼ぎたいからそれでも毎日出勤するけど。」

「・・・あの、結構難しいお客さんとかもいるの？」

ちよつと小声でアキラちゃんに聞いてみた。

「・・・ああ、それは色々・・・」

その時、宮道のドでかい声が響いた。

「いらっしやいませー!!!」

お客さんが来店したようだった。お客さんらしいヒョロリとしたスリッ姿の中年の男の人が見え、その後ろには、ばっちり化粧をした背が高い女の子が歩いてきた。肌の色はちよつと黒めだけど、手足は長く、健康的なカンジ。今流行の顔立ちだった。

「うわ、最悪!・・・ゆいちゃんの常連のお客の千葉さん。ほぼ毎日通ってくるんだけど。あの客、ゆいちゃん意外の子とは全くしゃべろうともしないし、超むかつくことばっかり言うからみんなヘルプに入らたがらないんだよ!」

アキラちゃんが早口に私の耳元でささやいた。あきらかに待機席の他の女の子も嫌々な顔をしてひそひそ話す子や、わざとらしく突然お客さんに電話し始める子、トイレやメイク直しに席を立つ子が

増えた。・・・ほ、本当に嫌われてるお客さんなんだ。

「たぶん、うちのどっちか使われるよ。」

「ええっ！？そ、そんなの私、無理無理・・・！！」

「だってまだミキちゃん、千葉さんに着いたこと無いじゃん。岩村だったら、絶対今日はミキちゃんをヘルプに入れると思うなー。」

うわさをすれば・・・岩村が意気揚々とやってくるのが見えた。

「はい！ミキちゃん、出番！！！！！！」

「ええええっ」

アキラちゃんは身をよじって笑いを堪えてる。私はもう本当に心臓がバクバク飛び出そうなくらい緊張していた。そういえば、この広いフロアで接客するのも今日が初めて。・・・なんだか、だだっ広くて、他のボーイさん達から丸見えで接客するのって、凄く緊張する。うわさの千葉さんというお客さんは髪の毛をびっちりオールバックにし、不機嫌そうに腕組みをしてソファに座ってた。

「いらっしやいませ。はじめまして。み、ミキです。」

私はさっき練習させられたばかりの挨拶を、ぎこちなくした。

「・・・・・・・・・・」

えっ？あれ？千葉さんは私のほうを見ることも無く、フロアをキョロキョロとしては『ちっ』と舌打ちをした。挨拶が聞こえなかったのかな、と思い、私はもう一度挨拶をした。

「・・・お前、しつこい。」

「え・・・あ・・・。す、すみません・・・」

な、なんだか難しそう・・・。

昨日はたまたま良かったけど、今日はなんだか大変。この千葉さんってお客さんのこと、ちゃんと接客できるのかなあ・・・。

10、近寄る女

指名嬢・ゆいちゃん以外の女の子とは、全く喋ろうともしない千葉さんというお客さん……

私はとりあえず、千葉さんの対面のスツールに腰掛け、お酒を作り始めた。テーブルの上には焼酎のボトルが用意されている。なんだっけ、よく居酒屋とか色々なお店で見る、緑の瓶の焼酎だ。

「焼酎の水割りでもいいですか？・あの、薄めに作りますか？濃い目にしますか？」

お酒の作り方で、またまた機嫌を損ねないようにと、あらかじめ聞いて見た。

「……ちっ……」

ま、また舌打ち……。困ったな。答えてくれないなら分かりようも無いので、とりあえず自分が考える『普通』な感じで焼酎の水割りを作ってみた。

「……おい、おれウーロン割りなんだけど。」

「ええっ！？す、すみませんっ！！」

だったら早く言えよ！と、思いながらも、一生懸命笑顔を作り、ボーイさんに新しいグラスを持ってきてもらった。相変わらず千葉さんは不機嫌に腕を組み、私のほうは一切見ようともしない。歳もそう若くない……40代位？ぎすぎすにやせた感じで、イライラしてるのか落ち着き無く貧乏ゆすりをしている。

「……い、いらっしやいませ……」

私は自分のグラスに水を注ぎ、乾杯をしようとしたが、千葉さんはグラスを持って一緒に乾杯してくれる様子もなかったの……一人で乾杯の格好だけしておいた。

「あ……今日は、ゆいさんと同伴だったんですね……。どこに行っただんですか？」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・えっと・・・私、今日から入店したんです。まだ色々分からないことだらけで・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・き、今日は寒いですよねぇ・・・」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

完全、無視。一生懸命なんとか会話の糸口を探ろうと色々話しかけてみたけれど、すべて撃沈。今日はついてない日なのかな。ヘアメのさっちゃんといい、この千葉さんといい・・・・。千葉さんは相変わらず腕組して、終いには目を閉じて私の話も聞くつもりも無い様子だった。

そりゃあ、お気に入りの子が来ないと面白くないだろうけど・・・・だからって他の子に嫌な態度とって、何か楽しいのかな、この人。裏ではお店の他の女の子達にも嫌われまくってるのに。

無言の時間が長く、長く感じられた。たまに千葉さんのグラスの水滴を拭いては、また二人黙って座ったまま。その間にフロアには他のお客さんたちが次々入り、わいわいと、にぎやかな笑い声が響いてくるようになった。そんな中、このテーブルだけシーンと、静まり返った異様な空間だった。向こう側のテーブルにはアキラちゃんが座っていた。私の様子を見たアキラちゃんは苦笑いをし、『がんばれ』と私に口パクした。がんばれて・・・・頑張ってるけど、そろそろ辛いなあ。ゆいさんまだかな。

「おまたせえ〜！」

沈黙が続き、どうしようも無くなった頃、舌ったらずな声が割入ってきた。振り向くと黒いドレスに、背が高い女の子・・・・さっき入り口でちらっと見たゆいさんだ。ドレスに着替えたゆいさんがようやくやって来たのだ。千葉さんはゆいさんの姿を見ると目を開け、腕組を止め、ニヤニヤとし始めた。

・・・・分かりやすいおじさん・・・・。

「ミキちゃん・・・」

ちょうど良いタイミングで岩村が私を呼びに来てくれた。私は早々に千葉さんとゆいさんに挨拶して、すぐさま席をたった。もうこれ以上はさすがに無理だ・・・。

「ゆいゝ遅かったな。退屈だったよゝ。つまらない女が居たから、もう帰ろうかとおもったぞゝ」

「えーごめんー」

背後からはさっきとは打って変わった千葉さんのニヤけた話し声が聞こえてきた。・・・つまらない女で悪かったな！ったく。人のこと完全無視しといて良く言うよ。

「おつかれ様、大変だったでしょ？」

フロアの裏に入った所で、岩村が小声で話しかけてきた。

「そりゃ、大変ですよ！全然話してくれないし・・・。」

なんだか今の千葉さんの席ですっかり疲れてしまった感じた。

「ごめんねゝ。千葉さんさあ、ゆいちゃん以外の子とはほとんどしやべってくれないから・・・ミキちゃんが悪かったとか、そうじゃないからね！」

「はあ・・・。」

そうは言われても、なんだかテンション下がるなあ・・・しばらく待機席で休んでいいといわれたけど、なんだか休むどころか元気が無くなっていくようだった。出勤と時は自分なりに頑張ろうと思うってただけだなあ・・・。

フロアでは明るい女の子達の笑い声と、にぎやかなお客さんたちの様子が伝わって来る。待機席の空いた席に腰掛け、ため息をついた。時給5,000円って、凄く美味しい仕事だけど、そんなに楽じゃないんだよね。やっぱり。どの仕事も大変なんだと思うけど・・・。

「ねえねえ、ミキちゃん？・・・でしょ？」

「え？」

すっかり落ちこんだ私の横に、誰かがちょこんと座った。小柄な

感じで、色白、黒髪ショートカット、小柄な割には、けっこう肉付きはいいのか、むっちりとした二の腕と胸元、太ももを惜しげもなく披露した、ピンクのミニドレスを着ていた。私よりも随分若い・18、19歳くらいに見えた。特別可愛いとか綺麗って訳じゃないんだけど、若さあふれる感じだった。

「ここ、座っていい？」

「あ・・・どうぞ・・・」

ていうか、もう座ってますけど・・・。

「私、舞！ミキちゃん最近入ったんでしょ？私も先月入ったばかりなんだあ！仲良くしようよ！」

その舞という子は自分の名刺を私に手渡した。キラキラでラメいっぱいの名刺で、大きな文字で『水月 舞』と書かれていた派手な名刺だった。

「あれ？ミキちゃん、まだカラ名刺使ってるの？名刺頼んだ??」

「え?・・・何も・・・」

そういえば昨日いっぱいもらった、お店の名前しか入ってないカラ名刺を使ったままだった。

「名刺は好きなで作れるから、一緒に選ぼうよ！」

「ええっ!？」

そういうと舞ちゃんは、さっさと奥から分厚いファイルを持ってきた。

「はい。このファイルのなかから好きな台紙選べるんだよ。」

パラパラとめくると、中にはさまざまなデザインの手紙が並ぶ。

和紙のような和柄や、舞ちゃんが使っていたようなラメラメの手紙、金ぴかの物や、綺麗な草花の写真をあしらったもの、可愛いハート柄のものや、蝶々のデザインのものの、ゴスロリが好きそうなハードな柄から、手紙の素材自体が個性的な半透明のプラスチック製の手紙など・・・見たことも無いような名刺の手紙が並んでいた。

正直、いっぱいありすぎてすぐには決められないような・・・。「あ。もう誰かが使ってる手紙は使っちゃ駄目なことになってるか

らね。ほら、ここに付箋貼ってるでしょ？」

よく見るとあちこち小さな付箋が貼ってあり、名前が書いてある。「ほら、この緑の台紙の蝶々柄のが、ゆいちゃんの名刺でー、こっちの白地に金色の蝶々柄なのが、まりあさん！」

真っ白な綺麗な光沢のある台紙に、金色の大きな蝶々の柄に、金文字で名前が印刷されている・・・上品で、ゴージャスな名刺はまりあさんが使っていた。なんだか、まりあさんらしい名刺だった。華やかなんだけど、上品で・・・ナンバーワンらしい名刺だった。

「ねえねえ、ミキちゃんは、なんでいきなりまりあさんのヘルプになれたの??」

「へ??」

舞ちゃんが目をキラキラさせながら聞いてきた。

「ミキちゃん、まりあさんと仲良しなの? 前一緒に働いてたの? まりあさんのヘルプって、店長が決めたの?? 店長と仲いいの??」

「いや・・・そういうわけじゃ・・・」

な、なんなんだろう、この舞ちゃんて。マシガンの質問をぶつけてくる舞ちゃんに、ちょっとビビッてしまう。私だって昨日いきなり働いて、いきなりヘルプだの専用だのと話をされたばかりでよく分からないのに。

「ねえねえ、舞もお、まりあさんに超憧れてて、本当にまりあさん尊敬してるから、まりあさんのヘルプになりたいんだあ。ミキちゃんからさあ、まりあさんに頼んでよお。」

「えええっ!??」

・・・なんだか、めんどくさい事になってきた感じ???

11、ヘルプの品格

まりあさんのヘルプになりたいと、近づいてきた女・舞……

「ねえ、ミキちゃんからもお願いして〜!」

「うーん……でも、私もよくわからないし……」

ちよつと困ってしまつて、答えをはぐらかしていた。実際、私自身もどうして突然まりあさんのヘルプになったのか……学校の先輩・後輩関係であつても、特に親しいとかそういう訳ではなかったし。状況がよく分からないまま、ここに居るのだ。

「お、舞! おはよー! 遅かつたじゃん。」

しつこく迫る舞さんに困り果てていた所に、接客を終えたアキラちゃんが戻ってきた。

「おはよー、アキラちゃん。」

アキラちゃんは私の隣に座り、タバコケースを出し、火をつけた。
「……舞さん、いきますよ!」

岩村が待機席に顔をのぞかせる。

「ミキちゃん、少し休んだ? 次、お客様に着くからね!」

「は、はい!」

岩村に呼ばれた舞さんは、さつとグロスを塗りなおしフロアへと向かった。私は舞さんに手渡された分厚い名刺のファイルをぺらぺらと、台紙を選ぶでもなく、ただただめくっていた。

「ん? ミキちゃん、名刺選んでんの?」

「あ、ああ。これ、舞さんが持ってきてくれて……」

「……あー……なるほどね」

アキラちゃんは何か含みのある言い方をして、タバコの煙をフーッと吹き出した。

「あの子、気をつけたほうがいいよ。」

「えっ?」

私はファイルをめくる手を留めた。アキラちゃんは吸っていたタバコを灰皿に押し付け、話し声が周りに聞こえないようにと、顔を近づけてきた。

「・・・あの子・・・舞ちゃんさあ、結構問題起こす子なんだよね。なんていうか、野心家っていうか、野心はあるんだけど仕事はめっちゃくちやっっていうか・・・」

「野心？」

「舞ちゃん、まりあさんのヘルプになりたいって言ってなかった？」

「・・・言ってた・・・」

アキラちゃんは『やれやれ』といった顔をして、さらに小声で続けた。

「舞ちゃんさあ、入って1ヶ月になるんだけど、本指名も場内指名も取れなかったからリストラ対象になってたんだよね。18歳で若いってだけで、見た目はイマイチでしょ？うちの店結構厳しいから、初心者でもある程度見込みないと思われると直ぐにクビよ。最初の時給の保障は1ヶ月で切れて、今月は舞ちゃん時給3,000円以下って話。これ、本人がべらべらみんなに喋ってたから、秘密でも何でも無いんだけどさ。」

歌舞伎町で、しかもこのお店で時給3,000以下というのは、凄く低い時給レベルらしい。・・・あれ？確か時給がどうか言っちゃいけないって決まりだったような・・・。

「でね、焦ってやる気を出して、多少頑張ってくればクビにはならないんだろうけど、よくわかんないやり方すんのよね。ゆいちゃんのお客さんにヘルプに入って勝手に自分の連絡先教えて、自分の指名にしたり。他の女の子のヘルプに入って、その女の子には実は彼氏が居るとか、本当は何歳だとか・・・まあ余計な事して他の子が頑張って営業して来てくれたお客さんを怒らせたり、指名をダメにしちゃってさあ。」

「そ、そんなことしたら、クビなんじゃないの？」

あまりの内容に私も小声で話す。

「そうなんだけどね、むかつく事に人から汚い手で奪ったお客を、最近何人か指名として呼んだりするから・・・ぶっちゃけ、お客に簡単にやらせたりしてるみたいよ。そのお陰か、ある程度の売り上げ出してるみたいなんだよね。店としては成績だけでリストラしにくくて。店的にはどんな手を使おうと、売り上げ立ててくれれば、無理にリストラする必要も無いんじゃない？お客に言った言わないは、録音したわけじゃないから、前後の状況から考えて舞ちゃんが話した？・・・って憶測だけだし。決定的な証拠もあるわけじゃないし。」

売り上げさえ立ててればって・・・そんなのいいの！？

「でも、まあ本当はそういう営業は自分のお客にやれて話で、ヘルプの席でやること自体認識がおかしいんだよね、あの子。だから舞ちゃんみたいな子がのさばって、他の良い子達が辞めちゃうと、お店は一番困るから、これから何か手は打つと思うんだけどね・・・。そんな気配を舞ちゃんも感じているから、まりあさんの専用ヘルプになって命綱つなぎたいんじゃない？ほら、舞ちゃんにはウチら『チーム・まりあ』は、楽しんで毎日保障された時給稼いでるように見えるんですよ？」

アキラさんは呆れたようにソファに背を預け、ため息をついた。

「誰でも簡単に専用ヘルプになれるんなら、みんな苦労しないわ。まりあさんのお客さんは良い人が多いけど、指名が重なってまりあさんが数分もお客さんの席に着けない時や、お客さんが機嫌悪い時のフォローとか、アフターに行くのもどんなに疲れてても一緒に行ったり・・・私達はまりあさんに感謝してるし、大好きだから苦じゃないけどね・・・舞ちゃんが思ってるほど、そんなに楽じゃないけどな。」

再びアキラちゃんはタバコを1本取り出し、火をつけた。

「舞ちゃんみたいな変な子が、まりあさんの邪魔しないように専用のヘルプってのを店長が作ったからねー。舞ちゃんには無理、まりあさんのヘルプは。ゆいちゃんなんか、もう何人もお客さん被害あ

ってるし。そんな危険な子、誰だってお断りでしょ。」

待機席にまた何人か女の子が戻ってきた。がやがやと、多少待機席もにぎやかになる。

「ヘルプにもまともに入れないとなると、お店としては使いづらいだけだしね。」

周りが騒がしくなったからか、先ほどよりは普通の話し声でアキラちゃんが続けた。

なるほど……。岩村が言っていた『ヘルプができない子は指名を取ることもできない』っていう意味が、私にも少しわかってきた。「あ……。でも、ゆいさんそんなに被害あってるなら、ゆいさんのヘルプも専用みたいにできないの？ 舞ちゃんは絶対ヘルプに入れないとか……」

話を聞いていて、なんだかゆいさんが可哀想になってきた。千葉さんみたいな気難しいお客さんにも良く接客して、頑張ってるのに、何人も被害にあってるのか……

「……。んー……。なんていうかなあ……。人が余ってるときは舞ちゃん以外使うようにしてるみたいだけど……」

アキラちゃんは苦笑いをする。

「……。店長は今、まりあさんにぞっこんだからねえ……。ゆいちゃんの事は、もうどうでもいいっていうか……」

「……。へ？」

て、店長が……。何？？？まりあさんにぞっこん？ゆいちゃんはもうどうでもいいって……。どういう事！？私が突然の展開にポカーンとしていたところ、岩村が待機席にやってきた。

「はい！ミキちゃん、アキラちゃん！一緒に席に着くよ！！」

相変わらず岩村はテンション高い。立ち上がったところで、アキラちゃんが私の腕をつかんだ。

「……。今日、終わったらご飯行かない？」

「う、うん……」

「……。じゃ、色々な話はあとで……」

アキラちゃんは岩村に聞こえないようにできるだけ小声で、早口に話した。

「じゃあ、ミキちゃんとアキラちゃん、大手企業の方々4名様だから、よろしく!」

アキラちゃんの話の続きが気になりながら、私はアキラちゃんと一緒にお客さんの席へと着いた・・・

12、色管理

その日は、あれからアキラちゃんと一緒に大手企業の方の席に着いて、一緒に場内指名をもらい、しばらくその席で過ごした。初めてお店に来たお客さんのようだけど、みんな30代半ばの品の良い感じのお客さんで、その中の一人のお客さんと連絡先を交換をした。最後には医大生だという10人位のグループに残っていた女の子みんなを着いて、わいわい大騒ぎをして・・・わりと無事に一日は終わった。

「味噌ラーメンと、どんこつ醤油ひとつずつね!」

営業終了語、アキラちゃんに連れられてやってきた、歌舞伎町の端の寂れた感じの、小さなラーメン屋さん。夜中の3時を回るというのに、あちこちのお店が開いているのはさすが歌舞伎町。とはいえ、さすがに3時を回るとお店のお客はそう多くない。カウンターの端に座った私達はセルフで汲んだ水を飲みながら、先ほどの話の続きをした。

「店長とか岩村に、アタシから聞いたって、絶対言わないでよー。」
アキラさんはイタズラっぽく笑う。

「・・・この話は、前からお店にいる子はみんな知ってるんだけどね。ゆいちゃんと店長、デキてみたい。デキてる、のかな?まだ付き合ってるのかよくわかんないんだけど。」

「えええっ!だって、店長結構、年上じゃない!?そ、それに店内恋愛禁止って・・・」

確か店長30代半ばとか・・・そんな感じだった。ゆいちゃんってもっと若いと思うんだけど。

「だからさー。これが『色管理』ってやつよ。表向きは店内恋愛禁止なんだけどね。」

「い、色管理!？」

アキラちゃんが言うには、ボーイや店長など男子従業員がキャストに自分のことを好きにさせて、女の子のその気持ちを利用して、仕事を頑張らせ、お店を辞めたり休んだりしないように管理するのとだという。

「色管理されてるキャストはさ、その男子従業員に気に入られなくて、お仕事ももっと頑張っちゃうわけよ。そうするとお店も嬉しいし、女の子も給料増えて嬉しいし、お互いハッピーでしょ？とかいうフザケタ管理よ。・・・店長はね、もともとその色管理が盛んなプラチナグループってところで、長いこと働いてたワケ。だから『MOON』でも業績上げるためにおんなじ事してんのよ。」

・・・あの、店長が・・・！？　なんだかワイルドな感じはしたけど、そんな風に女の子の事を扱うような人にも見えなかったけどなあ・・・。

「オープンから数えたら、店長が手を出した女の子はキリ無いなあ。最初は私と同じく上野の店から引っ張ってきた売れっ子ちゃんと付き合ってた・・・他にも売れてる子とか、売れそうな子には手えだしてたなあ・・・」

ちょうど目の前にラーメンが二つ運ばれてきた。私とアキラちゃんは割り箸をわり、ラーメンにコシヨウをふりかける。

「いただきます！」

とりあえず伸びないうちにラーメンをすすする。私がとんこつで、アキラちゃんが味噌ラーメンだった。今日はどの席でもフードを食べることがなかったの、すっかりお腹ぺこぺこだ。

「・・・でね、ゆいちゃんが入ってきたのはオープンしてしばらくしてからかな。当時『MOON』は立ち上げたばかりだったから、オープンで集められた女の子達ってほぼ全員、水商売経験者の玄人集団って感じだったのね。そこにやって来たゆいちゃんは初心者で、18歳の大学生のアルバイト・・・玄人集団の中ではとびきり新鮮だったわけ。見た目モデルみたいに背が高く細身でギャル系な感じで、悪くないじゃない？直ぐにお客さんの指名も増えて・・・

売れる子だっと思ったんだろぅねえ、それで店長もゆいちゃんに手を出したってわけ。」

アキラちゃんがレンジで器用にスープをすくう。

「ゆいちゃんのほうも、悪い気はしなかったんじゃないかな？店長の女ってポジション。なんだか特別扱いって感じだし。で、そこから頑張って、1年くらい経った頃かなー。ゆいちゃんがナンバーワンになったんだよね。」

「ナンバーワンだったんだ！？」

「うん。その頃ちょうど、オープンから居たベテランが一気に辞めたのもあるんだけどね。ゆいちゃんはフツの女子大生と話せる！見たいのが受けたんじゃない？ほとんどタメ口みたいな接客で、お客さんと席で喧嘩してるとかも良くあるけど。」

器のラーメンがある程度減ってきた。私は同じく減ってきた二人のグラスに氷水を注ぐ。

「まあ、そんなゆいちゃんのナンバーワンも長くは続かなかったんだけどね。まりあさんが『MOON』に来て2週間。いきなり売り上げ・指名共にナンバーワンを奪ってったわけ。」

アキラちゃんは灰皿を探してカウンターをあちこち見渡すが、なかなか見当たらない。しばらく探して、店内の壁のよれよれな張り紙に『店内禁煙』と墨書きされているのを見て、食後の一服をするのをあきらめたようだ。しぶしぶタバコをケースにしまい、手持ち無沙汰に腕を組む。

「ゆいちゃんは接客っていうか、素のままが受けてる感じだったんだけど。まりあさんは全く逆だね。何ていうか、計算されつくした接客って感じかな。」

「計算！？」

「しばらく一緒に働くと分かると思うんだけど・・・このお客さんはこういう感じの子が好き、とか。今日はこのお客さん、こういう気分、とか。なんかまりあさんには分かるのかな。それに合わせて、まりあさん全部演じ分けてる感じ。なんかもう天性の素質みたいな

ものよね。」

天性の素質……。やはりそうでなければたった2週間でナンバーワンにはなれないよね……

「素質だけじゃなくって、まりあさん結構努力もしてるし、お客さんに対してマメだからさ。まあ人気出るのは当然かな。まりあさんみたいな接客と営業は、誰もが憧れる理想中の理想で、お手本みたいなもんよ。見た目だって、清潔感あって、美人だし。そんなまりあさんが現れたもんだから、店長の興味もまりあさんに向いちゃってね……」

……てことは、まりあさんも店長と付き合ってるのかな……？

「実際、まりあさんと店長が付き合ってるかはわかんないんだけど。これまでのまりあさんへの優遇っぷりとか、店での態度とか見てると、店長が特別な感情を持ってるのは間違いない感じ。まりあさんがやってきてから、それまで何かとゆいちゃん鼯肩だった店長が今やゆいちゃんには目もくれないからねえ。それに……」

「それに？」

私は水を飲み干し、近くにあった紙ナプキンで口元をぬぐう。

「まりあさんのお休みの木曜日、店長もお店に来ないしね。」

「あ……」

そういえば……。今日はまりあさんがお休みの日だったが、店長もお店には姿を見せていない。店長室に居る気配もなかった。シフトを決めるミーティングも、結局岩村と話して決めたし。

それって……。やっぱ二人はそういう事なの？

とても意外だった。学生の頃からまりあさんはモテていて、校内でもイケメンと呼ばれる先輩や、カッコいいダンス講師の先生、バイト先の有名私立大生などど色々噂はあったけど……。ここまで年上の、キャバの店長と付き合うなんて想像もつかない。

「まあ、あの賢いまりあさんが店長にハマッてるとは考えにくいけどね。付き合ってるにしても、割り切ってるのかなあ。対して、ゆいちゃんのほうはどうっぷり店長にハマってるからね。見てて可哀想。

大学1、2年目はまだ暇もあって良かったんだろうけど3年目になるとそうも行かないし、いままでこの仕事のせいで大学さぼったりしてたツケも回ってきて忙しいみたい。それでも毎日休まず出勤して頑張ってるんだけど、まりあさんとの差は埋まらないし、舞ちゃんみたいな変な子にはお客を横取りされるし。」

大学も休みがちで頑張ってたんだ……。なんだかそこまでしてあるゆいさん、可哀想だけど、それほど本気で店長の事、好きになっちゃったのかな……。好きな人のために頑張りたい気持ちは、女としてわからないわけでもないけど、なんか……。違うと思った。

「だからさ、ミキちゃんも気をつけてね。」

「え？」

「色管理。されないようにね。」

「ええええ！？私い！？」

私は大焦りで手を振った。まさか、あり得ない……

「初心者って狙われやすいし……。恋愛って自由だとはおもうけど、くれぐれも相手にハマらないようにって感じかな。結局、最後に身も心もボロボロになるのは女の子だからさ。そんな子、結構色々見てきてるから……。一応、忠告。」

「う、うん……」

身も心もぼろぼろに……。か。そんな女の子をたくさん見てきたというアキラちゃんの表情は、ちょっと悲しそうだった。きつと過去になにかあったんだ、とは思ったが、とてもじゃないけど聞ける雰囲気じゃなかった。

ラーメン屋を出て、しばらく歩いてアキラちゃんと別れ、通りでタクシーを拾った。ラーメンで温まった体もタクシーに乗るまでにすっかり冷えてしまった。11月の夜の街は、寒い。けど、この夜の街はもっともっと、私の心を寒くさせるような、そんな気がした一日だった……

13、お客さんにメール

初出勤の次の日、目が覚めたのは昼近くだった。

夕方からの舞台の稽古にむけて、朝ごはん昼ごはんが一緒になったような食事をする。この時間にパジャマ姿で居ることがあまりなかったのも、なんだか不思議な気分。最近はめったに見ることがなかった昼のドラマを観ながらパンを頬張る。

「あ、メール・・・」

ふいに携帯が鳴り、メールが届いた。使ってもう3年目の年季の入った携帯だ。

「アキラちゃん・・・！」

おはよう☆起きてた？昨日は遅くまで付き合わせてゴメンね！今日も出勤？

昨日メールアドレスを交換したので、さっそくメールを送ってくれたのだ。私は急いでメールの返信を作った。

「おはよう・・・今日も出勤だよ！よろしくね・・・と」

家にいると、ついついメールを打ちながら一緒に文章を読んでしまう。今日からはしばらく舞台の稽古の後にお店に出勤だ。アキラちゃんからのメールに返信を打ったあとで、知らない番号から着信があるのに気がついた。なんだろう？登録されていない電話番号から着信があるなんて、滅多にない。ワン切りとか色々あるから、なるべく知らない電話番号は出ないようにしているんだけど・・・よく見ると留守電にメッセージが入っている。恐る恐る聞いてみることにした。

『おっはよーミキちゃん！！岩村でえすっ！まだ寝てたかな？留守

電の声、可愛いねっ！起きたら電話ちょうだいね！！」

「……………」

このハイテンションな声・名乗らなくても直ぐにわかった。岩村が何の用だろう？てか、なんで私の携帯番号知ってるんだろ。履歴書見てわざわざ電話してんのかな？とりあえず私は『留守電の声、可愛いね』と言われたのが何だか気持ち悪くて、自分の声で留守電のアナウンスを流していたが、すぐさま元の設定のアナウンスに切り替えた。しぶしぶ岩村にリダイヤルする。

「……………あの、おはようございます。ミキで……………」

『おっはよー！！ミキちゃんっ！！』

挨拶もそこそこに、岩村の威勢のいい声が受話器から鳴り響く。

『ミキちゃん、昨日は場内指名おめでとう！！さすがだよ！！』

「は、はあ……………ありがとうございます。」

『で、場内もらった人にはもう、連絡したよね！？』

「え？……………いや……………まだ……………」

確かに昨日、場内指名をもらったお客さんと連絡先を交換したけど……………名刺はバッグにしまったままだ。

『ダメダメ……………！！場内指名もらったら、そこからスタートなんだから！次の日の昼までには連絡しないとダメだよ！』

「えっ？そ、そうなんですか？？」

私は電話を持ってないほうの手で、必死にごそごとバッグの中をあさる。

『場内指名なんてその場のノリだけだったりするから、その後の営業で本指名になるように繋げないと！これ、大切だから覚えといてね……………！』

「は、はい……………」

これも夜の世界独特のルールというもののなか。

『昨日はご馳走様でした☆……………っても楽しかったです！……………とか、そんな風を送るんだよ……………！！』

岩村が声色を変えて女っぽく・・・いや、オカマっぽく喋りだした。

「は、はあ・・・」

メールの文面まで指導か・・・。

『すぐに連絡してね！今日は21時30分からの出勤でいいのかな？遅刻しないようによろしくね！』

「・・・はい・・・」

それだけ伝えると岩村は電話を切った。お客さんへの連絡なんて、週末の時間があるときでいいかと思ってたんだけどな・・・。わざわざ電話までよこして岩村から言われたので、とりあえずメールを送ってみることにした。

「えーと・・・昨日は・・・ご馳走様でした・・・ハートマーク・・・と・・・っても楽しかったです！・・・こんな感じ？」

とりあえず岩村に言われた通りにメールの文面を打ってみた。うーん・・・勝手がよくわからん・・・。でもテレビとか漫画でよく見るような『営業メール』ってこんな感じだったかな。昨日場内指名をもらったお客さんは、ゲーム機や携帯、カメラ、音楽機器などを扱う、大手企業の人で、プログラマーをしているという樋口さん、30代半ばの感じがいい人だった。昨日は会社の仲間で歌舞伎町に飲みに来ていたという。

ご飯を食べ、シャワーに入って仕度をはじめ。家から稽古場までは30分くらい。まだまだ時間はあるが、昨日遅く帰ってきたこともあり何も準備をしていなかったので、少し早めに仕度にとりかかえることにした。

シャワーを出て髪を乾かし、部屋に戻ってみると携帯にメールの着信があった。

こんにちは！昨日はこちらこそありがとう！初めて行ったお店だけど、すごく楽しかったよ。また一緒に飲もうね！

・・・という、昨日の樋口さんからの返信だった。やっぱりいい人！いつもこんないい人ばかりだったらしいのに・・・。それはそうと、こんなメールのやり取りで自分の指名としてお客さんが来てくれるもののかな？岩村にいわれた通りにやってみたが・・・なんていうか、いまいちしくりこなかった。

「えーと・・・昨日教えてもらった、お勧めのノートパソコン・・・今度探しに行こうと思います・・・と。」

昨日はお話の中で、私がノートパソコンの購入を考えている話をしたら、樋口さんの得意分野だったらしく色々詳しく教えてもらったのだ。そろそろウチでもネットが観れるようにしたいな・・・と。まあその前に舞台のチケットノルマを稼いで、舞台が終わってお金を貯めてからなんだけど。最近じゃオーディション情報なんかもネットのほうで充実していて、そのたびに漫画喫茶に通うのは結構大変なのだ。オーディションによっては、応募用紙をダウンロードしなければならぬものも多く、やっぱり自宅にネットの環境とというのはこのご時勢必要になってきた感がある。

樋口さんにメールを送り、稽古の持ち物の準備を始めた。

その日の舞台稽古は18時から中野のスタジオを借りて行った。稽古初日は出演者の顔合わせと、『本読み』だった。本読みとは、出演者が揃って台本を通して読む。だいたい顔合わせ初日に、あわせて行われる。初見の台本を手に、割り当てられた台詞を読むのだが、役者の演技力や表現力がこの『本読み』であらわになる。ベテランさんや、力のある役者さんは初見の台本の『本読み』の時点で台詞の行間を読み、その作品・配役の空気を一瞬にして作り出すことができる。

今回の主役は、若手の今売り出し中の俳優の男の子と、最近はあるまりぱつとしないアイドルの女の子だった。名作・ロミオとジュリエットを現代版にしたような作品で、私はロミオの事が好きなジュリエットの友人の役だった。ミュージカルのような音楽劇で、歌

もいっぱいある。脇役ではあるけど、ちよくちよく登場する役で、ちょっとした歌のソロもあるのでかなり嬉しい。他にも同じくらいの歳の役者さんがいっぱいいて、すぐに仲良くなれた。

舞台の本番は年明けの1月末。チケットノルマもどうにか稼げそうだし・・・あとは稽古と仕事の両立をがんばるぞ！

稽古が終わったのは21時ちょっと前。急いで仕度をして、皆に挨拶をし、『MOON』へと急いだ。

「？あれ？」

駅へと急ぐ私のカバンの中で携帯が鳴った。足を急がせたまま携帯を見ると岩村からの着信だった。

「もしもし・・・？」

『もしもーし？ミキちゃん！？今どこ！？』

「えと・・・まだ中野ですけど、時間にはちゃんとお店に着きます・・・」

すぐに駅が見えてきたので、切符を買おうと私は小銭入れを探して、片手でカバンの中を探った。

『了解ー！今さ、結構まりあさんのお客様とか入ってて、お店混んできたんだけど、まりあさん指名の飯岡さんから、ミキちゃんも場内指名もらってるから、なるべく急いでねー！』

飯岡さん・・・私が始めて『MOON』で接客した、まりあさんの常連の、あのお客さんだ。私も場内指名もらってるって、どういうことなんだろう？いまいちお店のシステムを把握しきっていない私は、とりあえず岩村に『急ぎます！』とだけ返事をして電車に飛び乗った。

14、響く怒号

大急ぎで『MOON』に出勤した私。お店はかなり混んできた様子で、待機席に座ってる女の子も少ない。

そっか・・・今日は金曜日・・・。飲みに行く人が多い日だ。そりゃここまで来る間の道にも、いつも以上に人が多かったわけだ。私はメイクルームに入り、無言のさっちゃんにおそろおそろへアメイクをしてもらい、その間にメイクを直し、昨日岩村が選んでくれた白いミニドレスを着てフロアに出た。

「おう、おはよう！」

今日はフロアに店長が居た。

「お、おはようございます！」

私は元気欲よく挨拶をした。店長、昨日は居なかったのに、やっぱり今日はお店に顔を出すんだ・・・。昨日のアキラちゃんの話が頭に蘇る。『店長は今、まりあさんにぞっこんだから・・・』果たして本当にそうなのだろうか・・・。

「ミキちゃん、おはよ。」

ちようどそこへ、まりあさんがやってきた。今日もくるくるに巻き上げた髪をハーフアップにして、キラキラ光る小さなティアラを頭に飾っている。お揃いなのか、同じようにキラキラとゆれるロングピアスにネックレス。物語のお姫様みたいな白いロングドレスで・・・相変わらずまぶしいくらいに綺麗だった。もうすでに何組も指名が重なっていて、次のお客さんのテーブルに着くところだったらしい。

「今日は飯岡さんからミキちゃんも場内指名もらったから。今日は飯岡さん、あんまり長い時間お店に居られないみたいで・・・私もゆっくりお席に着けないかもしれないから、ミキちゃん、よろしくね。」

そう言って、まりあさんはにっこり微笑んだ。お客さんの滞在時間まで把握してるんだ……。まりあさんはナンバーワンだというからには、お客さんだって飯岡さんだけじゃないはず。

「あ、店長。この後、23時頃いらっしゃる田口さんの接待なんだけど・・・予定通りお席と女の子用意できる？」

「ああ、聞いてた。大丈夫、用意してるから、早く席に着け。あのお客様、結構お待たせしてるぞ！」

「よろしく。あのお席でもきつとワイン出るから、もう準備させておいてね。あと、アキラちゃんに入ってもらってるお席、アキラちゃんだけじゃ大変そうだから、誰か空いてたら少し一緒につけてあげて。」

そう言うときまりあさんはフロアへと向かった。短い時間で店長とお客様の打ち合わせをするまりあさんは・・・凄くかつこよかった。お客様の滞在時間や、この後来店予定のお客様のお席のこと、これから着くお客様がワインを頼むこと、ヘルプの女の子が着いている席のこと・・・どうやってら忙しそうな中、こんな一度に気配りできるんだらう・・・。私はなんだか雲の上のものをるように、席に座るまりあさんの姿を見つめていた。案の定、まりあさんのお席から赤ワインのオーダーが入り、すぐさまグラスとワイン、チーズの盛りあわせが運ばれていった。

「さ、ミキちゃんも行くよ。まりあ指名、ミキちゃん場内指名の飯岡さん！」

店長に促され、VIPルームへと入る。こないだと同じく、奥のソファにはニコニコした飯岡さんが待っていた。

「・・・おい、お待たせしましたってちゃんと挨拶するんだぞ！」

小声で店長が私に耳打ちした。私はちいさく頷き、飯岡さんのお席に入った。

「こ、こんばんは、いらっしやいませ！お待たせしました・・・！」
「いいよいいよ。」

飯岡さんはニコニコと私を手招きした。相変わらず、いい人だな

あ……。聞けば飯岡さんは8時半過ぎから来ていたという。今日は
まりあさんとは同伴ではなかったらしいが、この後何件か回るお店
があるので今日は早めに帰るのだという。

「週末になるとね、色々お誘いも多くて。今日は最後には銀座の馴染のママの所にも顔を出さなきゃいけないからね、あんまり長居できないんだ。」

ぎ、銀座……。銀座といえば、色々と敷居が高い、私にはTVやドラマだけの別世界だ。飯岡さん、銀座にも飲みに行くんだ……。なんだかいつもフツのかっこうでニコニコしている飯岡さんだけど、やっぱりVIP席にすわるだけあって、実は凄い人……。
「ミキちゃん、もう一本同じ赤ワイン頼んでもらっていいかな？」

「はい……。あ。」

すでに一本赤ワインが開いている。そういえば、まりあさんさっきの席でも赤ワイン頼むとか言ってたけど……。私はボーイを呼ぶと、飯岡さんのオーダーを告げた。しばらくすると、なんとまりあさんが大事そうにワインを抱えてやって来た。

「飯岡さん、さっき一本開けたばかりじゃない？ いいの？」

意外にもまりあさんは飯岡さんにワインを勧めに来たわけじゃなかった。確かにまだテーブルの上のボトルにはワインが結構入っている。

「いいんだよ。それ、今度来た時に飲むから開けないでキープしておいて。今日頼まないで無くなっちゃうでしょ？ 今日はこっちのワイン空けたら帰るから。ごめんね、長く居れなくて。」

飯岡さんはテーブルの上のワイングラスを傾けた。

「それじゃあ……。今度は二人でゆっくり過ごしましょうね？」

まりあさんはちよっぴりわざとらしく、でも色っぽく飯岡さんに言った。なんだか……。すごくドキつとする仕草と話し方だった。まりあさんは私にもにっこり微笑むと、また席を外してVIPルームから出て行った。

「今日はね、滅多に手に入らない赤ワインをここのオーナーが数本

仕入れたらしくてね。今日は本当はここに来る予定じゃなかったんだけど、まんまと営業にひっかかって来たんだ。数も数本限りみたいだし、せっかくだから飲んでみようと思ってね。」

楽しそうに飯岡さんはワインボトルを手取る。

「そんなに珍しいワインなんですか？」

私もグラスにワインを戴き、一口味わってみた。あんまりワインとか詳しくないし、色々飲んだことがあるわけじゃないんだけど、もの凄く濃厚で、でもするすると入ってきて飲みやすかった。これが『美味しい』って表現されるワインなんだろうな……。たまにコンビニで売ってる300円くらいのワインを飲んだりすることはあるけど、すぐに気持ち悪くなって飲めないのも、料理酒にしてしまってる。さすがにこのワインは、300円のワインとはワケが違う。「市場で買っても10万くらい……。たまにそれ以上するから、ここで1本30万で飲めるなんて破格じゃないかな。」

「ええええっ!? さ、さんじゅうまんっ!?」

一本30万のワインを二本も……。しかもそれを破格だなんて……。飯岡さんって、一体何やってる人なんだろ!? いや、それよりも他の席でも、おそらくこのワインをいれてもらってるまりあさんって……。つくづくナンバーワンって、こういうことなんだなと思った。

私は一本30万のワインにびくびくしながらも、今日もまた飯岡さんの面白いお話と雰囲気につきり楽しませてもらっていた。

「……。さて、そろそろ行こうかな……。」

ちょうどワインが無くなってきたあたりで、飯岡さんがチェックをした。カードで支払いを済ませ、席を立つ。

「ミキちゃんのその髪形とドレス、似合ってるね。初日より、ずっと似合ってるよ。」

飯岡さんが私に振り返って、ニコッと微笑んだ。

「あ……。ありがとうございます。」

私が選んだ髪型とドレスじゃないんだけど……。どうやら評判はい

いみたいだった。岩村って意外とセンスあるのかな？

「水商売はね、まずは形からって言われたりするんだよ。ミキちゃんも女優さんの学校出てるからわかると思うんだけど、衣装とかお化粧で気持ちの持ちようも随分変わることであるだろ。そういう形ってすごく大事なんだ。女優さんが良く言うだろ？衣装は女優の命って。夜の仕事初めてで色々わからないことばかりだと思うけど、まずは形から、売れてる女の子みんなの真似してごらん。お化粧とか持ち物とか、仕草とか・・・結構、ミキちゃん様になると思うよ。」

「は、はい！頑張ってみます！」

水商売は形から・・・か。

「そうそう、その意気！学ぶことは、もともと『真似ぶ』って語源からきてるからね。学ぶことの第一歩は真似ることだよ。」

飯岡さんの話は、なんだか勉強になる。本来なら、私が接客して楽しませなきゃいけないんだけど・・・逆に色々教えてもらってるカシダだ。

「ありがとうございました！」

お見送りにはまりあさんも一緒にやってきて、二人でお見送りをした。隣に立っているまりあさんからは・・・なんだかい香りがして、本当に素敵だなあ・・・。

「ミキちゃん、ありがとう。ワイン、苦手じゃなかった？」

階段を降りながら、まりあさんが私に声をかけてくれた。

「はい、大丈夫です！ごちそうさまでした・・・」

むしろあんな高級なワインを飲ませてもらったことにお礼を言うとした時、フロアからびっくりするような怒号が響いた。

「ふざけんなよ！！！！！」

女の子の悲鳴と、派手にガラスが割れる音。それと同時に何人もボーイがフロアへ走る。

「・・・な、なに？」

突然の出来事に、私とまりあさんは身を寄せ合ってフロアの様子

を伺っていた・
・
・
・
・
。

15、別世界

飯岡さんをお見送りしていた私とまりあさん。そこでフロアからの物凄い怒号と女の子の悲鳴、ガラスの割れる音を聞いた。

私とまりあさんは恐る恐る階段を降りてフロントに向かった。フロントには会計を担当する新人ボーイの細田君が居た。まだあまり話したことはないけど、細田君と私は歳が近いらしく他のボーイの人たちよりは親近感があった。

「・・・ちよっと、何なの？」

まりあさんが小声で、その細田君に聞いたです。

「ふざけんなって言うってんだよ！詐欺女めっ！！」

また大きな怒鳴り声が聞こえてきた。さ、詐欺女って・・・お客さんがキレてるの！？私はどうにか平静を装おうとしたが、初めての事態に気がつくとも手が震えていた。こんな怒鳴り声とか、今まで生きてきて聞いたことないよっ！

「・・・あ・・・たぶん舞ちゃんのお客さんみたいですわね・・・」

耳に着けていたインカムで何かを聞いた細田君が小声で私達に話してくれた。それにしても、舞ちゃんのお客さんって・・・

「おいっ！何とか言えって！！」

また怒鳴り声。そこで奥の店長室から店長が出てきた。

「・・・おい！まりあ、ここで何してんだよ！お前は席に戻れ！お客待たせんな！」

フロアに行こうとした店長がフロントに居た私達を見つけると、まりあさんに声を掛けた。

「・・・え、ええ。でも・・・」

「いいから！こんな時にお前が席に居なきゃお客のフォローできないだろ！・・・おい、岩村！ミキちゃんどっか席に着けて！」

店長はインカムで岩村に指示を出し、フロアへ向かった。無言で

フロアへ向かうまりあさんと入れ替わって、顔面蒼白の岩村がフロアに飛んできた。

「ご、ごめんねミキちゃん！とりあえず、女の子着いてないテーブルに入ってもらえる？」

「は、はい・・・」

岩村に案内されてフロアへ入った私が見たものは・・・フロア中央あたりの小さなボックス席、飛び散ったグラスやお酒を片付けるボーイ達。顔を真っ赤にして怒るお客さんに、ふてくされた顔の舞ちゃん。一生懸命とりなそうとテーブルの前にひざまずく宮道。そのお客さんは一見大人しそうな・・・よれよれのスーツに分厚いメガネ。なんかちょっと、おたくっぽい？お客さんだ。私はちようど舞ちゃんたちの席の真向かい側にあたる、同じような小さなボックス席に入った。

「・・・ごめん、ミキちゃん。フリーのお客様なんだけど、まだ女の子着いてないうちにこんな状況だから、なんかフォローしといて！」
岩村が私に小声でささやいた。そんな、いきなり言われても・・・

「お、おとなり失礼しますっ」

あたふたと席に着くや否や、向かいの舞ちゃんの席では今度は店長が対応していた。

「だから詐欺だって言ってるんだろ！この女がゆいから指名変えて通ったらヤラせてくれるって言ったんだよ！！！何か悪いかった！！」

隣でふてくされた顔をしていた舞ちゃんの表情が変わった。

「ちよっ、その話は内緒だって言ったでしょ！？」

「うるせえ！！」

お客さんが舞ちゃんの胸元を掴み、今にも殴りかかろうかという状態だった。フロア中がしん・・・と静まりかえって舞ちゃんのテーブルを固唾をのんで見守っている。

「・・・お客様、当店のキャストがご迷惑をおかけしました。どうぞ

こちらへ・・・」

店長が深々と頭をさげ、怒り狂ったお客さんを奥へと促した。しばらく色々と文句をつけて動こうとしなかったお客さんだったが、再三店長が頭を下げて、ようやく席を立った。舞ちゃんも宮道に連れられ、しぶしぶ裏に下がった。反省とか、落ち込んだ様なそぶりは全く無くて、何ていうか・・・逆切れしているような態度と表情だった。

次第にフロアはポツリ、ポツリと他のテーブルから会話が戻ってきた。

「・・・すごかったね・・・」

私が着いてるテーブルの、初老の身なりのいいのオジサマといった感じのお客さんが口を開いた。そ、そうだ、舞ちゃんのテーブルにすっかり釘付けになって、挨拶もそこそこに、今までお客さんと会話もしてなかったけど、岩村からちゃんとフォローするように言われてたんだっけ・・・ふと周りを見ると、奥の席にまりあさんの姿が見えた。

「失礼いたしました。今までこんなこと無いんですけど・・・ご気分害されたらゴメンなさいね・・・」

まりあさんは動ずるでもなく、やんわりと優美にお客さんに見事なフォローを入れていた。そのお客さんも怒るふうでもなく、いつの間にか楽しそうに笑っている。

「し、失礼しました。今までこんなこと無いんですけど・・・ご気分害されたら、ゴメンなさいね・・・」

とりあえず、まりあさんを真似てフォローを入れ、まりあさんみたいに優美にグラスにお酒を注ぐとしたが・・・手が震えていてなかなかスムーズに作れなかった。初めての事にすぐ動揺している自分が良く分かる。

「そうだね、今まで飲み歩いていて初めてみたよ。」

そういうと、初老のオジサマはにっこり微笑んでくれた。

「ご、ごめんなさい。なんか手が震えてうまくお酒作れなくて・・・

「今度は緊張もあいまって、さらに震える手でグラスをコースターにのせた。ようやく店内も何事もなかったかのように、にぎやかになり、舞ちゃんたちが座っていた席は、跡形も無く綺麗にされ、来店した次の新しいお客さんを既に案内していた。ようやく気持ち落ち着いて、初老のオジサマと映画の話など盛り上がっていたところに店長がやってきた。」

「先ほどは失礼いたしました。お騒がせ致しましたお詫びにこちらのボトルを当店からサービス致します。」

目の前にはちよっとお洒落なブランデーの新しいボトルが置かれていた。なんと、店長が一つ一つのテーブルにまわり、頭を下げ、お酒のボトルをお客さん全員にプレゼントしていたのだ。この広いフロアにほぼ満員のお客さん・・・このすべてにボトルをプレゼントするなんて、そう安くはないだろう。フロアに居たお客さんはそんなサービスと、頭を下げる店長の対応にすっかり気をよくしたのか、ほどなくすると先ほどの騒ぎはすっかりみんな忘れて楽しんでいるようだった。

営業終了したのは午前2時。あのあと、あちこちのまりあさんのヘルプにまわり、あの赤ワインを戴き、つまみもいっぱい食べさせてもらってへろへろになりながら終了した。そういえばあの騒ぎから舞ちゃんの姿が見えないけど・・・あたりを見回してみるけど、見当たらない。

「ね、ついにやらかしたね。」

メイクルームに向かう途中、にやにやしたアキラちゃんが小声で話しかけてきた。

「あのキレたお客さん、ずっとゆいちゃん指名だったんだけど、なんだか最近、突然舞ちゃんに乗り換えてさあ。なんか有ると思っ
てたけど・・・」

ちやうど店長室の前を通りかかったとき、大きな声がして、店長

室の扉が壊れそうな勢いで開いた。

「なんでよっ！！！！なんであたしがクビなんですかあっ！！！！？」

「いいから出て行って言っただろっ！！」

ブチ切れていたのは・・舞ちゃんだった。すっかりドレスを着替え、私服姿だった。おそらく今日のことで店長と何か話してたんだろう。部屋の奥には・・舞ちゃん以上にブチ切れていた店長がいた。私は目の前に飛び出てきた舞ちゃんから離れ、アキラちゃんとぴったりくっついて壁際に避難した。その場にいた他の女の子達も、静まりかえって舞ちゃんの様子を遠巻きに見ていた。

「なんでですか！？あたし、今月は売りあげだって出してますけど！？ヘルプ専門の子なんかより指名もとってるし、数字出してるのになんでクビなんですかあ！？」

臆する事無く、舞ちゃんが店長に食って掛かっていた。

「お客と寝て指名とるのは勝手だけどな、今日みたいに自分で収集つけられないで店とお客と他の子に迷惑かけんじゃねーよ！！今日、全部のテーブルに振舞った1本8,000円のブランデー40本、全部お前の給料から天引きするからな！お前の責任だ、文句ねえだろ！」

1本8,000円が40本・・・一ヶ月の給料が無くなる金額だ。舞ちゃんは言い返す言葉が無くなったのか、黙り込む。

「明日から店に来て、お前のロッカーは無いし、お前の客が来ても追い返す！もちろんどの席にもつけない！」

「ひ、ひどい・・！」

舞ちゃんが店長をにらみつけた。私が知ってる舞ちゃんからは想像もつかないくらい、憎々しげに睨むその顔は、別人のようだった。そんな舞ちゃんを一瞥した店長は、ふん、と舞ちゃんを鼻で笑う。

「ひどいのは、お前の顔だろ？鏡でも見て来いよ。お前みたいな奴でも、ヤレればいいって物好きもいるみたいだからな、系列のデリヘルでも紹介してやろうか？」

「・・・・わかりました・・」

怒りに体が震えてるのか、泣いているのか、舞ちゃんは小さく体をふるわせ、一言話すとそのまま走ってお店を出て行ってしまった。店長も再び大きな音を立てて扉を閉める。その音に、その場にいた女の子全員がビクっとした。

「・・・おーこわっ・・・」

ビリッと張り詰めた空気を破るように、小声でアキラちゃんが茶化したようにつぶやいた。

問題を起こすという、舞ちゃん、ブチ切れてグラスだのボトルを割ったお客さん、さらにブチ切れてた店長……。なんだか私、本当に別世界にきちゃったみたい・・・

16、初指名

色々と騒動があった舞ちゃんは、あの一件でお店を去ることになった。次の日には舞ちゃんは、まだ誰も女の子が出勤しないうちにやって来て、黙々とロッカーを整理し、私物を持って帰ったらしい。なんだかんだと周りの女の子に絡んでいた舞ちゃんだが、最後は誰にも何も言わずに居なくなった。

舞ちゃんがお店を去ってから、少しは『MOON』も平和になったのか、大きな問題も起こることがなく半月が過ぎた。依然、不動のナンバーワンはまりあさんで、ダントツの売り上げと指名数を誇っていた。舞ちゃんの横槍が無くなり少し落ち着いたゆいちゃんも成績を上げてはいたけれど、まりあさんには到底及ばなかった。

それから、だいぶお店の常連のお客さんも覚えてきた。まりあさんのお客さんはもちろんだけど、ゆいちゃんや他にも人気のある女の子のお客さんも。色々な席に着いて少し分かってきたことだが、全体的にまりあさんのお客さんは『いい人』が多い。結構若い感じの人から、おじいさんまで・年代も幅広い。職種も、もちろん普通のサラリーマンといった感じの人もあるけど、飯岡さんのように一晩で使う金額が大きい人が多い。びっくりしたのは芸能人のお客さんもありあさん指名で来店するという事。こないだは超人気男性歌手グループの人たちが、仕事終わりにスタッフさんたちと飲みに来たのだ。そのグループのリーダーがまりあさん指名だった。前にアキラちゃんが言ってたけど、まりあさんはそのお客さんによって少しずつ接客・というか雰囲気を変えているようだった。時には歳相応にはしゃいでみたり、時にはすごく大人びた色っぽい時もあったり、甘えていたり、また時にはお母さんみたいな包容力があつたり・・・まさに『女優』。巧みにまりあさんはお客さんの席ごとに演じ分けているようだった。

対してゆいちゃんは、もちろん同じように大金を使うお客さんも結構多いのだけど、どちらかというと千葉さんみたいにフツのサラリーマンの人が、どっぷりゆいちゃんに『ハマって』使い込んで、という感じのお客さんが多い気がした。一晚に何十万も使うわけではないけれど、ほぼ毎日のように来店したり、必ず毎週顔を出すお客さんが多い印象だった。それはそれで、素で接客していると言うゆいちゃんが、そこまでお客さんを虜にするなんて凄い事だと思う。

そんな中で私は舞台稽古とお仕事と……なかなか落ち着けずに忙しくしてはいたけど、どうにか両方ともに慣れて、なんとなくリズムが掴めて来た。お店の他の女の子やボーイさん達とも話すようにもなった。アキラちゃんの他にも、まりあさんの専用のヘルプだという女の子とも仲良くなれた。結構みんな仲良くやっていると言葉通り、チーム・まりあの子は色々親切にしてくれる。

実は舞ちゃんの騒動以来、店長とはなかなか話す機会は無かった。私の中で、店長は結構怖い人っていうイメージが着いちゃったから、無意識のうちに必要以外では話さないように避けていたのかもしれないけど……。店長とは昔から知り合いだというアキラちゃんは『あんなの全然ブチ切れたうちに入らないよ』っていうけど……。そんなモンなんだろうか？

私は今日もいつも通り稽古を終えて、急いで店へとやって来た。なんだかんだ文句を言いながらも、今だにさっちゃんかへアメを担当してくれている。最初にあれだけ文句を言われてちょっと私は苦手だったのだが、どんなに私の髪がぐちゃぐちゃな状態でも、さっちゃんの手にかかればびっくりするくらいサラサラで美しい髪・綺麗な女の子になるのだ。相変わらず無言で全く話してくれないんだけど。

「ミキちゃん、準備できた？急いで！」

へアメを終えたところで岩村の声がした。ちょうど着替え終えた

私は返事をするのでフロントへ飛び出す。今日も結構混んできてるのかな・・・？ここ最近、稽古終わりに急いで出勤しては、お店に着いてすぐに女の子が足りなくて仕度を急かされる・・・という日が続いていったのだ。

フロントに飛び出ると、岩村と一緒に店長が待っていた。なんだろう・・・普段平日はあんまりフロアに出てこないのに・・・

「おめでとう、ミキちゃん。初指名！」

岩村がいつものハイテンションで、満面の笑みで私の肩をぽんぽんと叩いた。

「・・・え？」

私が分けてもわからずボーっとしていると、今度は店長が私に近づいてくる。

「ミキちゃん指名のお客様だよ。やるじゃん！」

私の指名・・・？岩村に急かされてフロアへ向かうと、小さなボックス席に座っていたのは、いつか場内指名をもらった大手企業のプログラマーの樋口さんだった。

「ひさしぶり！会いに来ちゃったよ。」

ちょっと照れくさそうに樋口さんは笑った。・・・そういえば・・・最近昼も夜も忙しすぎて、あんまり樋口さんとメールのやり取りもできてなかった。必ず返事は返すようにしていたけれど、返信がかなり遅くなってしまうたり、ひどい時には翌日に返信何て日もあった・・・。

「ありがとうございます。・・・ごめんなさい、ちゃんとメールのやり取りできなくて・・・」

挨拶を交わして、席に着き、お酒を作ろうとする。

「あ、いいよ、新しくボトル入れてくれる？僕、麦焼酎がいいんだけど何かあるかな？」

「は、はい・・・」

『MOON』では飲み放題のボトルを安い焼酎と、ブランデー、ウィスキーの3種類用意しているが、初来店のお客様以外はそれ以

外のボトルを頼む事が結構多かった。もちろんまりあさんの席ではキープボトル以外にシャンパンやワインが開くことも多い。私はお酒のメニューをボーイさんに持ってきてもらい、麦焼酎を入れてもらった。と、同時樋口さんは麦焼酎を麦茶で割りたいというので、麦茶をピッチャーで頼む。・・うちのお店はピッチャーで割り物を頼むと2,000円もするんだけど・・いいのかな？私は始めての自分の指名、自分の売り上げにつながるお客さんのオーダーにちよっとビクビクしていた。

「ミキちゃんも何か頼んでいいよ。別に僕と一緒に麦焼酎じゃなくてもいいから。大金は使えないけど、ミキちゃんの飲みたいドリンクくらいは払えるから、安心して。」

樋口さんはそういうと、にこやかに笑った。仕事帰りか、きつちりしたスーツ姿に、おしゃれなネクタイをしていた。・・なんていうか、働く前まではキャバクラに来る人って、おじさんとかモテない人ばかりかと思っていたけど半月働いてみて、そうでもないってことが分かった。この樋口さんだって、30代半ばでまだ若い方だし、フツーに彼女とかいそうだし、わざわざお金出して女の子と話に来るような人に見えないんだよね。

私は樋口さんの言葉に甘えて飲みやすいカルアミルクを飲ませてもらった。前回席に着いたときも好きな映画やパソコンの話になったけれど、今日はわざわざ樋口さんが私が欲しがってたノートパソコンのパンフレットをいくつか持ってきてくれていたのだ。

「今度、一緒にパソコン見に行かない？」

「えっ？」

二人でお酒を飲んでしばらく談笑していたところで、樋口さんからお誘いがあった。樋口さんパソコンとか詳しいみたいだし、一緒に探しに行きたいのはやまやまだけど・・今は舞台の稽古終わってギリギリにお店に滑り込む状態だし、最近は日曜日の稽古も増えてきた。何よりも、パソコン買うほどのお金なんか今無い・・・。

「あ・・でも・・舞台の稽古とかでしばらく忙しいし・・・」

「えー!? ミキちゃん舞台とかやってるの!? 凄いなー! 詳しく聞かせてよ!」

「え、ええと・・・」

結局樋口さんに聞かれるまま舞台のお話とか、私のお話を色々していたらあつという間に時間が過ぎてしまっていた。1セット60分。樋口さんは延長して、結局3セットも居てくれた。途中、暇になったアキラちゃんが一緒にいてくれて話を盛り上げてくれたおかげで、3セットもの長い時間、話に詰まる事無く接客することができた。アキラちゃんは私が話題に詰まったり、返答に困っていると何気に助け船を出してくれる。私が話に夢中になって、樋口さんのグラスのお酒が減っているのに気づかなかった時もアキラちゃんがさりげなく作ってくれていたり・・・さすがスーパーヘルパーを自負するだけあった。本当はこういうのって私もちゃんとできないやいけないんだよね・・・。初指名をもらって嬉しかったけど、アキラちゃんの仕事やまりあさんのいつもの様子を思うと・・・私なんて足元にも及ばない。

「アキラちゃん、ありがとう・・・。すごい、助かった。アキラちゃんって、実は結構凄いなだね。」

一緒に樋口さんをお見送りし、アキラちゃんにお礼を言った。初めて自分の指名にあたふたしていた私だけど、アキラちゃんのおかげで樋口さんは上機嫌に『また来るよ!』と笑顔で言って帰ってくれたのだ。

「こちらこそ、ごちそうさまでした♪・・・どお? スーパーヘルパー・アキラ、結構ツカエル子でしょ?」

アキラちゃんはまた、いつものようにいたずらっぽく笑った・・・。私もアキラちゃんと同じくまりあさんのヘルプとして働いているけど、私はまだまだ、アキラちゃん程にヘルプの仕事をしてないや・・・。

『ヘルプの仕事ができない子は、指名を取ることできない』

岩村の言葉が蘇る。飯岡さんのアドバイスどおりに、まりあさんと

か売れっ子の女の子の仕事を見て、一生懸命マネてみるけど・・・売れっ子だけじゃない、スーパーヘルパー・アキラちゃんの仕事からも、ちゃんと見習わないといけないんじゃないかなって、思った。舞台だって、ダンスだって、いつも言われるのは『基礎』。基礎がちゃんとできてない人は上手くならないし、成長しないって。この世界のことはよく分からないけれど、ヘルプのお仕事って、基礎中の基礎なんじゃないかな。

私はアキラちゃんと一緒に待機席に向かっていたが、その途中、フロントで店長に呼び止められた。

「ミキちゃん！ちょっと店長室に来てくれる？」

「え・・・はい・・・」

一体なんだろう・・・。樋口さんの席での接客について、何かダメだしされるのかな・・・。後半アキラちゃんに頼りっぱなしだったから、やっぱり注意されちゃうのかな！？それとも、最近いつもギリギリで出勤してるから！？それとも、ついにヘアメのさっちゃんか私なんかの髪の毛いじりたくないって言ったとか！？

なんだろう、なんだろう、なんだろう・・・。

私は心臓が飛び出そうなくらいバクバクさせながら、店長室へと向かった・・・。

17、誘い

初指名のお客さんをお見送りした後、店長室に呼ばれた私……

怒られるんじゃないかと、びくびくしながら店長室のスツールに腰掛けた。相変わらず雑多とした狭い店長室は、音楽が流れているフロアからは一線を画したようにしーんと、不気味なくらい静かで、時折パソコンが鳴らす機械音が妙に響く、異空間だった。

「どお？慣れてきた？」

店長はニコニコしながら椅子に座り、私のほうに向き直る。

「は、はい……」

ここ最近、だいぶ仕事のリズムと雰囲気慣れては来た。今はそんな仕事中よりずっと緊張して体が強張る。

「初指名、凄いね！結構営業とかしてたの？」

営業……うーん。営業と呼べるようなことは……何にもしていない。

「いえ……その、舞台とか忙しくて、メールのやり取りだけだったんですけど……」

私はあるのままと、恐る恐る話してみた。店長は黙って私の話を、笑顔で聞いている。

「ふーん。凄いじゃん。ミキちゃん、才能あるんじゃない？」

「へ？」

突然、何を言われるかと思ったら……。私はまた、ぽかーんとした間抜けな顔で固まっていたに違いない。才能？まさか。まりあさんや、ゆいちゃん、アキラちゃんにも到底及ばない。

「売れる素質があるんだよね。俺は何年もキャスト見てきたから、この子はって子、分かるんだよ。まりあだってそう、ピンときた。俺の見る目は間違いないって。」

売れる子……。店長のその言葉を聞いたとき、アキラちゃんから

聞いたあの話がひっかかった。売れると思った子を、色管理するって……。

「い、いや、そんなこと無いです。それに、私、まりあさんのヘルプってことで働いてるので……その……指名とか……」

私はなんだかんだ必死に、自分が売れる子だってことを否定しようと思った。だって……自分が色管理の対象になるのかわからないけど、もしそんなことになったら絶対嫌だ。まりあさんとも付き合ってて、ゆいちゃんともそんなカンジで、他にも手を出した女の子は沢山居るっていうし……。

「まりあヘルプでも、売れっ子はいるんだぜ。うちのナンバー3のエナ。こいつだって最初はまりあの専用ヘルプで働いてただけで、今じゃ売れっ子。自分のお客で忙しくて滅多にヘルプに入ることは無いけどさ。」

エナさん……そう、私が始めてこのお店に来た日待機席で見た、背が小さくて細くって、顔が小さくて、目が大きい、金髪のショートカットがめっちゃ合う、アイドルみたいなもの凄く可愛い子だ。エナさんが人気があるのはわかってたけど、まりあさんのヘルプだったの！？他にも何人か名前が挙がってたけど、どれもここ半月働いていて、結構指名のお客さんがいる女の子だなあと思っていた子ばかりだった。

「エナはまりあと同じ頃に入店してさ、その頃は昼間は渋谷のショップ店員してたから、そんなに夜の仕事やる気なかったし、まりあも仲良かったこともあって専用ヘルプにしたんだけどね。あいつ自身も十分に指名取れる子だったから、まりあのヘルプに入らないとき以外、ほとんどフリーにつけていたらあつという間に稼げる子になったってわけ。最初はエナも『私には無理』』とか言ってたんだけど、俺は絶対売れるって確信あったからね。今じゃ時給になると1万越えだよ。専用ヘルプの時給なんかより、全然こっちのほうがいいんじゃない？ 去年の人気キャバ嬢の読者投票でも、エナはTOP 10に入ってたからね。」

い、一万円！？時給で！？店長はさらに畳み掛けるように私に言う。

「売れてる子ってさ、基本的に他の女の子のヘルプなんて入りたくない奴が多いんだよ。プライドとか、意地とかあるからね。それでもうちの店なら、まりあ指名だとエナみたいな人気有名嬢もヘルプで着いてくれちゃうこともある、これも大きなウチの売りなんだ。だからさ、そんな売りをもっともっと増やしたいわけ。ミキちゃん、ちよっと頑張ってみない？」

頑張ってみない？と言われても・・・とりあえず大金が必要なチケットノルマ分が稼げたら、出勤日数を減らそうと思っていた私にはこれ以上に『頑張る』心構えは無かった。色管理のこともあるし・・・。

「・・・い、いえ、年明けの舞台が終わるまで、本当に忙しいんで、そんな、無理です・・・」

私は必死に、店長の顔を伺いながら、やんわりと断ってみた。これでキレられてクビだって言われたらどうしよう・・・。

「あ、そうだっけ？年明けに舞台やるんだっけか？じゃあ、その後から本腰入れてやればいいよ！今はそれでもできるだけ沢山のお客様さんに着けるようにするからさ！」

・・・あれ？なんか話を通じてない？？断ったつもりんだけど、断ってないことになってる！？強引な店長のペースに私が戸惑いの表情を見せると、それまでニコニコしていた店長が急に神妙な顔になった。

「いやさ、これはまだ皆には秘密なんだけど・・・来春以降、この『MOON』をリニューアルして、新宿にもう一店舗出店する計画なんだ。リニューアル後の『MOON』は大人っぽい雰囲気で、品のある接客の店にしたいから・・・ミキちゃんみたいな子を探してたんだ。リニューアル後のコンセプトはもちろん、まりあをメインに考えてそんなカラーなんだけど、ミキちゃんの雰囲気って、まりあに似てるんだよね。新しいお店の姿に、欠かせない子になると俺は

思ってる。」

リニユーアル・・・！？それに、私がまりあさんと雰囲気似てるって・・・！？リニユーアルとかそんな話、本当なのかな・・・。ただ私を夜の仕事にすっかり引っぱり込もうとして、適当におだててるだけなんじゃないかな・・・。

店長は私の迷いをよそに話を続ける。

「ね！とりあえず、今はその舞台頑張ってね！俺も観にいくからさ！・・・で、その舞台って、どんな話なの？」

「え、えと・・・。」

なんだかんだ、舞台の話を長々とさせられてしまい、この仕事を本腰で頑張る云々の話は断ったつもりが、うまく話を逸らされてしまった。

店長室でそんな話をされた後、その日はまりあさんのヘルプに一度も入る事無く、フリーのお客さんにどんどん付回された。これって、さっきの話、私がOKしちゃった事になってるのかな・・・！？入ったばかりで、たいした売り上げも無いヘルプ専用の私があれこれ文句言えた立場じゃないんだろうけど・・・。

「・・・へー。ミキちゃん、フリーのお客さんにも着くようになってんだー・・・なんで？」

営業終了後、メイクルームで着替えてた私に、ゆいちゃんが話しかけてきた。ゆいちゃんが私にお客さんの席以外で話しかけてくるなんて、初めてのことだ。いつもどおりに気だるい感じの話し方だけど、どこかにちょっとトゲを感じる。なんでって私に言われても・・・

その場で着替えをしていた女の子全部が、まるで私の答えを待っているかのような、それとも、他の事情を勘ぐるような妙な空気が流れた。

「え・・・ええと・・・」

私が答えに困っていたところに、アキラちゃんが助け舟をだして

くれた。

「今日はチーム・まりあ、沢山出勤してたから、女の子余ってたしね！たまにはいいんじゃない？ミキちゃんはいったばかりで、経験も少ないからいっぱいお客さんの席、経験しなきゃさ。」

「う、うん・・・」

ゆいちゃんはそれを聞くと何も言わず、黙々と帰り仕度を始めた。

まさかその日から、私をとりまく環境が劇的に変化していくとは・・・この時は思いもよらなかった・・・

18、遠い目

店長から話があったから、今までは出勤した日は殆どまりあさんのヘルプとして席に着くことが多かった私が、突然その半分くらいは新規のお客さんや、他の女の子の指名の『枝』といわれるフリーのお客さんに着くことが多くなった。

「枝のお客さんって、オイシイから必ずゲットしてね!!」

営業前や営業後の岩村のミーティングも、前以上になんだか熱が入ってる。『枝』とよばれるお客さんは、すでに誰か女の子を指名で来店されているお客と一緒にやってきた、またはいつも一緒にやってくるお客様のことだ。その『幹』となるお客さんがお店の常連さんだったり、人気のある子のお客さんだと必然的に『枝』であるお客さんも一緒に来店されることも多く、売り上げも折半となるのでオイシイということらしい。必ずゲットしてっといわれても、昼間本当にそこまで暇じゃないから大変なんだけどな・・・

今日も営業終了後にわざわざ残されてのミーティング。今日はまりあさんがお休みの日だから、新規のお客さんばかりに沢山着いて・・・本当にもうへとへとで、お腹もすいた。

「ほら、ここ一ヶ月弱でこんなにミキちゃん指名のお客さん増えたんだよ!!」

岩村がいつぞやの大学ノートを出してきた。それには樋口さんを初め、私を指名で来店してくれたお客さんの名前と、ついでにそのときの売り上げ、頼んだボトル等が、来店日と一緒にしっかり書き込まれていたのだ。まだまだノート1ページ分しか無いけど・・・い、いつの間に・・・。岩村って、結構マメ!?

「ミキちゃんは僕の担当キャストだからね、これくらい当然!これからガンガン売り上げと指名数上げる為に指導していくよ!!」

「は、はあ・・・」

おそらく店長と岩村の間では、あの話は生きてることになってるんだろうな……。そうそう、最近ようやく理解できてきたことなんだけど、『MOON』ではキャストの女の子達を数名ずつグループ分けして、何人かのボーイが『担当』として指導や教育なんかをするシステムらしい。私はこのハイテンションの岩村が担当。アキラちゃんはその小太りの宮道が担当だった。ちなみにまりあさんとか、ゆいちゃんはボーイが担当では無くて、店長が直々に『担当』してるんだって。……なんだかね。分かりやすいっていうか、なんていうか……。

それはともあれ、岩村が色々アドバイスしてくれるのは正直助かってる。

「ね、ミキちゃん。月末のイベントには誰か同伴できないかな？」

「は！？私が！？」

何を言ってるんだ、岩村は。イベント！？同伴！？

「ミキちゃん、貼ってたポスター見てないの？月末のイベントはドレス新調デーだよ。店のドレスはレンタルできないから気をつけてね。」

えっ！？ということは、自分で買ってこなきゃいけないの！？……そんな、お金あるかな……。そもそもどこでドレスなんて売ってるんだ。

「それから……今月末のイベントから来月年内のイベントまで、実は僕の店長就任がかかっているから……。そこんところよろしく。」

「……は？」

なにになに？？？何！？私が物凄く怪訝な顔をしていたところ、岩村がわざとらしく咳き払いをして話しはじめた。

「……実はね、来春以降、グループで新店舗を出店する計画と、この店のリニューアルの計画があってね……。」

あ……。その話……。こないだ店長が話していた話だ。てっきり嘘かと疑っていたけど、話自体はどうやら本当だったらしい。

「で、『MOON』の他に店ができるってことは、誰かが店長とし

て新たに必要になるってわけだ。オーナーと林田店長と話をして、今月末から来月末までの僕の担当キャストの売り上げ次第で、店長に抜擢してもらうことになったんだ。」

岩村はにやにやと、なんだか嬉しそうだ。

「他にはさ、今のところオーナー達に売り込む奴もないし、林田店長も今働いてるボーイの中からって思ってるみたいだから、まあ敵無しって感じなんだけどさあ！目標金額は絶対達成したいから、頼むよ！ミキちゃん！」

「え、ええっ!？」

自分の事でも精一杯なのに、なんで岩村の都合なんかにあわせなきゃいけないんだ。大体、岩村以外に次期店長候補がいらないなら、別に私が頑張る必要ないんじゃないのかな……

ミーティング終了後、いつもの寂びれたラーメン屋さんではアキラちゃんが待っていた。ここ最近、木曜日は仕事終わりにアキラちゃんとラーメンを食べて帰るのが習慣になっている。一緒にしようゆラーメンを頼み、先ほどの岩村の話をした。外はだいぶ寒くて、店からここまで来る間に、だいぶ冷えてしまった。まだ震える手指をこすって、暖める。

「あー、やっぱり岩村、店長狙ってたんだー。」

禁煙の店内で手持ち無沙汰なのか、アキラちゃんは近くの雑誌を手にとってぺらぺらとめくる。

「新店舗出すって計画はさあ、『MOON』立ち上げの頃からのオーナーと店長の計画だから、そろそろかなとは思ってたけど。岩村もわざわざ他の店舗から引き抜いて『MOON』作ったしね。岩村が店長になっても不思議じゃないけど……」

そういつて、アキラちゃんは何かを考えるかのように、雑誌から目を離した

「でも……岩村だけかなあ、オーナーに売り込んでるの。」

「え?。」

アキラちゃんが頬杖をついて何かを思い出すように目を閉じた。

「うーん。こないだケイ君と話したとき、何人か店長候補にあがってて、他にも店長になりたがってるのがいるとか言ってたような・

」

「・・・ケイ君？」

聞きなれない名前に、つい聞き返してしまった。そんな名前のボーイさんいたっけ？

「ん？・・・ああ。ケイ君って、オーナーのこと。オーナーは三上啓二って言って、アタシも店長もかなり昔から知り合いで、うち等の間ではケイ君って呼んでるのよ。」

私の不思議そうな顔を見て、アキラちゃんが笑って答えた。色々話を聞いてると、アキラちゃんって店長やオーナーともかなり親しいみたい。そういえばアキラちゃんは上野で働いていた頃にオーナーにスカウトされて『MOON』に來たんだっけ。

「やだ、勘違いしないでよ。ケイ君とアタシの間には何もないからねっ。」

そういつて笑い、目の前に運ばれてきたラーメンにコシヨウをふりかける。私も一緒にコシヨウをかけ、割り箸を割った。このラーメン屋さんは小さくてぼろぼろだけど、結構美味しかった。太麺タイプのラーメンはこのお店で初めて食べたけど、結構癖になってる自分がいる。

「・・・そんなことよりさあ、ミキちゃん。店長と大丈夫？」

「は!??」

突然のアキラちゃんの言葉に、私は口に使っていたスープを噴出しそうになった。

「店長に、ミキちゃんは素質があるから、もっと頑張れる!みたいに言われたんでしょ？」

なかなか鋭い。私はももごとした返事をして、ラーメンをすすった。自分で『自分が素質あるっていわれた』なんて言うのは、結構恥ずかしい・・・。

「・・・アタシもそう思うよ。」

アキラちゃんはラーメンを食べながら、淡々と続ける。

「アタシも、ミキちゃんは才能あると思うよ。本気でやれば、結構いいところまでいくんじゃないかな。」

「またまた、アキラちゃん何言ってるの・・・」

ラーメンのスープで体が温まったのか、額から汗が流れてきた。近くの紙ナフキンで汗を押さえる。

「いや、ほんとに。しっかりやるともっと稼げるし、いいと思うよ。すぐにエナさんくらいは追いつくんじゃないかな。ただ・・・誰を好きになるのも自由だけど、ハマりすぎて自分を犠牲にしないでねってカンジ？どうせ付き合うなら、相手に利用されるんじゃないくて、逆に利用するくらいじゃないと。」

「いやいやいや、店長と何も無いし！絶対、店長とか好きになったりしないから！」

なんだか誤解があるようなので、目いっぱい否定しておかなきゃ。店長・・・カッコいいほうだと思うけど、かなり年上だし、女関係派手みたいだし・・・まず、あり得ない。

「そお？だといいいけど・・・。ゆいちゃんとか、もう結構ミキちゃんのこと警戒してるからね。気をつけて。」

アキラちゃんはそう言って、ラーメンを食べ終え、レンジと箸を置いた。ゆいちゃん・・・そういえば、店長とミーティングした日はじめて仕事以外の時間に話しかけられたけど、なんだか言葉に棘があるのは感じていた。もしかして、ゆいちゃんは私が店長とどうにかなってるのか疑ってるの！？

「・・・ミキちゃんには、そうなって欲しくないんだよね・・・」
頬杖をついて、真っ暗な窓外に視線を運んだアキラちゃんは、大きくため息をついた。何かを考えるように外を見つめていたアキラちゃんが、しばらくして口を開いた。

「・・・昔ね、上野で一緒に働いていたアタシの親友みたいな子がね、その色管理でボロボロになってさあ・・・」

アキラちゃんは視線を外にむけたまま、何か遠くを見つめながら続けた。

「…………結局、自殺未遂しちゃったんだよね。」

「え……………」

何かがパキンと音を立てて割れるような衝撃が、私の頭の中に走った。周りの音も聞こえない、自分達以外のすべての時間が止まったような、凍りついた瞬間だった。

アキラちゃんの…………親友が…………自殺未遂…………!?

ラーメン屋の古い暖房機のブーンブーンという音が、やたら大きく耳に響く…………

19、背負っていた闇

アキラちゃんの口から、とんでもない言葉を聞いてから、一体どのくらい時間が経ってたのかも分からない。もしかしたら、ほんの一瞬だったかもしれない。だけど、私と、アキラちゃんは長い長い本当に長い沈黙の中にいたように感じられた。

お店の店員がカチャカチャと食器を洗う音が聞こえる。平日の深夜でも賑わう歌舞伎町の外の音が、ガラス越しに聞こえてくる。しばらくしてからアキラちゃんは椅子に深く腰掛け、腕を組んでため息をついた。

「ごめん。こんな話、怖がるからミキちゃんに言わないほうがいいかとも思っただけだよ……でも、やっぱりちゃんと話しておこうと思って……」

「……ううん。いいよ……」

私は静かに首をふり、アキラちゃんを見た。アキラちゃんは少し微笑むと、ぽつり、ぽつりと話し始める。

「……昔ね、私が最初に夜の仕事を始めたお店が上野でね……『MOON』なんかよりは全然小さな箱の店だけど、そこそこ人気のあるお店だったんだ。その店で彼女と出会ったの。私とはタイプが全く逆の子だったんだけど、同じ時期に入店したのもあって、わりとすぐに仲良くなったんだ。お互い夜の仕事初めてで分からないことだらけだったから、なんだか一緒だと心強くてさ。彼女は山形から上京してきた子で、目鼻立ちがはっきりした美人さんだった。その頃のアタシは、ナンバーワンとか、ネオン街に憧れてる、よく居る若い子ってカンジだったかな。」

アキラちゃんはそういうと、水の入ったグラスを手にし、少しだけ水を飲む。

「そんな私が変わり始めたきっかけが、色管理ってやつね。当時担

当だったボーイに迫られて、アタシも悪い気がしなかったから付き合っちゃったんだ。カッコいいほうだったし、いいお客さんに優先的に付けてもらえてたし。それに、彼の事、結構本気で好きになっちゃっててさ・・・他にも沢山女がいるのも知らずに、色管理だって事も知らないで、一人舞い上がっちゃってね。」

・・・え・・・？アキラちゃんが、付き合ってたの・・・？

「アタシはもうその時は彼の事と、どうやったら彼にもっと気に入ってもらえるかしか考えてなかったな。もっと成績上げなきゃとか、そればかり・・・。ナンバーワンになったら、彼にどんな風に褒めてもらえるんだろうとか、アタシが頑張れば彼を店長にしてあげられるとか、そんなことばかり。ちょうど同じ時期、彼女も成績をぐんと上げてきた頃でさ、二人とも同じ時期に入店したからね。成長の度合いも一緒だったのかな。その頃から彼女とアタシは友達から、いいライバルになった。毎日毎日、毎月毎月、どっちが勝った、どっちが負けたって競いあってね。何ていうの、切磋琢磨ってこのことかな。お互い忙しくなっても、仕事終わりにたまに二人で飲みに言っっては仕事の愚痴言ったり、お客さんの話したり、嫌な女の話したりしてさ・・・指名が同じテーブルもいくつもあったから、お互いに上手くお客さんに営業かけて、来て貰って、ボトル入れて・・・いいコンビって感じだったの。」

ちよっと嬉しそうに、アキラちゃんは微笑んだ。なんだかいままで私が見たことも無いようなアキラちゃんの表情だった。懐かしそうで、それでいてちよっと哀しそうで・・・

「でもね、そんないい時間は続かなかった。・・・アタシがある日、お客さんとアフターして朝方に家に帰ろうとしたときに、ばったり会っちゃたの。・・・彼と、彼女がラブホから一緒に出てきたところだね。・・・彼、アタシと付き合いながら、彼女とも付き合ってた。」

「ええっ!？」

私は思わず大きな声を上げて驚いてしまった。・・・その彼、アキ

ラちゃんと仲いい女の子とも付き合ってたの!?

「もちろん店内恋愛禁止ってきまりだったから、アタシも彼女も彼のことなんて話に出したこともなくて、知らなかった。・・・その時のアタシと彼の様子をみて、彼女もアタシ達の仲を察知したんだろうね。・・・それから、私と彼女の関係が変わってった。何があっても絶対に負けられないし、絶対に負かさなきゃいけないって。負かすだけじゃなくて潰さなきゃって。・・・今考えたら超バカだよ。悪いのは彼なんだから、彼の事責めるべきだったのに・・・恋愛で頭の中おかしくなったのかな。」

大きなため息をつき、アキラちゃんはまた悲しげな顔をする。

「それでも彼はアタシとも彼女とも関係を続けてた。どっちか選べない。どちらかがナンバーワンになったら、そっちと付き合ってる事を店長に報告して、正式に付き合いを認めてもらえるからとか唆されてさあ・・・。もうアタシも頭の中狂ってたから、彼の事が好きだとか、そんなことより彼女に絶対負けたくない一心でがむしゃらに頑張った。アタシも彼女も、えげつない手も使ったし、お互い酷いことをしたし、ひどい営業もした、いっぱい無理もした。もう後に引けないってカンジかな。辛くて辛くて、店辞めちゃえば済むのに、辞めれないの。辞めたほうが負けになるから。もう本当にアタシも彼女もぼろぼろだった・・・毎日毎日、いらいらして・・・限界だと思った。・・・でも、先に限界がきたのは彼女のほう。」

「お店の店員が明日のスープの仕込みを始めたのか、大きな鍋からぐつぐつと湯気をたてている音が狭い店内に響く。」

「あの日、仕事終わりに彼がアタシの部屋に来てたの。二人でビール飲んでまったりしてた朝方、彼の携帯に電話がかかってきてさ。彼女からだった。彼もしばらく電話を無視してて、アタシもきつと彼女の嫌がらせだと思ったから電話に出ないように言ってたの。でもね、着信がきれては、また着信が鳴って・・・5分くらいずっと続いたから、さすがに彼もキレて怒鳴るつもりで電話に出たの・・・」

そしたら彼、真っ青な顔でアタシを見て『今、手首切ったからって言われた』ってね・・・」

「えええええっ・・・」

それまで黙って聞いていた私の指が、小刻みに震える。

「アタシも何度か行ったことがあるから、彼女の家は知ってた。でも、アタシの家からじゃタクシーに乗らないと行けない距離だった。・・・嘘かもしれないって、嘘だったら今度こそ今までの鬱憤と一緒に殴ってやろうと思って・・・でも嘘であって欲しくて、一緒にタクシーで彼女の家まで行った。彼、彼女の家を鍵、持ってたのね。当たり前のように鍵を開けて入ってた。・・・部屋に入ってから、風呂場で彼女を見つけて、彼女が病院に運ばれるまで、今でもあんまり思い出せないんだ。気がついたらお店の店長も来てて、目の前のベッドには、驚くほど青白くて、唇も真っ青な生きているのか死んでいるかも分からない状態の彼女が横たわっていた。・・・それからアタシは何日かお休みをもらって、しばらく休んで出勤したら、彼女はとくに店を辞めてた。精神的に病んでしまっていて療養が必要だから実家に連れ戻されたって。・・・あの彼も全部の責任を押し付けられてクビになっていた。どっちの携帯も繋がらない。二人とも、何も言わずになくなったの。店長からは、彼女の事は誰にも言うなって口止めまでされた・・・アタシに残されたのは何も無かったな・・・色々なものを犠牲にして、がむしゃらに突っ走って、大切なものの全部なくして、残ったのは哀しさしかなかった・・・」

「アキラちゃん・・・」

気がついたらぼろぼろと、涙がこぼれてきた。押さえても、押さえても、涙があふれてく。

「・・・しばらくして、結局アタシも色々めんどくさくなっちゃって、やる気も無くなっちゃってさ、店を辞めたんだ。・・・しばらくは浅草の実家でプラプラしてた。半分廃人みたいな生活だったな。それからだいぶ経ってから、名前も変えて、誰も知らないような上

野の小さな場末のキャバクラで働き始めたんだ。・・・それからかな、今みたいなアタシになったのは。」

お店の店員が暖簾を中にしまい始めた。いつの間にか、新聞配達バイクが外を走る音が聞こえる。

「ごめんね。重い話して・・・でもね、最初にわかって欲しかったの。昔のアタシみたいにおかしくなってる時には、きっと何言っても聞いてもらえないから・・・。」

アキラちゃんはそう言って鼻をすする。ちょっぴり涙声のアキラちゃんは、それでも私に笑って見せる。

「ちなみにね、このアキラって名前、その子が使ってた名前なんだ。この名前で居る限り、絶対彼女の事忘れないし、自分がどんなにバカだったかいつでも思いだせるだせるじゃん。何の為に働くのか本当に見失ってた。・・・だからさ、ミキちゃんがこの先どんな風に働いてもいいと思うけど、絶対に見失っちゃだめだよ。自分が何のために働くか。大切なものは何なのか。店の男なんかの為にボロボロになるなんて、絶対だめだからね。」

何のために働くか・・・大切なものは何なのか・・・私は自分自身の心に問いただしてみた。・・・たぶん今の私は、自分の目の前の事でいっぱい、そこまで真剣に仕事を考えてないから答えが出てこないのかもしれない。それでも、その言葉は私の心にずっしりと響き、今まではなんだか漠然ともやもやとしてた仕事への意識の真ん中に、なにかはつきりとした芯ができたように思えた。

「・・・彼女はアタシ自身・・・あの日の彼女はアタシだったかもしれないから・・・この名前と一緒に、ずっと背負ってくの。これが私の戒めかな。・・・ってカンジ?。」

そういつて、久しぶりにアキラちゃんはイタズラっぽい笑みをみせた。この笑顔をみると、なんだか安心する。

いつも笑顔でテキストぶってるアキラちゃんの、意外な過去を垣間見た。色々なことを背負って、乗り越えて今のアキラちゃんがい

るんだ。ただのヘルプ専門のスーパーヘルパーなんて言ってたけど、やっぱりそうじゃなかった。

ネオンに彩られた、華やかな世界の裏側の、闇……。きっとアキラちゃんの話は、その闇の一部に過ぎないんだろう。その深い底が見えない闇は、これからどれだけ私の前に姿を現すのだろうか・

・

20、動き出した波

アキラちゃんから昔の話を聞かされた次の日、アキラちゃんはいつもと変わらず、明るく元気に仕事をしていた。ちよっぴりどう接していいか戸惑っていた私だったが、そんな心配は要らなかった。アキラちゃんは私と目が合うと、ちよっぴり目配せして、小さくガツツポーズをとった。その表情をみて、私も大きく頷く。・・・そうだ、アキラちゃんはあの過去を乗り越えてここにいるんだっけ・

週末という事もあり、店は大繁盛。アキラちゃんはスーパーヘルパーぶりを発揮し、私もまりあさんのお客さんのヘルプと、新規のお客さんの席と忙しく回った。

仕事を終えた私達は、店長の呼び出しでフロアに集められた。キヤストだけではなく、ボーイも全員フロアに集められていた。なんとなく暗黙の了解ではあったが、一番前の列にはまりあさんや、ゆいちゃん、エナさんが立ち、私やアキラちゃん、他にも新人の子などは後ろのほうに立った。・・・なんだろう？私が入ってから、こうやって全員集められるなんて初めてだ。私はあらためてまじまじと、お店のメンバーを見渡した。まりあさんは今日は薄い水色のロングドレスに、髪の毛をいつものように上品にハーフアップにして、なんだかキラキラとしたヘッドドレスを絡め、まさにお姫様だった。ゆいちゃんはいつもわりと暗い色のドレスを着ていることが多くて、今日も深い紫色のサテンのミドル丈のドレス。あいかわらず気だるそうに腕を組んでいる。ドレスの色のせいか実年齢よりは大人っぽく見えるんだよね。エナさんは背が低いこともありロングドレスは滅多に着ないんだけど、超ミニ丈のタイトなドレスがあり得ないくらいに似合っていて、芸能人みたいな独特のオーラをはなっていた。他にも平日にはあまり出勤しない女の子やボーイさんも週末という

事もあり集まっていた。

「みんな集まったか？」

聞きなれない声。みんながそろったフロアに細身の男性が入ってきた。初めて見る顔。色白で鋭い目、シャツのボタンを胸元まであけ、さらっとジャケットを羽織っている。その男は足早に入ってきて、店長の隣に並んだ。

「あれ、ケイ君。」

アキラちゃんが私にだけ聞こえるような小さな声でささやいた。

あれが、オーナーの！？ 思ってたよりもすごく若い！もしかしたら店長よりも若いんじゃないかな？

ケイ君、と呼ばれたオーナーは私達従業員をぐるっと見渡すと、話を始めた。

「みんなお疲れ。噂で聞いている人もいるかもしれないけど、年明け、春ごろをメドにこの『MOON』をリニューアル、それからもう一店舗姉妹店を出すことになった。」

その言葉に、フロアの従業員がざわざわと騒がしくなる。

「それじゃありリニューアル後の『MOON』のコンセプトと、新店舗について林田ちゃんから説明して。」

・林田ちゃん……。明らかに店長のほうがオーナーより年上だ。オーナーのケイ君と、店長も、それからアキラちゃんは長い付き合いだって言ってたっけ……。どんな関係性なんだろう、この3人。

「えー・・・」

店長が軽く咳払いをして一步前に出てきた。

「もう一店舗をだすにあたり、この『MOON』も料金体系含めてリニューアルし、完全なカラー分けをし、より特色のある店作りにするつもりだ。簡単に言えば、『MOON』は高級店、新店舗は激安店だ。それにあわせて既存のキャストも振り分けする。リニューアル『MOON』は品のある接客の、大人っぽい高級店。もちろんキャストの容姿も重要だ。新店舗は激安店だけあって、見た目が良

くて、飲んで騒いで売り上げ立てれたらそれで良し。もちろん二つの店舗では給料にも差が出るから今から各自、希望の店舗にいけるように頑張るように。」

その言葉にいつそうフロアが騒がしくなる。

「・・・新店舗とか、まじで給料安そう・・・」

「・・・高級店って、お客持つてる子じゃなきゃ無理じゃね?・・・」
「・・・まじで?どっちにも使えない子はクビ?」

そんな会話があちこちから聞こえてきた。・・・そりやそうだよ、今の『MOON』も新宿ではキャストの給料もお客さんの料金も高いほうだって聞いているけど。激安店何ていったら確実に給料安くなるんだろうな・・・。私はこないだの店長の言葉を思い出した。もしかして、私もツカエナイ子って思われたらその激安店行きになるってことか!? 店長はそれぞれの店舗のキャストを厳選するって言うってたから、ありえなくも無い。

「リニール『MOON』には、もちろん新たにスカウトしてきた力のあるキャストも入れるつもりだけど、今の『MOON』からも選抜したメンバーを選んでいく。残念ながらカラーに合わないキャストは新店舗の激安店か、辞めてほかに行ってもらう事になるだろうな。その代わり、リニール『MOON』のキャストに選ばれた子は、確実に今以上の給料になるのを保障する。激安点では今より給料が安くなる子もいるかもしれないが、その分、指名や売り上げ、イベントノルマは一切無い。給料も最低保証からは絶対に下がらないシステムだ。どちらに行くにしても、頑張る気が見えない子は選ばないからな。今まで手を抜いてた子も、今からでもいいから頑張りを見せて欲しい。指名で稼げる子はもっと売り上げと指名を稼ぐ。指名がないやつは、飲んで盛り上げて、毎日毎日の売り上げをちよつとでも伸ばすこと。」

ざわついていた店舗であったが、給料の話が出ると、みんな目の色が変わり、神妙に店長の話に耳を傾けた。

「えー、あたし新店舗行きかなあー。給料下がるのやだあ」

そう小声でつぶやいたのは、奈々ちゃん。奈々ちゃんも大学生のアルバイトで、見た目は細身で可愛いんだけど、やる気が無い、本当のヘルプ専門といったバイト感覚の子だった。

「・・・いいじゃん。奈々なんて最初からやる気ないんだから。飲んで騒ぐのでいいなら、新店舗のほうがあってんじゃない？『MON』にいたら今よりノルマもきつくなるよ」

アキラちゃんが奈々ちゃんにささやいた。

「あーそっかあ。指名とらなくてもいいなら、超楽うー♪」

奈々ちゃんをはじめ、何人かがキャツキヤと新店舗の話に盛り上がっていた。

「それから・・・新店舗の店長なんだが・・・岩村！」

店長のその言葉に、岩村が胸を張って一歩前に出てきた。ちょっと得意げに咳払いをする。

「今月末のイベントから、来月末、つまり年内いっぱい自分の担当キャストの売り上げで店長を決めることになった。・・・岩村ともう一人」

その言葉に、またフロアが雑然となった。・・・岩村以外にも、いるの！？岩村本人も、店長に選抜されるのは自分だけだと思いついていた為、凍りついた顔で店長を見た。

「・・・宮道！」

威勢のいい返事が聞こえてきた。端のほうに立っていた宮道が前に出てくる。・・・え？あの小太りの、宮道が店長候補？？アキラちゃんが言ってたように、他にも店長候補がに売り込んでるのがあるって・・・宮道だったんだ！？

「この二人の担当課での売り上げを競ってもらおう。」

一斉に『ええーっ！』という声上がる。そりゃそうだ。なんで二人のために頑張らなきゃいけないんだよ。周りの女の達も、同じようなことを言っていた。

「ちなみに、新店舗・リニール店舗のキャストの割り振りは、新店舗の店長として決まったほうと、俺とで行う。キャストの人事

や給料も決めてもらう。そのつもりで頑張るように。」

騒ぎを一喝するかのようになり、店長が大きな声で言った。・・・えっと、どういう事なんだろ・・・隣のアキラちゃんに小声で聞いてみた。

「・・・つまりさ、新店長になったほうが今後の人事権を持つてことよ。新店長に押し上げてくれた自分の課のキャストは、そりゃ色々この先優遇されるってことよね。負けたほうの課のキャストは・・・まあクビとはならないだろうけど、どんな待遇になるのかわかんないわね。」

アキラちゃんがため息混じりにつぶやく。

「・・・岩村と宮道以外のボーイの担当キャストもいるわけだから、この勝負が人事の全てってわけじゃないと思うけどね。それに、あたしたち専用ヘルプは当然まりあさんにくつついて『MOON』に残るんだと思うけど、全員とは限らないし。結局自分自身、それぞれ頑張り見せるしかないって事じゃないかな。」

それぞれが、頑張りを見せるしかない。・・・か。どうしよう、私、年始にかけて一番忙しいのに・・・頑張りなんて見せられるのかな。私はとたん不安になった。突然クビになっても、他にすぐ雇ってもらえるとも限らないし、昼間やってる仕事もない。家賃や携帯代なんていまでも1ヵ月遅れで払ってる状態なのに、突然収入が減るとなると・・・どうなっちゃうんだろ。

「よし、全体ミーティングは以上。みんなおつかれ！」

オーナーはそう言って、さっさと奥へ入っていった。フロアのみんなはぞろぞろと、口々に何かいいながら不満げに動きだす。

「・・・よろしくな、岩村。」

宮道がにやりと、もの凄く嫌味に笑って、岩村に握手の手を差し出していた。・・・宮道って、いつもニコニコしてる小太りってイメージしかなかったけど・・・こんな意地悪な顔する奴だっけ!?

「・・・ふんっ。なんでお前が店長候補なんだよ!」

岩村はパシン、と、宮道から差し出された手を払った。そういえ

ばこの二人、普段でもあんまり仲良い感じはしなかったな。二人はお互いにらみ合い、フロアを出て行った。

「……ね、店長。」

もう一方では、フロアにいたゆいちゃんが店長に歩み寄り、何かを話しかけていた。

「……あのさ、ちょっと相談があるんだけど……」

「……ん？何だよ相談って……」

「……あのさ。今日……」

店長もゆいちゃんに呼び止められ、耳を貸していたが、フロアに居たまりあさんとエナさんがメイクルームに向かおうとするのを見るなり、店長は話の途中でゆいちゃんから離れ、まりあさんのそばに行ってしまった。

「……まりあ、今日この後時間空けとけよ。ケイ君と一緒に打ち合わせするから、店長室に来いよ！エナも来る？」

「ごめん。エナ、この後アフターだから。まりあ、行って来れば？」

「うーん。」

ちよつと考えてるようなまりあさんの耳元で、店長が何かを囁いていた。ゆいちゃんがその場に居るにも関わらず、いや、他のキャストも居るんだけど……いちゃいちゃしてるって感じかな。その場に居た私とアキラちゃんは、恐る恐る、ゆいちゃんを見た。基本、ゆいちゃんはいつも気だるい不機嫌そうな顔してるんだけど……今はそれ以上に物凄く険しい顔で店長とまりあさんを見ていた。

「はいはい。着替えてくるから。お疲れ様ー。」

しばらく店長に耳打ちされていたまりあさんは、そう適当に答えると、エナさんと一緒に奥に入っていた。

「……あのさあ」

ようやく店長が一人になったところで、ゆいちゃんが話しかけたけど……

「店長ー！電話鳴ってますよー」

タイミング悪く、細田くんがフロアに顔を出し、店長の携帯を持ってきた。店長はそのまま細田君から携帯を受け取ると、電話を持ってフロアを出ようとした。

「悪いな、ゆい。そういうことだらか。後でメールでもしといて！」

「・・・え・・・ちよつと・・・」

そういうと店長はゆいちゃんを置いたまま、奥に入っっていった。しばらく置き去りにされたゆいちゃんはフロアに突っ立っていたが、私とアキラちゃんが見てるのに気づくと、早足でその場から立ち去った。すれ違い間際、ゆいちゃんは私の事をキッと睨み付けてきた。いつも不機嫌そうだけど、その目は憎憎しげで、今まで見たこと無いような目だった。・・・宮道といい、ゆいちゃんといい、普段そんな表情しないのに・・・

「おーこわっ。」

アキラちゃんがわざと聞こえるように言った。

「・・・なんだか、とりつかれてるってカンジよね。宮道もゆいちゃんも。これから・・・どーなるのかなぁー」

「え？」

それだけ言うと、アキラちゃんは大きく伸びをしながらメイクルームに向かっていった。

リニューアルに、新店舗、そして次期店長争い。なんだか私を取り巻く環境が、すさまじい速さで動いていた・・・

21、魅力

店長とオーナーから、新店舗と『MOON』リニユアルの話を聞かされてから、にわかに女の子達は慌しくなった。自分の指名客を持つてゐる子は今まで以上に営業に力を入れ、お客さんを持つてない子は毎日着く一つ一つのテーブルを盛り上げ、売り上げを伸ばすことに貢献していた。そんな甲斐あってか、11月末にかけて『MOON』は連日お客さんが入りきれないほどの大盛況だった。平日でも平気で60分以上の待ち時間をご案内することも多かった。

そんな私は、昼間の舞台稽古も忙しくなり、出勤時間を22時30分過ぎにまで遅らせてもらっていた。時間の相談をしたとき、岩村は明らかに困ったような顔をしていたけど、店長の口ぞえもあってどうにか納得してもらった。

「……ねえ、君。もっと役に近づけてくれる？たとえばさ、その真っ黒な髪、どうにかならないかな？」

昼間、いつものように舞台稽古をしていた時だった。机に座って稽古を見ていた演出家が私にダメだしをした。現代版『ロミオとジュリエット』の舞台。明らかに舞台は日本じゃないのに、私の真っ黒な髪はイメージに合わないって……。

「はい……」

みんなの前でダメ出しをされ、ちょっとへこむ。……たしかに、黒髪のままじゃどうかとは思ってたけど……。まだ稽古中だからいいかって、思ってた。本番にはカツラとか考えてたんだけど。「……まだ稽古中だけだし、カタチから入って役を掴めるってこともあるんだよ。……君の芝居は悪くない。台詞回しも綺麗だし、聞きやすい。動きも悪くない。……けど、なんていうかな。『上手』にまとまりすぎてるんだよ。台詞はうまいけど、気持ちを感じられ

ないし、『絵』が見えないんだ。印象に残らない。これはアナウンサーの朗読劇じゃないからね。ぶっちゃけそんなに台詞が明瞭じゃなかったって、気持ちが伝わればいいと思ってる。君は・・・役になりきれてないっていうかね。黒髪、ジャージ姿の『大山咲』のまま、叶わない恋をする、イタリア人少女の気持ちって、わかるかい？」

演出家の言葉に、ちよつとはつとする。・・・私、台詞を追うことにいっぱいいいっぱいで、背景とか良く考えてなかった・・・。

「宝塚の男役の人ね、プライベートでも絶対スカートなんて履かないんだ。いつもパンツ姿、髪はショートで過ごす。プロ中のプロの役者さんだって、そうやって自分の役柄やキャラを突き詰めて、保っているんだ。気持ちを最初に完璧に作れば問題ないだろうが、そんなに簡単じゃないってことだ。だからこそ、形を作ってから気持ちを作る。不思議と形に気持ちがくっついてくるものだ。」

カタチから・・・そうだこれは前に飯岡さんにも同じようなことを言われたっけ。水商売は形から・・・形から、気持ちがついてくるって・・・。

次の休みの日、私は早速近くのドラッグストアで髪の毛のブリーチ剤を買った。本当は美容院にいれば一番良かったんだけど、まだ給料も出てなくてお金も無いので、そんなに贅沢はできない。ちよつと髪が長かったので1つでは足りないかなと思い、ブリーチ剤を2つ買ってみた。・・・一応、金髪にまでならないように気をつけよう。今よりちよつと明るい感じで・・・雑誌で立ち読みした海外セレブの髪色をイメージする。黒髪からここまで明るくするなんて初めて・・・。いったいどうなっちゃうんだろう・・・。

「・・・おはようございます・・・」

髪色を変えてから、初めての『MOON』出勤。初めての明るい髪色にどうも落ち着かない私・・・。もうすでにお店は開店していて店内は騒がしく、今日も結構お客さんが入ってるようだった。

「おお!? ミキちゃん!? おっはよー! どうしたの、その髪!?!」
いち早く私を見つけた岩村が、いつも以上のハイテンションで飛んできた。

「・・・あの、舞台の都合で・・・。これ、まずかったですかね・・・?」

私は恐る恐る聞いてみた。昼間の舞台稽古では『それっぽくなつた』と、みんなの評判は結構よかった。金髪とまではいかない、明るい茶色にどうにかおさまった私の髪。ど、どうかなあ・・・。

「いい! 良い!! 凄く良いよ!! 似合ってる!! さっそくさっちゃんに髪やつてもらおうよ!!!」

「は、はあ・・・」

目をキラキラさせて岩村が私をメイクルームに放り込む。

「あ。」

ヘアメのさっちゃんが私を見るなり、一言つぶやいた。濃いメイクのさっちゃんの、微妙な表情の変化はわかりづらい。が、明らかに私の髪色の変化に驚いてる風だった。

「さっちゃん! 来たよ来たよ! 頼むよ、超売れっ子風に!!!」

「ち、超売れっ子!?!」

啞然とする私を差し置いて、ホクホク顔の岩村は勝手にドレスを選びに行ってしまった。私は無言のさっちゃんの前の椅子に腰掛け、鏡に自分を見つめる。・・・今までこんな明るい髪色にしたことなかったけど・・・なんだか違う自分みたい。さっちゃんは私の髪にいつものストレートアイロンではなく、普通の巻きコテをあててきた。
「・・・あれ?」

私はおもわず、いつもと違う手順に声を発してしまった。自分の仕事に絶対の自信を持ってて、プライド高いさっちゃんに意見するなんて、怒るに決まってる。私は恐る恐るさっちゃんの様子を伺う。
「・・・今日は巻いてみるから・・・」

意外にも、通常通りの無愛想にさっちゃんは答えただけだった。
今までやった事もない、グルグル巻かれた髪・・・。

「・・・あんまり盛ると、品が無いから頭は盛らない・・・」

「は、はい・・・」

言葉少なに、さっちゃんと言う。もちろん、その目は一切私と合うことはなく、真剣に私の頭を見つめていた。

「・・・チーク、ピンク、ある？」

「えっ？」

突然の質問に、聞き返してしまう。・・・い、今なんて?? チーク? ピンク?

「・・・ちっ・・・」

いつものように、さっちゃんに不機嫌に舌打ちされてしまったが、さっちゃんはおもむろに自分のカバンからメイクポーチを出し、ピンク色のチークを私の頬に乗せた。ついでに細い筆と小さなケースを出し、さっちゃんは私に目をつむらせると目の上になにやら塗られ、強引にアイラインを引いていった。ついでにグロスを口に乘せられ、マスカラもこれでもかというくらい塗られた。

「・・・メイク、少し勉強してくんない・・・?」

「・・・あ・・・」

目を開けた私が見たのは・・・。つやつやあめ色に輝く髪。その髪は外まきにゴージャスに巻かれ、優雅におろしている。白い肌には可愛らしいピンクのチークに、うるうるした唇、お目めパッチリ、キラキラの女の子だった。

「これ・・・私??」

まだ見慣れない自分の髪色と、変貌に、なんだか信じられない。

「・・・あたしがせっかく最高に美しい髪作ってやっても、メイクがおかしかったら、私の仕事、台無し。・・・もうちょっと、自分で努力してくれる?」

不機嫌にさっちゃん椅子に座り、メイクルームに置いてあった雑誌を手にとって、私の目の前に乱暴に置いた。

「・・・あ、これ・・・」

コンビニとかでたまに見かける、『小悪魔girl』。金髪の頭

をいっぱい盛った女の子が表紙の雑誌だった。・よく見たことなんてなかったけど、手にとってパラパラめくると、『デカ目メイク』とか『愛されフェイスの作り方大公開!』とか、メイク特集が多いことに気づいた。今まで知らなかったアイラインの引き方や、眉毛の書き方、マスカラのつけ方や、おススメ付けマツゲ、チークの位置、メイク用品などなど・。もしかして、みんなこういうのを見てメイク研究してるのかな?

「・・・ちゃんとメイクしなかったら、もうあんたのヘアメやらないから・・・」

さっちゃんはそういつて、ダルそうに帰り仕度を始めた。

「・・・あ、ありがとうございます・・・メイク、が、がんばります。」

・・・メイクつて、こんなに変わるんだ。元・キャバ嬢のカリスマギヤル社長・姫華なちゃんが、さっちゃんをお気に入りというのも、なんだか分かる気がする。さっちゃんは口は悪いし、態度も横柄だし、愛想も無いけど・・・腕は物凄くいんだって、あと・・・そんなに悪い子じゃないのになって。なんだか身をもって実感した。自分自身が、こんなに変わるなんて思っても無かったから・・・

他のキャストの女の子達も、きつとこういった雑誌とかでメイクとか色々勉強してるんだね。みんな凄い綺麗で、可愛くて、同じ人種じゃない気がしてたけど、きれいになるために色々努力をしているんだ・・・この仕事関係無しに、今まで自分のメイクにあまり気を使っってなかった事が、ちよつと恥ずかしかった。

岩村が勝手に用意してたドレスは、薄いピンクのシフォン使いの優雅なロングドレス。胸元も大きく開いていて、キラキラしたシルバーの刺繍がぎっしり。広がるドレスの裾部分は、センターに深くスリットが入っていて、歩くたびに脚が顕になる。これって、座ったらミニスカ以上に脚が見えちゃうんじゃない・・・

「ちよ、これって・・・」

あまり着慣れない露出の多いドレスに、ドキドキしながらフロア

へ出た。ひえゝゝゝ待機席の女の子の視線が集まってる!! 恥ずかしいゝゝゝ!!

「おう! いいじゃん!!! さすが、さっちゃん! そして俺、最高!! 俺のセレクト最高でしょ!? 清纯セクシー系!!! ミキちゃんの路線確定!!」

「・・・はあ・・・?!」

せ、清纯セクシー系?? なんか、矛盾してない?

「品のある、ゴージャスなセクシーってことだよ! ミキちゃんもともと、上品な雰囲気あるからね。でもセクシーな魅力ももってるからいけると思ったんだよな!」

「・・・。いや・・・セクシーとか、ちょっと無理なんですけど・・・」

私にセクシー系とか・・・本当に無理があるんだけど・・・私服もカジュアル系な私にセクシーの『セ』の字も見つからないと思うけどなあ。

「キャストの女の子の魅力を引き出すのも、担当の仕事だからね!」
岩村は満足そうに私を見る。・・・魅力? コレが私の魅力ってこと???

「へー! いいじゃん、ミキちゃん! カッコいいー! 髪の毛も良いカ
ンジじゃん!」

待機席で携帯をいじってたアキラちゃんまで飛んできた。

「結構、おっぱい大きいとは思ってたけど、おっきいねえ。ミキちゃん、何カップ?」

「え、ええ!?!」

アキラちゃんが堂々と、岩村や他の女の子が居る前で聞いてきた。
・・・そ、そんなみんなの前で言えないってば!!

「いーなー。アタシもおっぱい大きかったら、露出しまくるのになあー」

そういつて、アキラちゃんは自分の胸に手を当てる。私・・・そんなに自分では胸が大きいほうだなんて思ってなかったんだけど・・・

・大きいのかな。自分で意識したことなんてなかった。

「でも、ミキちゃん、こーゆーの、凄い似合ってるよ。フリフリ可愛い系より、こっちのほうがなんか似合ってる。雑誌に載ってもおかしくないカンジ。・・・ついにやる気になっちゃった？」

アキラちゃんはそういつて、何かを含んだような笑みをみせた。
・そんなんじゃないんだけど・・・。

思いもかけずにイメチェンした私。その反応はすぐさま、お客さんの席で現れることになった。

それは良くも、悪くも・・・。

22、戸惑い

私自身も、思いがけなかった、イメチェン。慣れない自分の容姿になんだかまだ、自信が無い……。

「じゃあ早速席に着こうか！今日もまりあさん指名の飯岡さんから、ミキちゃんも場内指名もらってるからね！よろしく！」

岩村に案内された、いつものVIP席。席に座っていた飯岡さんとまりあさんは、私の姿を見るなり驚きの声を上げた。

「おお！びっくりしたなー！どこの売れっ子嬢かと思ったよ！」

「凄い！びっくり！ミキちゃん素敵！！！」

飯岡さんとまりあさんが口々に褒めてくれた。そんなに容姿で褒められたことなんて無いから、嬉しいけど、ちょっと恥ずかしい……。

「いいねー！サナギが蝶になってきたのかな？」

飯岡さんは嬉しそうにニコニコしている。私はまりあさんたちの対面にのストールに腰掛けた。深いスリットのドレスが大胆に開き、脚が顔わになる。このスリットがなんだか落ち着かない……。私はスリット部分にハンカチとポーチを置いて、気持ちばかりだけ隠してみた。

「今までのミキちゃんも可愛らしかったけど、メイクもドレスも今日の一番似合ってると思うよ。良いイメチェンじゃない？」

まりあさんにもこやかに私を見つめた。

「あ……。いえ……。髪の毛は舞台の都合で明るくしたんですけど、……。今日のメイクとか、全部さっちゃんがやってくれたものだし、ドレスも岩村さんが選んでくれたし……。自分でできるように色々勉強しないといけない……」

そう答えて、私は飯岡さんのグラスにお酒を作った。今日はクラッシュアイスで飲んでもらいたかった。また新しいお酒のボトルだ。

相変わらず、高そうだなー……。見たこともないような、陶器のボトルがテーブルには載っていた。

「おお、さっちゃんがメイクしてくれたのか。それは凄いな。」

お酒を飲んでいた飯岡さんが驚いたようにつぶやいた。・・・そんなに凄いことなのかな？

「いーなーさっちゃんのメイクー。さっちゃんって、ヘアメだけじゃなくて、メイクも上手いんだよー」

そういつてまりあさんは私に顔を近づけ、まじまじと私の顔のメイクを観察している。

「・・・さっちゃんって、腕がいいからどこのお店でも欲しがってるんだけど、このオーナーと古い付き合い見たいで、それでウチに来てもらってるんだって。さっちゃん自身、オリジナルコスメとか『姫なな』ブランドで姫華なちゃんと共同プロデュースしてるみたいだし、ゆくゆくは自分のサロン出す予定みたいなんだけどね。」

姫なな・・・姫華なの愛称だ。さっちゃんをいたくお気に入りというカリスマギャル社長。まさかさっちゃんが、コスメのプロデュースまでしていたとは……。さっちゃんはオーナーのツテで『MOON』に来ているのか。さっちゃんが、そんな凄い人だったなんて、全然知らなかった・・・。

「よし、今日はミキちゃんのイメチェン大成功を祝って、乾杯しようか！シャンパン、なんか頼んでくれる？」

そういつて、えらく上機嫌になった飯岡さんはシャンパンを追加で頼み、一緒に乾杯をさせてもらった。

飯岡さんが帰った後、何人か新規のお客さんに着いたが、どのお客さんの感触も良くて場内指名を立て続けにもらうことができた。・・・これって、岩村が言っていた『魅力』のお陰なのかな。私、今まで自分の魅力に全く気づいてなかったってことなのだろうか。顔も悪くは無いだろうけど、目立つほど取り立てて可愛いわけじゃないし、目は二重だけど、どデカイ二重というわけじゃない。マツゲもそんなに長くないし、どちらかというとキツくみえるタイプの顔だ

と思っていた。けど、ここまで変わるなんて・・・もちろん、さっちゃんの手腕あってこその変身なんだろうけど、いかに、今まで自分自身を磨くことに手を抜いていたか・・・ってことだ。

そういえば今までは、あの人は美人、あの子はすごく可愛い・・・私なんて・・・そんな風にいつも思ってた。ここに来た日も『私なんか働ける場所じゃないんじゃないか』って、思った。考えてみれば舞台の学校でも、恋愛でも、舞台のオーディションも、頑張る前から『私なんて無理』って、後ろ向きだった気がする。

何か、変わるかもしれない・・・

売れっ子になりたいとか、まだそんなことじゃなくって。今までの私から、何か変わるかも・・・もしかしたら、この仕事で今までの私から、何か変えられるかも。私の心の中で、そんな風に芽生えてきた。

「・・・ミキちゃん。」

場内指名をもらった席に岩村が顔を出し、私に耳打ちをしてきた。
「・・・ご指名です。」

どうやら指名のお客さんが来てくれたみたいだ。私はぎこちなく、場内指名をもらったお客さんに挨拶をして、席を立った。入れ替わりにヘルプの女の子が入ってくる。

岩村に案内されたフロアの小さな席には、樋口さんがいた。いつものように、品がいいスーツにおしゃれなネクタイ。ちよつと髪を切ったのか、さっぱりしたようだった。

「・・・あ・・・あれ？・・・ミキちゃん？」

私の姿を見た樋口さんは、何とっていいかわからないように、ぼかんとしたままだった。

「あ・・・これ、ちよつと舞台に必要で・・・」

樋口さんは明らかに、変わった私の容姿に戸惑ってるようだった。
「そ、そうか・・・なんだか・・・すっかりカンジが変わっちゃ

ったね。びっくりしたよ。」

相変わらず樋口さんとメールのやり取りは続いていたけど、他にもメールのやり取りをするお客さんも増えてきてしまい、前ほど頻繁なやり取りはできなくなっていた。もちろん、昼間は舞台の稽古もあるので忙しいのもあるんだけど。

樋口さん・・・あんまり気に入らないのかな・・・？この前はあんなに話が弾んで何時間もいてくれた樋口さんだったけど、今日はあまり会話も弾まない。こないだ一緒についてくれたアキラちゃんは、まりあさんの席のヘルプで忙しくて今日は一緒についてくれる気配は無かった。

「・・・あ、あの。今度の日曜日、舞台稽古も休みなんですけど。一緒にパソコン、見に行ってくれませんか？」

私はどうにか樋口さんのご機嫌をとろうと、こないだうやむやにしてしまったお誘いを引っ張り出した。・・・まだ、ノートパソコンなんて買えないけど、一緒に見に行くくらいなら・・・。「あー・・・そうだったね。・・・うーん。・・・でも・・・また今度にしようか・・・。」

樋口さんはそういつて、気のない返事をした。・・・あれ？こないだは樋口さんのほうが乗り気だったのに・・・なんかマズイことでも言ったかな、私・・・。

結局、樋口さんは1セットただけで帰ってしまった。その後もずっと樋口さんの様子が気になってしまい、なんだか気が晴れないまま仕事を終えた。私のイメチェンは概ね好評だったけど、樋口さんには受け入れてもらえなかったような・・・。

樋口さんは、私の初めての指名のお客さん。そう思うと、なんだかちょっと寂しくなってきた。後でアキラちゃんか岩村に相談してみよう・・・。あんまり岩村のテンションは好きじゃないけど、夜の仕事初心者の私に色々アドバイスをくれるのは助かってる。それに、お客さんの管理なんか私以上にやってくれてるし。お客さんの事で相談するなら、ボーイなら岩村かなあと思った。

「ミキちゃん、めちゃくちゃ綺麗になっちゃって!! さすがだねー!今日は場内指名バンバン獲ってたって?」

営業終了したところに、店長がやってきた。後ろを見るとオーナーも居る。・・・ああ、きつと新店舗とかの打ち合わせでもしてたのかな。あまりにも大げさに店長が言うので、周りの女の子の視線が集まり、なんだか痛い。

「・・・やるじゃん、ミキティ。・・・めちゃくちゃ良い女だよ・・・」

「えっ」

いきなり店長が私の肩を引きよせ、耳元で囁いてきた。囁くっていうか、ぴったり店長の唇が耳に触れてる。熱っぽい唇と、口元のヒゲが私の耳元で動き、なんだかくすぐったい。・・・み、みんな見てるのに・・・。とっさに逃れようと身体をよじったけど、グイッと強い力で肩を引き寄せられてしまった。

「・・・いいから、逃げんなって・・・」

店長の香水と、タバコの匂いと、ちよっとお酒の匂いが私を包んだ。・・・て、店長、ちよっと酔ってるの!? そんな様子を呆れたように見ていたオーナーが口を開いた。

「林田ちゃん、その辺で待ってるから」

オーナーはそれだけ言うと、フロアから出て行くこうとする。オーナーの言葉に、ようやく店長は私から身体を離れた。

「おう。出るとき電話する!」

わらわらとキャストの女の子達がみんなメイクルームに向かう。

私も早いところ着替えようと、メイクルームに向かった・・・が・・・その私の腕を、店長がいきなり掴んだ。

「ミキティ・・・ちよっと店長室。」

「・・・え・・・?」

私は思わず、身構えてしまった。な、なんで店長室なんかに・・・「ミーティングだよ、ミーティング!・・・俺は店長なんだから、

キャストに指導するの、当たり前だろ！？・・・だから、俺が直接指導してやるって言ってんだろ？」

「で、でも・・・」

・・・ちよつと、この流れって、なんかマズくない！？店長、なんか酔ってるし、さっきのだって・・・。なんかいつもと違っておかしいし。

気がつくと、少し離れたところでゆいちゃんが冷ややかにこっちを見つめていた。うわ、ゆいちゃん睨んでるよ・・・！店長はそんなことをお構い無しに、私の腕を引っ張ってく。

やだ、私、どうなるんだろ・・・。どうしようどうしよう・・・！！！！

23、綾奈

周りのキャストの女の子の冷たい視線も気にせず、店長は強引に私の手を引いて店長室に向かっていった。

「あれーえ、店長、酔っ払ってんの!？」

フロアを出て、裏に入ったところでアキラちゃんがやって来て大げさに声を上げた。

「あ、アキラちゃん・・・！」

腕を掴まれて困惑している私を見て、アキラちゃんは更に大げさに話す。

「やだあー、店長、セクハラあー!? お店の中では、よしてよねえー!」

「・・・おい、勘違いすんなよ、俺はなあ・・・」

アキラちゃんのワザとらしい話し声に、さすがに店長も掴んでいた手を離れた。

「ええー、だって酔ってるって店長、いつもセクハラモードじゃん。」

い、いつも?もしかして、この店長って酒癖があんまり良くないのかな?だからさっき私達の様子を他の女の子も見えていたけど、冷ややかに見ていただけで何も言わなかったのって、・・・日常茶飯事だからってこと!?

「・・・ったく、ほんとにお前はうるせーな!いくらケイ君のお気に入りでだからって、調子乗んなよ!」

そう言う店長は不機嫌な顔をしてアキラちゃんを睨む。相変わらずアキラちゃんは、そんな店長を茶化すように

「おーこわい、こわい!助けてー犯されるうー!」

と、笑ってふざけている。・・・店長とオーナー、そしてアキラちゃんは特別付き合いが長いみたいだし・・・この3人の関係は、ま

だよく分らないけど、お互い『ケイ君』『林田ちゃん』なんて言い合う仲だし、アキラちゃんに至っては直接オーナーと連絡とってみたいだしなあ……。そんなこともあってか、この店でこんな風に堂々と店長に物言いできるのは、アキラちゃんくらいだった。不動のナンバーワン・まりあさんと一緒に、そこまで堂々と店長に口答えするのは見たことない。

「?どうしたの?」

そこへ、ちょうどトイレから出てきたらしいまりあさんがやって来た。ばつが悪くなったらしい店長は、不機嫌なまま

「……なんでもねえよ!……おい、まりあ、着替えたらミキティ連れて一緒に店長室来いよ!」

とだけ言って、乱暴に店長室のドアを閉めてしまった。……まりあさんと一緒に……。ああ、それじゃあ危ないことも無いか。いや、でも何の用なんだろう?まりあさんと一緒に……。相変わらず私が呆然と立ち尽くしていたところで、まりあさんが

くすくす笑う。

「……ふふ。ミキちゃんの事、ミキティって呼ぶことになったの?可愛いー。私もこれからそう呼ぼうと。ミキティ、早く着替えてね。」

「あ、ええ!?!」

なんだか恥ずかしいやら照れくさいやら、状況がつかめないやらで、答えに困ってた私を置いて、まりあさんはさっさとメイクルームに向かってしまった。隣を見ればアキラちゃんもニヤニヤ笑っている。

「いいじゃん、ミキティ!お客さんにも浸透しそうだし。さ、早く着替えないと!急いで、ミキティ!」

「え、ええー……」

ちよっぴり人がまばらになっていたメイクルームで着替える私達。人が少ないとはいえ、周りに他の女の子も居たので、この後店長になんて呼ばれているのか、まりあさんに聞くことができなかった。

もちろん、その場にゆいちゃんや、ゆいちゃんと仲いい女の子達も居たからんだけど・・・。

私がお店にやって来た初日、待機席でまりあさんの悪口を散々言っていたメンバーだ。私がまりあさんの専用ヘルプになったと知るや否や、さすがに私の聞こえるところではまりあさんの悪口なんて言わなくなったけど・・・影で色々言ってるだろうことは目に見えてた。やっぱ、ゆいちゃんと仲が良いメンバーは、まりあさんをよく思って無いらしい。そりゃそうか。まりあさんが来なければ、ゆいちゃんがナンバーワンで、店長の一番のお気に入りだったんだもんね・・・。

「ねーまりあさん。オーナーの友達がやってる上野のお店、今日、オープンイベントあるの知ってたー？」

着替えていたまりあさんに、おもむろに話しかけて来たのは、ゆいちゃんと一番仲が良いらしい、綾奈ちゃんだった。色白で、茶髪。いつも無造作に髪を巻いていて、そんなに可愛いって子では無いんだけど、ゆいちゃんと仲がいい事もあって、ゆいちゃんの席の『おこぼれ』指名や、場内指名なんかをもらっていて、言ってみれば、ゆいちゃんの専用ヘルプみたいな子だ。この子、待機でもほとんど携帯いじりばかりしていて・・・たまにゆいちゃんや、他のゆいちゃんと仲良い女の子とだけ、こそこそ喋ってるようなカンジの子だから私もほとんどしゃべったことも無く、一緒にテーブルに着いても綾奈ちゃんには軽く無視されている。

「あー・・・まあね。」

まりあさんは着替る手を止める事無く、適当な返事をしていた。ドレスから、ミニ丈の大人っぽいワンピースに着替える。私と、おそらくアキラちゃんは耳をダンボにしながら着替えていた。

「ゆいと私ね、店長から聞いてたから出勤前にお花注文して贈ったんだけど・・・まりあさん贈ったー？」

ぶっきらぼうでだるい言い方だけど、ちょっと意地悪に綾奈ちゃんが言う。・・・えっと。・・・これは・・・何だかバトってる力

ンジ・・・!?

「・・・贈ってないけど。」

まりあさんは鏡に向かって化粧直しをしながら、無表情に答えた。私とアキラちゃんも着替えを終え、そんなまりあさん達の様子を伺いながらこそそ帰り仕度をする。アキラちゃんはタバコのケースを探しているらしく自分のカバンをこそそしていた。

綾奈ちゃんは、まりあさんの答えを聞くと鼻で笑い、さらに意地悪く唇をゆがめて笑う。

「そうだったんだー、じゃあまりあさんの名前も連名で入れてあげればよかったねー。聞かなくてごめんね、まりあさん。ナンバーワンがお花出してないと、カッコ悪いもんね。」

まりあさんは無言のまま、唇にグロスを塗り、鏡の自分の姿を見て、ニコっと微笑んだ。

「いいのよ。気にしないで綾奈ちゃん。私、オーナーと店長と連名で10段のテキーラボールタワー贈ってるから・・・お花にも別で名前あると、ちょっと色々困るのよ。」

そういつて、またニコっと微笑んで見せた。・・・て、テキーラボールたわー???なんだろ、それ?テキーラって、あのお酒の事だろうか・・・。これまでも色々な『夜の世界の謎キーワード』は沢山あったけど、これは初めて聞く。シャンパンタワーってのは、よくテレビのホスト特集とかで見たことあるけど・・・。

「私は普通のシャンパンタワーで良かったんだけど・・・新しいものの好きの店長がどうしてもって言うから仕方なくて・・・さ、ミキティ早く仕度して。これからその、オープンイベントパーティーに呼ばれてるんだから、お化粧直しもしなきゃだめよ。」

「え・・・。」

一緒についていうのは、私とまりあさんで、そのイベントに行くってことだったのか!? まりあさんは憎々しげな視線を送る綾奈ちゃんやゆいちゃんには目もくれず、鏡で髪の毛を入念にチェックしてる。それはそうと、私、そんなパーティーに行けるような服でもな

いんだけどな・・・デニムに適当な長袖Tシャツ、ダウンコートと
いった服装なんだけど。そ、それにお金も無いんだけど・・・大丈
夫かな。

「アキラちゃんも来ればいいのに。オーナーから誘われたんでしょ
？」

今度はまりあさんが、まるで綾奈ちゃんやゆいちゃんに当て付け
るように、アキラちゃんに話をふった。・・・えっと・・・アキラち
ゃんも呼ばれてるんだ？アキラちゃんとオーナー達は古い付き合い
みたいだから、呼ばれてても不思議は無いけど・・・。

「んー・・・。ケイ君と一緒に行ってもつままない店だから、断
っちゃった。一応ご祝儀と、スタンド送ったから義理立てはこれで
いいかと思ってるけど。今日は、まりあさんとミキちゃんで行って
来て。」

アキラちゃんはまだタバコケースが見当たらないらしく、今度は
ロッカーを探りながらぶっきらぼうに答えた。私はとりあえず、さ
っちゃんに施してもらったカリスメイクのグロスだけを塗りなお
し、髪の毛をちょっと手櫛で直してみた。正直、さっちゃんのメイ
クはこんな時間に時間が経ってるのにも関わらず、崩れるとか、テカ
るとかほとんど無くて・・・化粧直しなんてほとんど必要無かった。
給料が出たら、さっちゃんプロデュースのコスメとやらを絶対に買
おう・・・

「へー・・・なんでアキラが誘われてんの・・・？」

冷ややかな声の綾奈を全く無視して、アキラちゃんは私に『おつ
かれ』とだけ言うのと、タバコケースを探しにフロアに出て行った。
フロアから『アタシのタバコケース知らなくい？』という、アキラ
ちゃんの声が聞こえる。

「さ、早く行こう、ミキティ！私もテキーラボールタワーとかって
の見るの初めてだから、楽しみなの！シャンパンタワーならよく見
るんだけどね。」

「あ、はい・・・。」

ばっちり化粧直しをしたまりあさんは、私の手を引いてメイクルームから出た。ゆいちゃんと綾奈ちゃんの『むかつく』という声は、まりあさんにも聞こえてたはずだった。

「あの子達はあるまり気にしないで。何かと絡んでくるの、いつもの事だから。」

店長室に向かいながら、まりあさんが私に囁いた。

「・・ゆいちゃんはいつも私への文句とか、綾奈ちゃんに色々言わせてんのよ。綾奈ちゃんは綾奈ちゃんで、オーナーのケイ君の事好きみたいだから、オーナーと仲良いアキラちゃんの事がむかつくみたいなのよね。くだらない。」

まりあさんも、多少むっとした様子だ。この様子を見る限り、いつもいつもの事で、大分めんどくさがってるカンジはした。・・・それはそうと、いつの間にか一緒に行くことになってるけど、私、お金も全然ないし、こんな格好だし・・・かなり心配になって小声でまりあさんに言ってみた。

「ん？全然大丈夫！オーナーとか店長と一緒にどっか行くときは、全部出してくれるから平気よ。服もそれで大丈夫。・・・ミキちゃん、初めてじゃない？ホストクラブ行くの。」

「えええ！？ほ、ホスト！？」

えっ・・？もしかして、これから行くのって、ホストクラブなの！？

ホストなんて、行くの初めてだから、なんか、不安・・・

24、ハーデス

オーナーのワゴンに乗りこんだ私と、まりあさん。ボーイの細田君が運転手で、助手席に店長、後部座席には私とまりあさん、オーナーといったメンバーで乗っていた。岩村や宮道も一緒に連れて行く予定だったみたいだけど、お店の片付けなどもあるということでお店に残った。・・・宮道は随分一緒に行きたそうだったけど・・・。

「・・・なんだよ、アキラのやつまた来ないのか。」

上野に向かって走る車の中で、携帯をいじっていたオーナーがちよつと残念そうにつぶやいた。まりあさんはそんなオーナーを見てくすくす笑う。

「・・・ケイ君も素直じゃないから。いっつも女の子口説くみたいにあキラちゃんに言えばいいのに。」

「まりあちゃん、俺とアキラはそんなじゃないからね。勘違いしないで。」

あ、オーナーなんかムキになってる？オーナーは子供みたいにちよつとふてくされていた。アキラちゃんも同じようなこと言ってたけど、二人ってどんな関係なんだろう・・・。

暗い夜の街を走る車の中、後部座席ではオーナーとまりあさんと一緒に、他愛もない話をしながら乗っていた。運転している細田君は隣で店長にあれこれ言われてて、ちよつと大変そうだった。聞いてると、店長は自分の昔の自慢話を延々と話しているみたいで・・・昔俺は何人もナンバーワンを育てたとか、酔って上野の池に飛び込んだとか・・・自慢話？と思えるものも沢山あったけど、それでも細田君は一生懸命、相槌をうったりしながら運転している。聞けば、店長はオーナーと『MOON』の近くの居酒屋で新店舗の打ち合わせを兼ねて飲んでいたので、もう結構酔っ払っているらしい・・・。

なんか、酔ってセクハラしたり絡んでくる人って、やだなあ・・・。

しばらく走ったところで、ようやく上野に着いた。新宿までとは言わないけど、にぎやかな繁華街。私達は大きな通りで車を降り、細田君は近くのパーキングに車を停めに向かった。

私達は一足先に店に向かう。ちよつと細い路地に入ってすぐに、ずらーっとスタンドのお花が並んだ店があった。壁に打ち付けられた、ぴかぴかのお洒落なシルバーの看板には『Club Hades』（クラブ・ハーデス）の文字。

階段をあがり店に入ると、別世界のような喧騒が私を包む。大きな音楽、お客さんや従業員の笑い声、あちこちでシャンパンが開く音、歓声・・・広い店内は深いブルーと黒とシルバーを基調としたクールな内装に、キラキラ豪華なシャンデリア。お店の中にも沢山のスタンドの花や、TVでよく見るシャンパンタワーなんかもあった。

「おう！ケイちゃん！」

私達の姿を見るや否や、奥から背が高い、若い男の人がやってきた。

「遅くなってごめんな。おめでとう！」

そういつて、オーナーと若い男の人は握手している。・・・オーナーの知り合いのお店なんだっけか。年のころもオーナーと同じくらいに見えた。おしゃれなスーツを着て、背も高くて、ちよつと長めの髪の毛を流してて・・・芸能人みたいにかなりカッコいい。こ、これが、ナンバーワンホストってやつ！？

「林田さんも、まりあちゃんも来てくれてありがとう！・・・お、こちらは初めてだね。」

カッコいいその彼が、私のほうを見て、ニッコリと微笑んだ。

「この子はねえーミキちゃん！ミキティー！！あはははははは！！！！」

酔いどれてる店長が私に押し掛かり、肩を組んでくる。・・・うわ、

かなりお酒臭い。私は必死に店長の身体をよけながら、挨拶をした。

「は、はじめまして。ミキです・・・」

「はじめまして、ミキちゃん。ここの代表の南波です。あとでちゃんと挨拶に行くけど・・・林田さん、結構飲んじゃってるの？」

ちよつと困ったように南波さんが店長を見た。店長は相変わらず私に圧し掛かり、強引に肩を組んでふらふらしてる。

「あー、こんなんだから、VIPルームにしたんだ。・・・やばくなったら帰らすから。」

そういつてオーナーはいぶかしげに店長をみた。店長はお構い無しに大声上げて騒いでるけど・・・

私達は一番奥の、ガラス張りの部屋に通される。壁や柱に、ところどころ鏡があしらわれ、フロアの照明が反射してキラキラしている。『MOON』みたいな内装とはまたちよつと違うけど、TVなんかで見るだけの未知の世界が、そこにはあった。VIPルームに入る手前のフロアには、美しくライトアップされた、やたら大きなシャンパングラスのタワーが飾られていた。

「うわっ、おっきい・・・」

まりあさんが見上げて声を上げる。・・・あ、これがまりあさん達が送った『テキーラボールタワー』？

「つか、デカすぎだろこれ・・・」

あまりの存在感の大きさに、オーナーも見上げる。明らかに他のシャンパンタワーよりも高く、同時に横幅も大きく・・・ライトアップもされてて、何よりも目立つ。他のお客さんたちも、このタワーは珍しかったらしく、次々と携帯で写真を撮りに来ていた。

「おー！いいじゃねーか！一番目立たなくてどーすんだよ！！！！あははははは！！！！な！？ミキティ！！！！」

店長は上機嫌？でVIPルームに入ってしまった。そこはフロアの他の席からはちよつと隔離されているので、他の席の騒ぎもそう聞こえない。・・・まあ、それでもじゅうぶんに店長一人でうるさいんだけど・・・

お店には、同じようなキャバ嬢みたいな女の子や、フツの格好の女の子、ちょっと年配の女性から、同業らしき男の人たちなど・・・沢山居た。

しばらくすると、南波さんのようなおしゃれなスーツを着た、カッコいい若い男の子たちが数人やってきて、おしぼりを渡してくれた。・・・いつも自分がお客さんになっていることを逆にしてもらうと、なんだか照れくさくて、落ち着かない・・・。けど、外が寒かったせいか、温かいお絞りを手渡されると、なんだか心まで温かくなる気がした。ホストの男の子達は私に色々気を使ってくれて、飲み物やフードなど、一つ一つ親切に説明してくれた。・・・『MOON』に来るお客さんたちも、こんな気持ちなのかな・・・。

まりあさんがお腹が空いたといって寿司の出前や、焼肉の出前を色々注文し・・・車を停めてきた細田君が着いた頃には、テーブルの上はフルーツだの寿司だの、ご馳走の山になっていた。

「はい、どうぞミキちゃん」

気がつけばまりあさんが小皿にみんなの分を取り分けてる。それを見て、ホストの男の子達は慌ててまりあさんの手を止め、代わりに料理を取り分けはじめた。

「ま、まりあさん！いいっす！いいっす！俺達がやりますから！！！」

「いいわよ、別に。」

「いや、まじで！俺達の仕事っす！！！！」

焦りながら、若いホストの子が一生懸命に動いていた。・・・いや・・・本当ならまりあさんが動く前に、私も動かなきゃいけなかったんだけど・・・。まりあさんやアキラちゃんを見ると、仕事はもちろん、仕事外でも周りにしっかり気配り出来ている。私もちよっと、見習わないといけいな・・・。お仕事とかだけじゃなくて、女として・・・。

「いやーケイちゃん、お待たせ。」

しばらくした所で、ようやく南波さんがやってきた。南波さんが

一緒になったところでオーナーがドンペリを開け、乾杯をする。人数が人数なので最初の一本は乾杯だけで無くなってしまい、追加でもう一本、ドンペリを頼むことになった。ますます店長は酔っ払って、周りの男の子に絡んでは無理やり一気飲みさせたり・とまあ、やりたい放題だった。店長の隣に座るまりあさんや細田君が時折必死になだめて、どうにかおさまってるといった様子。

「・・・ミキちゃん、飲んでる？」

「・・・えっ？」

気がついたら私の隣には南波さんがニコニコと座っていた。俳優さんみたいに端正な顔立ちで、本当にカッコよくて、とってもいい香りの香水がふんわり漂ってきた。

「改めて、はじめまして。ミキちゃん。今日は来てくれてありがとう。」

そう言って南波さんは名刺を私にくれた。私も名刺を出そうとして・・・はっとした。・・・そういえばなんだかバタバタしていて、いまだに初日にもらった『カラ名刺』を使ったまま。半月たっても自分の名刺を注文するのをすっかり忘れていた。

・・・こないだ岩村に早く名刺選ぶように言われたっけ・・・さすがに恥ずかしくてこの『カラ名刺』を出すわけにはいかない。

「あ・・・ごめんなさい。私まだ、名刺無くて・・・」

南波さんから随分と素敵な名刺をもらったのに、自分の名刺が出せないのが、なんだか申し訳なくなってしまった・・・。

「いいよいいよ。ミキちゃん、夜の仕事初めて間もないんだって？ さっきケイちゃんから聞いたよ。びっくりしたなー、どこの売れっ子嬢連れてきたのかと思ったよ。」

「あ、ありがとう・・・ございます・・・」

やっぱりホストの人って、女の子の扱いが上手なんだろうなー・・・。しかもお店の代表というからには、売れっ子ホスト。初めて会った南波さんだったけど、びっくりするくらい隣に居るのが違和感無い。・・・なんていうか・・・落ち着くっていうのかな。最初に隣に

座った瞬間から、ふんわりとした南波さんの雰囲気心地よくなる。南波さんは緊張している私に気遣ってくれながら、色々話をしてくれた。オーナーのケイ君とは幼馴染だとか、昔は一緒に色々やりちゃしてたとか・・・。

「あ、ごめんね。また新しくお客様来店されたみたいだから行かなくちや。・・・また今度ね、ミキちゃん！」

そう言ってあわただしく南波さんは席を立った。

「あ・・・」

なんだかもうちよつと、南波さんと話したかったなあ・・・なんて思ってしまった。また今度・・・といっても、私がまたここに来ることなんて、あるのかな・・・？

「おい！ミキティ！！全然飲んでないじゃねえのー？！」

ぼんやり南波さんの背中を見送っていた私は、自分のすぐ横で店長の大声がしたことにびっくりして、隣を見た。いつのまにか、さっきまで南波さんが座っていた席に店長が座っていたのだ。

「はい、かんぱーい！」

「は、はい・・・」

とりあえず、乾杯をさせられシャンパングラスに口を付けたけど・・・どうにもこのドンペリってやつは得意じゃない。まりあさんの席でも何度か飲ませてもらっているけど、時間をかけて、どうにかこうにかグラスを空っぽにするのが精一杯だ。・・・うう。こんなどこが美味しいんだろ・・・。

私がなかなか飲み進まないのを見ると、店長は不機嫌な顔を隠そうとしなかった。

「・・・おい、俺やケイ君が金払ってる酒だぞ・・・残すんじゃないよ・・・」

「・・・は、はい・・・」

微妙な空気を察知したのか、近くに座ってた若いホストの男の子が、すかさず私のグラスを奪う。

「じゃ、代わりに僕がいただきますーす！！！」

一気にグラスを飲み干し、テーブルに置く。

「ごちそうさまでしたー!!」

・・・た、助かったー・・・と、思ったのもつかの間・・・

「おい、おめーに飲ましてんじゃねーんだよ!! 新しく酒持って来
いって!!」

店長の怒鳴り声に、VIPルームはしーんとなる。

「・・・おい。林田ちゃん、飲みすぎなんじゃない?」

少し離れたソファで飲んでいたオーナーが、店長の様子を見て声を掛ける。が、店長には全くオーナーの声など聞こえていないようだった。しぶしぶ若いホストの子が持ってきたグラスには、なみなみとシャンパンが注がれていた。

「・・・俺はこいつに飲めって言ってるんだよ。・・・なあ・・・俺の酒が飲めないのかよ!」

これは完全に目が据わってる・・・。酔っ払って随分とタチが悪くなった店長は、私の肩を掴むと強引に引き寄せ、シャンパングラスを持たせた。

「・・・ミキちゃん、無理しないで・・・」

心配そうにまりあさんも声を掛けてくれたけど、そんなことも酔いどれ店長の気に触ったらしく・・・

「うるせえって言ってんだろ!! ・・・なあ、ミキティ、飲めないわけ?」

まりあさんに怒鳴ると、店長は私に顔を近づけて凄んできた。心配そうにしているまりあさんと、細田君。それにあきれかえってるオーナーに、どうしていいかわからずオロオロしているホストの男の子達。いつ怒り爆発してもおかしくない状態の酔いどれ店長。この状況では、誰が何を言っても、店長がおさまる気配は無い。・・・どうしよう、このままだと・・・

「わ、私、飲みます!!!!!!!!!!」

私は覚悟を決めて、手にしていたグラスを持ち上げ、そのまま一

気に流し込んだ。

25、広い背中

「いえーい!!! ミーキティー!!!!!!」

店長の大きな笑い声と、みんなの歓声が響くVIPルーム。

・・・そう。私はあの後、意を決してシャンパンを一気飲みした。店長が煽るまま、そのまま立て続けに二杯目、三杯目とグラスを開ける羽目になっていたけど、おかげで店長もすっかり気をよくして、また上機嫌に騒いでいる。一時は張り詰めた空気にどうなることかと思ったけど、私が折れてシャンパンを一気飲みした事で、どうにかまた和やかにはなった。

・・・ああ、でもさすがに辛い。いきなりシャンパンを立て続けに一気飲みすると、アルコールが回ってくるのも何だか早い。

「・・・ちゃん、・・・ミキちゃん!」

ソファにもたれかかってボーっとなっていると、誰かが私の肩を揺すってる。・・・あれ? 誰か、話しかけてた・・・?

「ミキちゃん! 大丈夫?」

気がつくのと、さっきまで店長が座っていた私の隣にはボーイの細田君が座り、心配そうに氷水の入ったグラスを手渡してくれた。

「・・・あ、ありがとう・・・」

冷んやりした氷水は喉を通ると気持ちよく、気分が悪いのも幾分よくなるようだった。グラスの水は、まるで砂漠に落とすように物凄い速さで私の酔った身体に染み込んでいった。・・・あー・・・生き返るって、きつとこんな事だ・・・なんて思った。

「いっぱい水飲んで。アルコールって加水分解だから・・・水分取れば、ちよつと良くなるはず。」

そういつて、また新しく氷水を作ってくれた。・・・加水・・・分解?・・・うん・・・なんだかちよつと難しそうだったけど、とにかく水分を採れってことかな・・・。

「ラブちゅうーにゅうー!!! あっははははは!!!」

少し離れたソファでは、ホストの男の子達とまりあさんに煽られた店長が、今度は自分で一気飲みを始めていたのが目に入った。一気飲みっていうか、ラッパ飲み!? グラスじゃなくてボトルを手にして飲んでいる。

・・・で・・・店長、完全に壊れちゃってるよ・・・。周りに煽られ一気飲みをしては、まりあさんにキスを迫り、また周りに煽られては酒の一気を繰り返していた。オーナーの姿はVIPルームにはもう無くて、店長の様子に随分呆れてたようだから、どこかに行ってしまったようだった。

「・・・店長はあんなカンジだから、オーナーが先にミキちゃんの事、送ってけて。・・・さ、今のうちに、急いで。」

細田君はそういつて、私に上着を手渡す。ふと、騒ぎの中にいるまりあさんと目が合うと、まりあさんは『早く帰って』というように目配せをし、小さく手を振ってくれた。私はまりあさんに小さく会釈して、大騒ぎしている店長に見つからないようにこっそりとVIPルームを出た。ずっと座っていて気がつかなかったけど、自分でもびっくりするくらい足元がふらふらしていた。

「ミキちゃん、歩ける? 車停めた所まで、ちよつと歩くけど・・・」

私の大荷物のバッグと、自分のバッグを片手に持った細田君は、もう片手でふらつく私の身体を支えてくれた。細田君、細いのに・・・私の大荷物まで持たせて悪いことしちゃったな・・・。まだにぎやかな店内を抜けてエントランスに向かうと、南波さんとオーナーが立話をしていた。

「じゃ、オーナー。ミキちゃん送ってきますね。」

細田君はオーナーと南波さんに挨拶すると、オーナーから車の鍵を受け取った。

「悪いな、細田。ミキちゃん送ったら一回電話して。このまま解散するかもしれないから。」

ちらりとオーナーはVIPルームのほうに目をやると、ため息を

つく。

「ミキちゃんごめんね。林田ちゃんは昔から酒癖悪くて。・・・南波もごめんな。」

オーナーの言葉に、南波さんは軽く笑う。

「いいよ。林田さんの酒乱は昔から慣れてるから。それに随分シャパンも開けてもらったからね。」

そう言っ南波さんは、細田君に支えられてる私にもっこり微笑んだ。

「ミキちゃん、またね。アキラにもよろしく。お花とご祝儀ありがとうって。・・・酔ってるミキちゃんて、目がうるうるしてて、なんだか色っぽくてドキドキしちゃうね。今度は僕がミキちゃんを送ってあげたいな。」

「あ・・・あの・・・」

ただでさえ酔って顔が真っ赤な私だったけど、南波さんの言葉にドキドキしてしまい、全身真っ赤になってしまいそうだった。・・・もう、ホストの人って本当に上手だなあ・・・さりげなく交わす言葉の端々に、ドキッとさせられる。普段男の人からこんな風に真正面から褒められたり、ドキッとするような事言われるなんて、なかなか無いもんなあ・・・

「行こう、ミキちゃん。」

細田君が私の腕を引っ張る

「あ・・・うん。」

ボーっとしていた私は、細田君に身体を引っ張られるようにお店を出た。

ひんやりした空気が、酔って熱くなってる私の身体を包む。朝方だけどもまだまだ暗くて、ドアの外には紺色の世界が広がっていた。お店の中とは違う、新鮮な朝の空気だ。

「ちよっと歩くから。車まで頑張れる？」

「大丈夫。」

細田君の言葉に元気に答えてみせた。冷たい空気にちよっと具合

がよくなった気がしていたけど・・・歩き始めると、また徐々に酔いが回ってくる。

「・・・今日はごめんね、ミキちゃん。店長は酔っ払うといつもああなんだ・・・」

細田君はまっすぐ前を見て、片手で私を抱えたまま歩く。

「いつもなら、一番下っ端の僕とかが店長のターゲットになってべろべろに飲まされるんだけど・・・今日は宮道さんも岩村さんも、他のボーイも居なくて、僕が運転係だったからミキちゃんの代わりもできなくて・・・ごめん。」

「・・・うん・・・大丈夫。」

あの状況なら、たとえ細田君が飲んでいたとしても、店長の収まりはついてなかっただろうなあ・・・。

店からしばらく歩いたところで、前方にようやくパーキングの黄色い看板が小さく見えてきた。だけど歩いて行くには随分距離があった。それでもパーキングが見えて気が抜けたのか、私はまた急にくらくらとしてきて・・・目の前がちらちらして、なんだか顔から血の気が引けてくような気がした。

「えっ・・・？ミキちゃん!？」

そのまま私はその場に座り込んでしまった。

「・・・だめ・・・何か・・・動けない・・・」

どんどん周りの音が遠くなり、聞こえなくなってくる・・・あれ、何か細田君が話しかけてるけど・・・次第に周りの音が聞こえなくなつて・・・そのまま目の前が真っ暗になっていった・・・

「・・・?」

目の前が暗くなって、どれくらい経ったのか・・・しばらくして気がつくと、なんだか身体が温かい。それに身体が楽だった。

「・・・よいしょ・・・。」

細田君の声。・・・あれ？私、自分で歩いて無い!？

「・・・ああ。ミキちゃん、気がついた？」

いつのまにやら、私は細田君におんぶされていた。

「倒れこんだ時はどうしようかと思ったよ。もうパーキングまで着いたから、車に乗ったら横になってるといいよ。」

「あ、ありがとう・・・。」

そういつて細田君は朗らかに笑った。・・・細田君って、若くて細身で長身でひょろつとしてて、頼りなげなボーイだと思ってたけど・・・結構、力強いんだ・・・。その筋肉質の背中は、普段ヒョロヒョロしているように見える細田君からは想像つかない。そういえば名前が細田っていうから、勝手にヒョロヒョロだって思ってただけかも。・・・なんて考えてたら、ちよつとおかしくなってきた、背中の上で気づかれないうように笑った。

「あー重たいなあー。」

ため息混じりに、わざとらしく細田君が言い出した。

「ええっ！？ちよつと、それって！」

急に恥ずかしくなって、私は思わず細田君の背中から身体を離れた。

「ははは。重いのは荷物の事だよ、荷物！ミキちゃんじゃないよ。」

「・・・もう！！！！」

「うわっつと・・・。ミキちゃん暴れないでよ。」

からかうように笑う細田君の耳を仕返しに引っ張り、そのまま細田君の、意外と広い背中に身体を預けた。

ようやくパーキングに着いて車の鍵を開けてもらい、私は後部座席になだれこむように横になる。

・・・ああ。なんだか疲れた・・・

ほどよく揺れる車の振動が心地よくて、いつのまにか私はぐっすり眠りについてた・・・

26、中級編

上野からの帰り、細田君に送ってもらった私は車の中で寝てしまい、家の近辺についた所で起こされた。私がいつも利用している駅まで来てくれていて、そこからは歩いて数分もない場所に住んでいたの近くコンビニで降ろしてもらおうと思った。

が、危ないからという事で降ろしてもらえず、代わりに細田君にコンビニで水だのパンダの買ってもらいアパートの前まで送ってもらった。・・・まあ、あんなにふらついて、おんぶまでしてもらった状態だったから仕方ないか・・・。

もう随分と外も明るくなっていて、朝早い通勤のサラリーマンや、学生、朝の散歩に出ているおじいちゃん、おばあちゃんがアパートの前を通り過ぎていく。・・・私は、今から家に帰って寝ようとしてるんだけどな。みんなの流れと逆流しているのって、なんだか変な気分だ・・・。

その日は結局、3時近くにゆっくり目を覚まし、舞台の稽古にも大慌てで向かうといった感じだった。起きてすぐはなんだか少し頭も痛くて、どうしようかと思ったけど・・・細田君の『アルコールは加水分解だから』という言葉信じて、とにかく水を飲んでお酒を抜くように努めた。大慌てで稽古に向かったけど、昨日さっちゃんに言われた事を思いだし、家にあるだけのメイク道具もカバンに突っ込んだ。・・・さっちゃんのカリスマメイクを全部再現できるわけも無いけど・・・さっちゃんが使っていたチークやシャドウの色、アイラインを入れる位置なんかは大体覚えていたので、少しは真似できそうだった。

幸いにもその日の稽古は私の出番では無く、ほとんど見学ばかりだったので時間をかけて体調を戻す事ができた。ぼーとした頭で稽古を見学しながら、昨日の事を考えていた。・・・あ、そういえば

南波さんからもらった名刺にアドレス書いてたっけ・・・？昨日ちらりと見たときに、名前と一緒に電話番号とアドレスのようなものが印刷されていたような気がしたのを思い出した。主に大騒ぎしていたのは店長なんだけど・・・やっぱり私からも昨日のお詫びとか、お礼とかメールしといたほうがいいのかな。酔いどれで早めに帰るのになっちやったし。・・・いや、でも昨日は『お客さん』として行ったんだから、そんなに気を使わなくていいのかな？いやいや、でも南波さんはオーナーの知り合いだって言うし、ここはやっぱり・・・。あ、そういえばきょうは岩村に樋口さんの事相談しないといなかった。樋口さんにもメールしなきゃいけないし・・・

「・・・大山！」

「・・・ん？大山？」

「こらあ！！大山！！何ぼーっとしてる！！！」

ふいに大きな声がして、はっとする。気がつくと稽古場のみんなの視線が私に集中していた。・・・そ、そうだ！私、大山だ。大山咲は私の名前じゃないか！最近『ミキ』と呼ばれることが多いせいか、気を抜いていると自分の名前を忘れてる。

「次、大山の出番だろ！稽古中にぼーっとするなよ！！！」

「す、すみません！！！」

ぼーっと色々と考え事をしているうちに、予定よりも早く稽古が進んでいて、いつのまにか私の出番だったようだ。その後は大激怒の演出家の先生にこっぴどく叱られ・・・稽古場の掃除を全部させられて帰る羽目になってしまった。稽古後の掃除は、普段から交代でやっているのに苦ではないけれど、二日酔いで身体がだるい私には、なかなかキツイペナルティとなった。のろのろ掃除を済ませて『MOON』に向かうと、いつも以上に遅刻ギリギリの出勤になってしまっていた。

「・・・ふう・・・」

どうにかお店に滑り込み、さっちゃんに嫌味とダメだしされながらヘアメイクとメイクを済ませ、フロアへ出た。新店長と新店舗の

キャスト選抜がかかっているとあって、従業員のやる気は今夜も十分、大盛況の『MOON』だった。

「ね、昨日どうだった？楽しかった？」

次の席に着く前に、アキラちゃんとちょっとフロアで立ち話をする時間ができた。今日のアキラちゃんは真っ赤なサテンのロングドレスで、綺麗なボディラインがくっきり強調されててセクシーなカンジだった。アキラちゃんはニヤッと笑って私に聞いてきた。

「どうせ店長、大暴れしたんでしょ？今日出勤してないんだけど。」
「え？」

あたりを見渡すと、店長の姿は無い。いつも木曜日は出勤しないみたいけど・・・今日は木曜じゃないしな。もちろんまりあさんはいつも通りに出勤していて、お客さんも沢山来て大忙しだ。

「・・・噂によると・・・ケーサツのお世話になったらしいよ。」

アキラちゃんがびっくりする様な事を言う。

「け、警察!?!」

「ば、ばか!!! 声、おっきい!!!」

思わず大声を出してしまった私の口を、アキラちゃんが大慌てで塞ぐ。

「・・・さっき岩村がケイ君と電話で話してるっぽくて、そんな事言ってたの。・・・まあ、今回に限った話じゃないから、たいしたことじゃないけどね。」

「・・・今回に限らないって・・・」

そんなアキラちゃんの言葉には、なんとなく納得してしまう。普通だったら警察にお世話になるんで、大事なんだけど。・・・あの店長だったら、十分ありえると思うってしまう。

昨日の店長の様子を思い返してみても・・・車の中で延々と話していた店長の自慢話も、酔って駅前の電話ボックスを倒したとか、銭湯の煙突の上にまで上ってタバコ一服してやったとか、バイク盗んで近くの中学校の校庭走り回って、近くの住民に通報されたとか・・・そんなのばっかりだったしなあ。どこまで本当かわかんないけど。

「もう釈放されてて、今日は謹慎くらっただけみたいだけど。・・ちなみに、こないだの年末年始は酔った勢いで浅草寺の賽銭箱に派手にダイブしたあげく、賽銭箱動かそうとして捕まったしね。」

「マジで・・!/?でも、そんな何度も捕まってよく平気で働けるね・・・」

これも夜の世界特有ってことなのか・・。昼間の仕事なら即効でクビだ。

「うーん。まあもちろん、この仕事だからやってけるってのもあるけど、いつも物を壊すとかそっち系だからね・・。器物損壊っての?だから後始末はいつも、ケイ君がお金払って、はい示談ってとこね。ちよつとやばいことになってもケイ君の人脈があるから大丈夫だって思ってるんじゃない?店長も酒と女の問題除けば、仕事は出来る奴だからねえ。ケイ君もそこは買ってるんじゃないかな。でも最近の店長はちよつと、やりすぎなカンジはするけど。・・・ケイ君ね、ケーサツのお偉いさんとか、大物政治家や大物組長ともパイプあるって噂だし。」

「ええ!/?そうなの!/?」

闇金やってて、デリヘルとか、キャバクラのオーナーともなれば、それくらいの表と表の人脈はあっても不思議じゃないか。

「ケイ君ってさあ、ああ見えて怖いところあるからね。自分にとって利益あると思う人間には色々良くしてくれるけど、もう自分にとって用無しだと思えばポイよ。男も女も。」

アキラちゃんはそう言って、面白そうに笑う。・・・そうかなあ、オーナーそこまで冷酷な人にも思えないけど・・・。

「はあーい!次、行くよー!ミキティ!」

そんなことを考えていたが、ハイテンションの岩村の声に現実に取り戻された。

「ミキティ!今日は終わったらミーティングね!今月末のイベントの予定、それから来月のクリスマスイベントの説明もあるから!」
「あ、ああ、はい・・」

そうだ、岩村には樋口さんの事とか相談したかったんだ！すっかり樋口さんへのメールも、南波さんへのメールも出来ないままだった！ああ、それに今月末のイベント、自分でドレス買ってこなきゃいけないんだっけ。次は来月のクリスマス・・・あああああ、やること多すぎて、なんだか目の前が真っ暗になってくる。

「さ、ミキティ！まりあさんのヘルプよろしく！」

岩村のテンションの高い言葉に、フロアへと押し出される。今日は新規のお客さんよりも指名のお客さんが多かったようで、私もアキラちゃんもまりあさんのヘルプ回りで終わった。何度か席に着いたことのあるお客さんも多く、わりとやりやすかった。

「・・・うーん。樋口さんねえ・・・」

営業終了後の店内、細田君や他のボーイの人たちがお絞りをたたんだり、グラスやボトルを片付け閉店作業をしている傍ら、私はフロアの一角で岩村とミーティングをしていた。早速昨日の樋口さんの事を相談してみたんだけど・・・

「正直、まだ判断できないと思うけど・・・」

そう前置きして岩村は言葉を続けた。

「ふとした事での指名替えとか、お客さんが切れちゃうのは良くあることなんだよね。特に、ミキちゃんみたいに水商売初心者です！っていう子が成長して、どんどん化けてキレイになって、ブレイクしていくパターンだと・・・それって店や本人にとっては凄く嬉しい変化なんだけどさ、水商売初心者の、素朴なミキちゃんが良かったって思ってたお客様には、あんまり嬉しくない変化だろうからね。」

「・・・はあ・・・」

「もっと売れっ子になってくると分かると思うけど、もちろん一人のお客さんにかまってあげられる時間も減っていくからメールや電話の時間なんて少なくなるし。お店で指名しても全然席に着けないって現象もでてくるし・・・それが不満で指名が離れることもあるからね。お金払ってるのになんだよって。まあ、そう思うのが普通じゃ

ないかな。飯岡さんみたいに夜の店に飲みに来て、わざわざ売れる子を指名して、大金使うこと自体が楽しいっていう『飲みなれた』人はまた別だけど。営業トークだって思っても、心のどこかでもしかしたら女の子と付き合えるかも！俺でも口説けるかも！やれるかも！って思ってくるお客様は多いからね。」

そういえば、まりあさんのお客様なんて、幾つも指名が重なっている時はセットで10分もまりあさんが着かないこともあったわけ……。それでもいつも楽しそうにまりあさんに会いにくるのは何でなんだろう……。まりあさんのお客様は、たしかに飯岡さんのように『飲みなれてる』お客様は多いけど、そうじゃない普通のお客様だあって沢山居る。そういったフォローに回るのも私達へルプの仕事だけど、あくまでも『脇役』だし。それだけじゃこんな沢山のお客様さんに支持されないよね。

「まあ、ともかく・・樋口さんは次の反応見ないと分からないなあ。とにかく連絡してみて！それでも感触がダメなら、ダイレクトにイベント誘ってみて、それでもダメなら樋口さんはもう切れたと思って、次のお客様に向かったほうがいいよ。こんなの一種の通過儀礼だから、気にしない！気にしない！！ミキちゃんが成長してる証！！」

そういつて岩村はバシッと私の背中をたたいた。

「さ、というわけで・・ミキちゃんにはそろそろ、これが必要になってきたわけだ・・」

ごそごそと分厚いファイルからホチキス止めされた冊子を取り出す岩村。・・あ、これは最初に説明された、岩村特製の・・

「岩村特製・接客マニュアル〜中級編！！！！レベルアップおめだとおう！！！！」

初級編より明らかに分厚くなっているマニュアル・・・岩村は嬉々としてそれを私に手渡す。何が基準かわからないレベルアップだけど、とにかくそういうことらしい・・。

「これは店外持ち出し禁止だからね！！この一週間はミキちゃんに

これを伝授しよう!!」

岩村は長い前髪をかきあげると、また悦に入ったような表情で満足げに頷く。

「いやー働いた最初の月で中級編までレベルアップするのは、エナちゃん以来だよ。今やエナちゃんも歌舞伎町でも有名な、押しも押されぬ人気嬢・藤咲エナだからね。」

エナさんといえば・・・まりあさんと仲が良い、あの小さくて可愛い子だ。キャバ雑誌の読者投票でもランクインする、『MOON』ナンバー3のエナさん・・・エナさんのことも、岩村が指導したってこと!?!・・・岩村の指導も、まんざらでもないってことか・・・「エナちゃんもミキちゃんも、初心者の状態でこのマニュアルに・・・この俺に出会えたのがラッキーさ!!」でも、俺の事は絶対に好きになっちゃあーだめだぞ!!!!」

「絶対なりません。」

・・・このウザイくらしいのハイテンションと、自意識過剰さえなければ、岩村はいい奴に違いない。

「・・・お、おいおい。そんなにきっぱり否定しないでよ。」

「マニュアル、早く始めてください。」

ちよっと不満そうにぶつぶつ言いながら、岩村はマニュアルの説明を始めた。

27、場内クイーン

岩村特製の接客マニュアル中級編とやら……

以前に見せられた初級編に比べると、随分と接客や営業について細かく触れられていた。

「まずね、そろそろミキちゃんに必要なのは『場内を本指にして返す』って事かな！もう場内指名の取り方はバッチリでしょ！？」

岩村が私に指をさし、自信ありげに言い切る。……まあ、確かに毎日場内指名は幾つか貰えてはいるけど……場内を本指にして返すって、どういう事なんだろう？

「場内指名はね、いわば仮契約だから。成績や売り上げ、評価に反映するのは本契約……つまり本指名のみ！本指名がとれないキャストは評価されないって事だよ！」

そう言って岩村は手元のマニュアルを指差して細かく説明し出した。

「場内と言っても色々あるからね。……例えば飯岡さんの席とか。飯岡さんの席での場内指名は、まりあさん本指名のオマケ場内。これは、まりあさんの専用ヘルプとしては良い仕事してる証かな。他にも居るヘルプの中でもミキちゃんが選ばれたって事だしね。」

「はい……」

確かに。まりあさんのヘルプは私の他にも沢山居る。その中でまりあさんの他に、毎回私を場内指名してくれるのは、嬉しい事なのかもしれない。

「微妙になってくるのが、フリー客に着いた時の、その場限りのノリの場内指名。女の子が次々代わるとめんどくさいからという理由でお客様が場内指名したとか、お客様に指名のシステムを説明しないといった場内指名とか、強引にとった場内指名とか……こういったのは次の本指名につながらない、残念な場内だな。時間の無駄とは

言わないけど。本指名に繋がらないとね……。ぶっちゃけ、その場限りのノリ場内なんて、割と簡単にとれちゃうからね。たとえば…」
岩村は突然オカマのように身をよじって、オンナ言葉で話し出した。

「ええ〜呼ばれちゃったあ〜。あたし、このままココに居ていいですかあ？離れたくなあ〜い！」

うわ〜：岩村のキャストの物真似オカマ言葉は気持ち悪いけど：確かにこんな感じの女の子、ちょいちょい見かけるなあ…。私は営業中のキャストを色々思い返してみた。そういえば、あの意地悪な綾奈ちゃんとか、フリーと一緒に着くとこんな接客してるかも。綾奈ちゃんの場内指名は確かに結構多いな。その割には、本指名はあんまり見たこと無いっていう：

「：ま、こんな風にだな。隣に座ってた女の子に可愛く言われたら、よほど嫌じゃない限り、ここに居ていいよ！なんて言っちゃうだろ。そんな感じでとった場内指名なんて、本指名に繋がらないってのはわかるよね？」

私は大きく頷いた。

「俺の経験則ではね：場内指名ナンバーワンの場内クイーンは、ツカエナイ子率が高い！！！！」

「つ、ツカエナイ子率！？」

「そう！！つまりね、場内指名から本指名に返せる実力がある子は、その後も場内指名とする事は多くても、本指名も着実に増えているから自然とフリーに着く回数も減る。そうなれば場内指名をとる回数も減ってくるだろ！？：フリーにある程度着いてるのに、何ヶ月も経っても本指名が無くて、場内指名がやたら多いなんて：場内とっても本指名で返せない、仮契約ばかりの子って思われちゃう事！！ミキちゃんも、場内クイーンで許されるのは最初だけだよ〜！」

うーん…。なかなか厳しい。今月、飯岡さん以外にフリーの人から沢山場内指名はもらってたけど、本指名に返すなんて考えて営業なんて、あんまりしてなかったな。

「まあ、場内クイーンはアキラちゃんみたいに自他共に認める『スーパーヘルパー』っていうスタンスなら許される話かな。あと、うちのグループの新店の激安店みたいに、キャストに指名や営業をあんまり求めてない店なら、その場のノリがよければそれで良いけどね。」

岩村は更に熱が入った声で続ける。

「だから！場内指名とったところからがスタート。そこからの電話やメールなんかの細やかなアフターフォローや営業で、本指名に繋げていくんだ。もちろん、場内もらえなかったお客様だって、あとからの営業でどうにでも変わる可能性があるからね！！わかったかな？！？いかに、仕事時間以外の営業も大切かって事さ！！」

「は、はあ…」

「もちろん、お店での営業中の接客は、基本中の基本だからねっ！
！お店での接客あつてこそ！帰ってからの営業で、また会いたいと思わせる！！！」

「はい…」

岩村のミーティングは、さすがに店長レースがかかっているとあつて、いつもよりも熱が入ってた。もちろん、私以外のキャストともミーティングをしているようで、朝から晩まで忙しそうだった。・
・そんな必死の岩村を見てると、本当に店長になりたいんだなって言うのが嫌でも伝わってくるので・・・キャストたちも岩村の店長レースを全く無視することも出来なく、一緒になつて売り上げを伸ばそうと頑張っているような状況だった。

実際のところ、岩村と宮道の担当キャストを比較すると、岩村の担当キャストのほうが売り上げ・指名のあるキャストが多い。ナンバー3のエナさんも、まだ岩村の担当キャストとしているみたいだから・・・そんなに頑張らなくても、最初から全然、岩村が有利な気がするんだけどなあ・・・。

「そうそう。俺が『MOON』店長になったら、マネージャー業務やキャストの付け回しなんかを細田にやらせたいんだよねえ。今、

色々伝授しているところなんだよ。な？細田！」

ちよつと離れたテーブルで、一生懸命お絞りを畳んだり丸めたりしていた細田君に、岩村は大声で声をかけた。

「・・・あ・・・はい。」

細田君はちよつと照れくさそうに頭をかいた。

「細田はああ見えて結構ガッツあるからね！俺の弟子として、教育してやってるんだ！」

そういつて岩村はまた得意そうに前髪をかき上げた。・・・それにしても弟子って・・・どんだけ自信家。

そんなことを考えながら、自己満足に浸ってる岩村から視線を外したところ、ちょうど細田君と目があつた。

「あ・・・」

細田君はニコつと微笑む。

「もう、体調大丈夫？」

お絞りを畳む手を休めることなく、細田君は言葉を続けた。

「あんまり飲みすぎちゃだめだよ。」

「・・・あ、昨日はありがとう・・・。」

またニコつと微笑む細田君だったが・・・なんだか照れくさい。昨日、酔っておんぶしてもらったからなのかな。今まで歳が近くて話しやすいつただけの、アルバイトのボーイだったんだけど・・・。

「・・・ん？なんだ、細田とミキちゃん、あやしいなあ！？」

私と細田君の短いやり取りを見ていた岩村が、割り込んできた。

「おい、店内恋愛は禁止だぞお！！」

禁止といいながら、岩村は明らかに面白がつて細田君と私をからかい始めた。

「絶対ありませんから！」

「またまた～！俺だけには教えてよ！ね！？昨日なんかあったの！？」

きっぱり否定する私にも、岩村はからんでくる。

「なんにもありませんっ！」

「またまた〜！ミキちゃん照れちゃってえ〜」

「・・・ああもう！岩村さん、うるさい！」

その後は・・・ゲラゲラ大笑いしている岩村にしばらくの間、しつこくからかわれ、すっかり帰るのが遅くなってしまったのだった。

28、ガールズトーク

「ねーミキティ、こっちのほうが可愛くない？」

鏡の前ではアキラちゃんが、鮮やかなピンクのミニドレスをカラダにあてている。

久しぶりに舞台稽古が休みの日曜日。昼過ぎに新宿で待ち合わせ、アキラちゃんと一緒に月末の『ドレス新調デー』用のドレスを買いに来ていた。正直、ドレスなんてどこで買って良いかわからなくてアキラちゃんに相談したところ、じゃあ一緒に買い物に行こうという話になったのだ。

新宿の地下街っていうのかな。新宿駅の駅ビルから繋がる、沢山のお店が並んだ地下街に連れてきてもらったのだ。

高いドレスは買えないってアキラちゃんに話したら、笑いながら1万もあれば十分おつり来るっていわれたんだけど・・・大丈夫かな・・・。

「あ、これ凄い可愛い！ミキティに似合うよ！」

そういつてアキラちゃんが真っ白なミニドレスを持ってくる。けど・・・なんだか、凄い伸びる素材で・・・体のラインがバッチリ出ちゃうようなストレッチ素材のドレスだった。昔で言う『ボディコン』？みたいなカンジ。さすがにそれを着こなせる自信は無い。生地も結構透けちゃうみたいだし・・・。

「ちょ、ちょっとこれは・・・ぱつんぱつんになりそうだし・・・」

「あー確かに。ここの店のドレスって安いんだけど、生地がストレッチ系なのがほとんどなんだよねー。」

アキラちゃんはそう言っっては、また他のドレスを手にとって、私に見せたり自分の体にあてたりしていた。

どのくらいそのお店に居たのだろう。私達は店内を散々物色し、試着を繰り返し・・・結局アキラちゃんは真っ赤なミニドレスで、

コルセットのようにリボンを結びあげるデザインのドレスを選んだ。ドレスの裾はたっぷりのフリルで、試着した姿はなんだかボンテージ下着を連想させるようなカンジで・・・かなりセクシーなドレスだった。アキラちゃんて、原色とか、強めなイメージがよく似合う。

私はといえば、選んだのは薄いピンクの総レース生地のパールレースで、ところどころパールビーズがしらわれ、胸元も大胆に開いていて、スリットが深く入っているドレスを選んだ。岩村が勝手に選んだいつものドレスと同じカンジなんだけど・・・なかなか新たな冒険は出来ないな・・・。

そうそう。驚いたのが、そのドレスが5,000円もしなかった事！アキラちゃんが選んだドレスなんて、2,980円なんて値段だった。最近は輸入物のドレスも多くて、5,000円前後で手軽に買える物も多いらしい。もう少し良いものでは13,000円前後からでも揃うという。

「それでもやっぱり、値段が良いヤツは見ただけですぐ分かるんだよねえ。まりあさんなんて、毎回ドレス新調デーにはお客様にすごい良いの買ってもらってるから、今回も注目ってカンジよ。80,000円以上するドレスなんて、アタシには縁が無いし。」

「ええっ!？」

アキラちゃんの言葉に、目玉が飛び出そうだった。は、はちまんえんですか・・・。うーん。さすがまりあさん・・・。

「素材が高級シルクとかさあ、有名ブランドのドレスとかさあ。」
「やっぱり良いヤツはすごくスタイルよく見えるし、綺麗に見えるように作られてるんだよねえ。」

「それじゃあ、ますます綺麗になって、まりあさん大人気だね・・・。」

私達は買い物をすませて、地下街を出る。結構時間が経つてとは思っていたけど、表に出るとすっかり夕方になっていた。せっかくの休み。お腹もちよっと空いてきたので、私達は近くの個室居酒屋に入ることにした。

仕事終わりのアキラちゃんとのラーメンは、もはや日課になっていたけど、一緒に休日に遊んでお酒を飲むのは初めてだ。適当につまみや料理を頼み、生ビールで乾杯する。しばらくはこの料理が美味しいだの、コレは失敗だの適当な話をしていた。私がちびちび最初のビールを飲んでる間、アキラちゃんはビールを2杯、3杯と、どんどん空けていく。さらにはビールが飽きたといって、今度は日本酒の熱燗を注文し始めた。結構アキラちゃんって、酒豪！？つか、オヤジか。そんなオヤジな姿も、アキラちゃんだとんだか違和感が無いのも面白い。お酒も入って饒舌になったアキラちゃんと私はお店のことも話し始める。〇〇ちゃんがどうか、あのお客さんがどうだったとか、顔が好みのお客さんは誰だとか、昔は店長がどうだったとか、最近の店はこうだとか……

「そういえば、新店舗の店長、やっぱり岩村かなあー」

アキラちゃんが枝豆をつまみながら話す。やっぱりお店の話になると、新店舗の話に及ぶよね。

「今のところ売り上げも指名数も、岩村の担当のほうが多いカンジだよ。……なんで宮道は店長レースに出ようと思っちゃったのかなあ？ 最初から負けが見えてるじゃん？」

私はテーブルに出てきたばかりの寄せ豆腐を取り分けながら、つぶやいた。誰も宮道が店長になりたがってるなんて予想もしてなかったみたいだし……

「うーん。……なんだろうね。なんか勝算があるから店長レースに名乗りをあげたんだろうけど。宮道にそんな秘策があるとも思えないんだけどなあー。宮道はアタシの担当だけど……宮道担当のキャストも誰一人、宮道が店長になれるなんて思っていないからねえ。みんな自分のクビの為だけに頑張ってるし。」

アキラちゃんは腕を組んで、後ろの壁にもたれかかった。

「岩村はさあ、もともと色んなところで水商売してて、小さな店では店長として働いてたこともあるみたいなのね。で、『MOON』立ち上げの時、ケイ君と林田店長が飲みに行ってた池袋の店から岩

村を引き抜いたんだー。ヤクザとかヤバイ金融とか、そんなお客しか来ないような店だったんだけど、ケイ君が岩村の対応を気に入ってね。」

アキラちゃんはそういつて熱燗の入ったおちょこを飲み干す。

「宮道はー・・『MOON』立ち上げてしばらくした頃に、ボーイのバイト募集でやってきたのよ。結構いい年の男で小学校教師辞めて、水商売とか、どーよ！？ってカンジなんだけど・・」

「えっ前職、小学校教師なの！？」

随分とオカタイ職業から：なんでまたボーイに！？

「噂によればね：キレて生徒殴ってクビになったとか、モンペの保護者に暴言吐いて殴りかかってクビになったとか：まあ、ろくな理由じゃなさそうなのは確かね。」

「そんなキアラには見えないけど：」

いつもニコニコしていて太目で朗らかな宮道のイメージとは、程遠い噂の内容。：でも、店長レースに出ると決まったあとの岩村への陰険な笑顔：それを思えば、いつものイメージよりも、その噂のほうに信憑性が増す。

「宮道とはミーティングしたり、今までゆっくり話す機会あってもイマイチ何考えてるのかわかんないのよね。水商売のセンスがあるとも思えないし。」

そう言うときアキラちゃんは熱燗のとっくりが空になったのに気づき、次の酒を頼もうとメニューをめくりはじめた。

「：けどまあ、人に取り入るのはうまいのかもね。」

「取り入る？？」

「そう。ケイ君はボーイでは岩村の事を買ってるんだけど：店長は宮道イチオシみたいよ。」

アキラちゃんは店員を呼び出すボタンを押し、すぐにやってきた店員に酒を注文し、タバコケースを取り出した。

「宮道は店長のやることなすこと、何でもマンセーしまくりだからねえ。酔って暴れても何しても、宮道だけはホイホイ持ち上げるか

ら……。店長もあんまり頭良くないからさ、そんな単純なやり方で、宮道は店長のお気に入りになっちゃったワケ。」

単純：過ぎるだろ、それは……

でも、今までの店長の言動を思えば：そんなもんかもしれない。そうは言っても、店長って立場なら一国一城の主でしょ！？そんなんで、大丈夫なのかなあ：

アキラちゃんがタバコに火をつけ、しばらくした頃に、店員さんがアキラちゃんが頼んだ次のお酒を持ってきた。

「店長とはいえ、オーナーはケイ君だから。店長もケイ君無視して宮道持ち上げるわけにもいかないし。リアルで売り上げとかも大きな問題だからねえ。そういうのも面白くなって、店長は自分の発言力とか主導権大きくしたいみたいだから、自分の子分みたいなのをもっと沢山、重要な役職にしたいんじゃないかなー。最近ケイ君と店長、意見が衝突することも多いみたいだし、店長の酒癖もあんなだし……。これからお店、どうなっちゃうのかね。何もなきやいいけど。」

「何も……。なきやいいよね……。。」

私もぼそとつぶやいた。このまま何事も無く、新店舗オープンとリニューアルオープンするんだろうけど……。なんだかちよびり心配だった。何が心配なのかはよく分からないんだけど……。オーナーと店長の仲も良いわけでもないみたいだし……。

私が色々思いをめぐらせている間、アキラちゃんはお酒と一緒に運ばれてきたチャッカマンを手につつた。

「……。つか、アキラちゃん。その酒、何？」

「ん？」

私があっけにとられている中、アキラちゃんはいきなり手元のお酒に火をつけ、すばやく蓋をした。

「これ？ふぐのヒレ酒。寒い季節はやっぱこれでしょー！」

そういつてアキラちゃんは手元のエイヒレをつまんだ。

「……。ごめん。やっぱ、アキラちゃん、オヤジだわ……。！！」

！
」

私は堪えきれずに、大笑いしてしまった。

「ええー？ 良く言われるんだけどさあー。これってフツーじゃない？
」

アキラちゃんはきよんととして、ヒレ酒を口にする。」

「くはー！ うまいっ！ ！」

思わず発したアキラちゃんの言葉に、私はまた噴き出してしまう。

「やっぱオヤジ！ ！」

個室にはしばらくの間、私達のにぎやかな笑い声が響いた・・・。

29、杏と凜

週末。最近忙しくて、なおざりになっていたお客さんへの連絡をしてみた。

教えてもらった、岩村のマニュアル中級編とやらに習い、日曜日なので家庭のある方には連絡を控え、メールを送れる人にはメールを。電話で話せそうな人には電話を試してみた。もちろん、長電話にならないように注意したんだけど…なかなか終わりにするタイミングが難しくて…一番長いお客さんでは1時間も話してしまった。

『電話でたっぷり話しちゃったら、お店に行かなくてもいいって思っちゃうからねっ！営業電話は短く！簡潔に！』

岩村の言葉が蘇る。…わかっちゃいるんだけどさあ…なかなか難しい。それなりに話が盛り上がっての長電話だったので、私もちょっと楽しいなんて思っちゃった。これじゃあ営業電話としては、やっぱり失格かなあ。

そう、そして樋口さん…。あれから何度かメールもしたし、電話の着信も残してみたんだけど…返信も電話も無かった。一応、月末のイベントの事はメールでお知らせしてみたんだけど…きつともう無理だろうなあ。私はなんだか、寂しいような、何ともいえない気持ちだった。そんなに頻繁にお店に来ていたお客さんでもないし、付き合っても浅いんだけど…やっぱり初指名のお客さんだったからかなあ？連絡が取れなくなる事で、こんなに喪失感があるとは思わなかった。

週明けて月曜日。いつものように舞台稽古を終えて、ちょっと遅めにお店に滑りこむ。舞台の稽古のほうはイメチェンの力も相まって、以前よりも役に馴染んできたと演出家の先生に誉められて…ど

うにか順調になってきた。舞台かキャバか、どちらか一つだけでも順調になってくると大分気が楽だな。

大急ぎで着替えて、メイクとヘアメを終え、待機席へ向かう。：と、待機席に向かう途中、見慣れない女の子達とすれ違った。背が小さい子：エナさんみたいに細くて小さな、ギャルっぽいけど可愛い女の子2人だった。：体入の子なのかな？

『MOON』は新宿でも大箱の有名店。毎日誰かしら体入の子が居たりする。もちろん、体入してもそのまま本入できる子はなかなかいない。そう思えば、私なんてまりあさんのコネで本入できたよいうなモノだ。何だかんだ店長にも良い待遇してもらってるし：少しはそれに見合うように、自分なりに成長しないとな・・・なんか申し訳ないかも。

「あ、ミキちゃん！おはよう。」

ふいに声をかけてきたのは：宮道だった。そういえばいつも入り口付近に居る宮道の姿が今日は無いと思ったら：店内に居たのか。その横にはさっきの小さな女の子2人組。

「今日から本入した、杏ちゃんあんと、凜ちゃんりん！よろしくね！」

どちらもギャル系雑誌に載ってそうな感じの目の回り真っ黒メイクと、いかにもっていう雰囲気なんだけど：なんか二人、似てるな。メイクがメイクだから同じような顔に見えるのか、体型が一緒だからそう見えるのか・・・双子？みたいに一瞬見えた。色黒で金髪のほうが杏ちゃん。色白で黒髪のほうが凜ちゃんらしい。

宮道に促されて、杏ちゃんと凜ちゃんはダルそうに頭を下げた。

「：ねがいしまあす。」

言葉もはっきり聞き取れないようなテキトーな挨拶で：そんなに面倒なら、いっそ挨拶されないほうがマシなんだけだな。この二人、すっごい若そう。幾つなんだろう：

「あれ？宮道。新しい子？」

ちようどそこへ、お手洗いの為に席をたったと思われるまりあさんが通りかかった。

「まりあさん、今日から本人の杏と凛。よろしくお願いします。」

と、宮道が言い終わるか終わらないうちに：

「うわぁー！！まりあさん！？桜井まりあ！？超きれー！マジ可愛い☆」

「あたし達、まりあさんに超々憧れてんですケド！今月号の『キャバクラ・night』の表紙見ましたぁ★こないだ『小悪魔girl』にも出てましたよねっ！超うれしー！」

私の時とは別人のような大はしゃぎで杏ちゃんと凛ちゃんは、まりあさんに飛びついた。『キャバクラ・night』は夜のお店専門の情報誌らしい事は知っていたけど：今月号は、まりあさんが表紙なんだ！？ヤバイ、知らなかった：やっぱりそういった情報誌もちゃんと見ておかないと。

なんとなく、失礼なカンジの杏ちゃんや凛ちゃんよりも、夜の仕事について知識も興味も浅かった自分が：ちよつと悔しかった。

「そ、そう。ありがとう：」

杏ちゃんと、凛ちゃんの迫力に、まりあさんはちよっぴり引き気味で挨拶して、そのままさっさと去っていった。

「マジすげえ☆オーラとか、ハンパないってカンジい？」

「あとで写メ撮らせてくれるかな？」

そんな感じで。キャイキャイ言いながら杏ちゃんと凛ちゃんはメイクルームに歩いていった。・・・なんていうか・・・『MOON』には珍しいタイプの子達だけど・・・本入ってことは正式に働くんだ！？

「・・・あれね。宮道が引き抜いてきたらしーよ。」

待機席に座った私にアキラちゃんが耳打ちした。

「ブクロの店から引っ張ってきたみたいよ。引っ張ってきた子は自分の担当だからねえ。なーんかカンジ悪い奴らだけど・・・もしかして、あの子達が宮道の店長レースの隠し玉なのかも・・・？」

そういつてアキラちゃんが見た視線の先には、待機席に座らず、フロント近くで宮道や店長と騒いでいる杏ちゃんと凛ちゃんが居た。

隠し玉・・・？杏ちゃんと凜ちゃんが！？『MOON』の雰囲気、全然合っていない二人だけだな。

この後、すぐにその理由がわかるようになった。

30、杏と凜く2

杏ちゃんと凜ちゃんを引き抜いてきた、宮道のワケ・・・

私が待機席に座って間もなく、それは訪れた。

「いらっしやいませー!!」

いつもの宮道のどデカイ声と、他のボーイさん達の挨拶。それと同時に、どどどとなだれ込むかのように集団が入ってくるのが見えた。

「…杏ちゃんと、凜ちゃんご指名の15名様、ご来店です!」

ちよっと困ったような声で細田君が、入り口の階段を駆け下りながら、インカムで必死に喋ってる。…今日は入り口に居るのは宮道じゃなくて細田君なんだ?とか、ぼんやり細田君を見ていた私の肩を、アキラちゃんがつついた。

「いや、マジ無理でしょ。アレ。」

「え?」

アキラちゃんが見つめる、今入ってきたばかりの集団は…

雰囲気だけで、私でもわかった。なんか微妙な柄のジャージみたいな服とか、変な縦縞のスーツにセカンドバッグとか、よくわからないジャラジャラネックレスとか、サングラス?みたいな色付き眼鏡とか、やたらがに股歩きだったり、ギラギラの金の腕時計つけてたり…まあ、ようするに、ドラマなんかでよく出てくる典型的な『ヤクザ』な雰囲気の方々だった。

「あ、あれって…」

私は不安になってアキラちゃんにこそっと囁く。待機席に居た他の女の子達も、何やらコソコソ話してはじめた。

「ヤカラだね。」

「や、やから??!」

短く答えるアキラちゃんに、更に食いついて聞く。ヤカラって・

!?

「んー…。なんて説明しようかな。なんつーか、ヤクザとかヤミ金とか、詐欺師とか…そんな感じの人達？どれも線引きがビミョーだから、まとめて『ヤカラ』って呼ぶ、みたいな。」

や、や、や、ヤクザ!? マジで!? いや、でも本当にそんな人達っぽいしっつ。

嫌だ、このままだと待機に居る子、私も含めてみんな着いちゃうよ…

「ねえーねえー。アキラちゃん。ウチの店、ヤカラあんまり入れないんじゃ無かったっけえ?」

ちよつと離れた位置にいた、大学生のアルバイトの奈々ちゃんがアキラちゃんの近くに寄ってきて、小声で訪ねた。

そういえば、入って間もなくそんなような話を岩村から聞いたかも。『MOON』はお客さんは初来店の時、名刺提示しないと入れないとか、ヤクザ系禁止とか…

「うーん。表向きはねえ。ぶっちゃけ今だって、常連で綺麗に飲みに来てるけど、仕事の内容は実はヤカラと同じっていうお客様だって居るしね。…マナー悪い人はお断りですよーくらいな意味合い? …いかにもアイツ等はマナー悪そうだけど。」

見るとフロントでは、集団のリーダーらしき男が店長と細田君に何やらヤイヤイと注文をつけていた。

困ったような細田君をよそに、店長はニコニコ…というか、ヘイコラと頭を下げて…どうやらリーダーらしき男のワガママを聞いているようだった。

しばらくリーダーらしき男が店長達と話している間に、他のジャージ姿のデカイ男が1人、勝手に中に入って待機席までズカズカやってきた。こっちはお客さん立ち入り禁止なのに…。困ったようにジャージ男に何かを言いかけた細田君を、店長はニコニコしたまま引き止める。

「・・・おい、お前は余計な事すんなよ。」

「は、はい・・・でも・・・」

それでも何か言おうとする細田君の頭を店長は小突き、リーダーらしき男にまたペコペコしていた。

「・・・ふーん」

待機席にやってきたジャージ男は、座っていた女の子をジロジロとなめるように見渡し始めた。

体格が良いっていうか、ちょっとデブめで、色黒で、結構若い感じで、似合わないのにピアスとかしてて、頭は丸刈りで、なんかよくわかんない犬の絵が書いてる変な白いジャージ着てて・・・全体的にいかついオーラが出まくっていた。

そんなイカツイ風貌で、キャップとか被ってるのはちょっとウケるんだけど。とか思ってしまう。ヤカラと言われながら、本人は出かける前に帽子とか選んで、被ってくる様を想像すると・・・ちよつと可笑しくてたまらない。仕事はイカツイけど、中身はそりゃフツートの若い男の子だよー。じゃあ、あのジャージも自分で選んだのかな？あのセンスはナシだと思うけど・・・

「ふふ・・・」

独り、笑いを押し殺していたところで・・・そのジャージ男と目があってしまった。

「・・・」

私はなんとも中途半端に、微笑んだような状態で凍りつく。・・・やばい。いや、まさか私がそんな事思っただけで笑いを堪えてたなんて・・・わかるわけないよね？ね？！かなりビクビクしながら、私は微笑みの仮面をつけたまま、そのジャージの男と、しばし見つめ合うカタチになってしまった。

「・・・お前、指名な。」

「えっ？」

私は微笑みの仮面を付けたまま、凍りついた。・・・い、今、なんだって!?!

焦って隣のアキラちゃんに助けを求めようと見ると、アキラちゃんも奈々ちゃんも、わざとらしく顔を背けて知らんぷりする。

「ちょ、あ、アキラちゃん！」

「・・・しーらないっ」

アキラちゃんも奈々ちゃんも、苦笑いをしながら、わざとらしく顔を背ける。

ジャージの男はそのままフロントへ戻ると、私を指差し、店長に何かを話している。店長は相変わらずヘイコラした感じて満面の笑みを浮かべ、私を見ては何か話していた。指名なんて、冗談だね！？

しばらくして、15人ものヤカラはフロアへと案内され、消えていく。待機席の子はいつだったかの千葉さんの時のように、急に電話をするために席を立つ子や、トイレに行く子・・・とにかくあの席には着きたくないと、みんなそわそわし始めた。

まもなくして、いつものように付け回しの岩村がフロアから待機席にやって来る。

「はいはいはいはい！逃げてでもダメだから。みんな着くからねっ！」

そう言って岩村はそくさと待機席から逃げようとしていた奈々ちゃんを捕まえる。同時に岩村は次々と待機中の女の子をかき集めてきた。

「杏ちゃんと、凜ちゃん、それから・・・ミキちゃん指名の15名様ね！」

岩村の言葉に、私は一気にテンションが下がる・・・。さっきのは冗談じゃなくなって、本気だったんだ・・・

「岩村さあくん。あたし明日の授業のレポートあるからあ、早上がり希望ー。終電希望ー！」

いち早く奈々ちゃんが手をあげる。

「はいはい、状況次第ね！」

次々と文句をたれる女の子達を、岩村は適当にあしらいい、すぐに席に着ける子から、どんどんフロアに連れて行く。ブーたれていた

女の子達も、いざフロアに出れば仕事モード。ニコニコと愛想よく席に入って行くのが見えた。こういったあたりはバイト感覚のキャストでも歌舞伎町の有名店『MOON』で働いている以上、ちゃんとプロ意識・仕事意識をもって働いているんだ・・・と感心する。

「ミキちゃん、しっかり頼むより！・・・ああいった人たちはさあ、慣れないとやりずらいかもしれないけど、かなり羽振りいいからね！掴んだら売り上げもデカいんだよ！」

他の女の子を席に着かせ、妙にホクホク顔の岩村が私に耳打ちしてきた。

・・・そりやそうか。私の売り上げⅡ成績は岩村の成績になるんだっけ。

本当だったらこの15人のヤカラ客の売り上げは杏ちゃんと、凜ちゃん2人のものⅡ宮道の成績だったんだけど・・・待機席にズカズカやって来た男のいきなりの指名で、私までもが本指名扱いで加わることになったから、売り上げは杏ちゃん・凜ちゃん・私の3人で分けることになるのだ。岩村にしたら、何もせずに宮道の売り上げを奪える結果になったからホクホク顔なのだ。

「いやⅡ正直さあ、杏と凜がウチに本人なんて反対だったんだけどねⅡ。2人とはブクロの店で一緒だった事があるから良く知ってるけどさあ、なんていうか色々問題ありなんだけど・・・でもこうやってミキちゃんが杏と凜達の枝をもぎ取ってくれるなら大歓迎だよねえⅡ」

そういえば、岩村は前はブクロに居たんだっけか。そんな話を思い出した。

「えー！？杏と凜だけの指名じゃないのおー？」

聞き覚えのある声が背後です。背が低い、色白、黒髪のほうの凜ちゃんだ。あからさまに私が本指名として食い込んでいることに、嫌悪感をあらわにしていた。

「・・・しょーがないよ。今日はヤオーも一緒だから・・・」

ちよっぴりたしなめるように、背が低い、色黒・金髪のほうの杏

ちゃんが、私が居ることに気がついたのか、ちょっぴり小声で話す。「じゃ、先にミキちゃんいこうか!・・・あんなの気にしない!気にしない!」

ちらりと宮道を見て、したり顔の岩村が強引に私をフロアへと急かした。

い、岩村はそりゃいいかもしれないけど・・・気にするなっていわれても、気になるってば・・・。フロアに出る前にちらりと宮道たちの様子を見れば、なにやら3人でこそ話しているし・・・。

・・・なんかちよつと・・・いや、かなり・・・嫌な予感がする・・・。

31、ヤオー

岩村に案内された15名のヤカラの席。

どっかりとソファに座り込むその集団は、フロアでひとときわ異様な雰囲気を漂わせていた。

「ご指名のミキさんです！」

岩村に急かされ、席に向かう。

「ご、ご指名ありがとうございます。ミキです…」

ちよっぴりビクビクしながらジャージ男の隣に座る。その男は、ソファの一番奥のL字の席に深く腰掛け、両手をソファの背もたれの上に乗せ退屈そうに座っていた。

「えっ、ヤオーさん、指名したんすか。」

隣には、細身でスーツをだらしなく着ているチャラチャラした男が居た。ジャージ男が私を指名したことを知ると、びっくりしたように私をジロリと見る。…どうやら待機席に乱入してきたジャージ男は『ヤオー』と呼ばれてるらしい。そういえば、さっき杏ちゃんも、ヤオーもいるからどうか…そんな話してたよね。

「あ？…まーな。女コロコロ変わるとめんどくせえし。」

そう言って、ヤオーと呼ばれるその男はタバコを取り出した。私はとっさにタバコに火をつけようと、自分のそばでライターに火をつける。…なんだか最近、この動作が反射的に出てくるようになってしまったな。条件反射ってやつか。

「…ああ、悪い。俺、人に火つけてもらうの嫌なんだ。」

ヤオーはそう言って、ジャージのポケットから細身のライターを取り出し、自らタバコに火をつけた。

「あ…ごめんなさい…」

私は手持ち無沙汰になってしまい、とりあえず灰皿を近くに置いてみた。

もう既にテーブルには何人か女の子が席に着き、わりと賑やかにしてはいた。待機であれだけ不満げにしていた女の子達も、ニコニコと楽しそうにしている。そんな雰囲気の中、なんだか私とヤオーの席は会話が弾まない……。こんなカンジのお客さん、初めてだからどうしていいかわかんないよ……。

「オッスー！おまたせえー！」

ひととき大きな声でテーブルに入って来たのは杏ちゃん。私とヤオーの並びに座っていた、店のフロントで色々文句をつけていたりダーらしき男の隣に座った。

「おつかれーえ！」

続いてやってきたのは凜ちゃんだった。凜ちゃんはさっきヤオーに話しかけてた細身の男の隣に座る。

「ヤオー、お久あ！元気い！？」

杏ちゃんが私の隣に座っていたヤオーに声をかけた。

「あ？あーオマエ、まだ生きてたのか。」

ちらりと杏ちゃんを見たヤオーは、ひどくつまらなそうに答える。

「酒もってこい、酒ー！」

杏ちゃんの隣のリーダーらしき男がボーイに乱暴に叫び、それに乗じて他の男達も次々と騒ぎ立てる。そんな中でも相変わらずヤオーはむっすりして様子でつまらなそうにソファに寄りかかった。

運ばれてきたボトルでお酒を作り、キャスト全員のドリンクも頼ませてもらってようやく乾杯。もう結構飲んできたのか、勢いづいてるヤカラ客たちの飲むペースはかなり速くてあつという間に最初のボトルが空いて、次のボトルを注文した。やかましいくらいに盛り上がってるんだけど……。私とヤオーはなんだか・盛り下がってる？ヤオーは乾杯のとき少し飲んだだけで、それっきり全然お酒も飲まないし。色々話しかけるんだけど、なんだか会話が続かなくて……。指名したはいいけど、なんだよこの女って思われたのかな……。

「……。あの、もしかして私、つまらないですか？」

「あ？」

ヤオーがぎろりと睨む。睨まれちゃったけど・・・ちよつと迷ったけど、でも私はそのまま続けた。

「・・・その・・・せっかく指名してくれて嬉しいんですけど・・・もしかして私のこと、期待はずれて思ってたなら、なんか申し訳ないし。指名料ももらってるわけだから・・・う、うちのお店は凄く素敵なキャストがいっぱいいるので・・・もしかして他にもっと気に入る子がいるかもしれないから・・・その・・・嫌だったら遠慮なく言ってください・・・」

言ってみたものの、だんだん声が小さくなってる自分がいた。恐る恐るヤオーを見ると、ぎろりとにらんだまま、私の事をじっとみている。・・・やばい、怒らせちゃった!?

「・・・お前は俺が嫌なのか？」

「い、いえ!そんなことはありません!!」

私は大焦りで答えた。周りは大騒ぎで私達の様子に気づくものは誰もいないといった様子だった。

「・・・じゃ、いいんじゃないやねえの。」

「・・・え？」

ヤオーは退屈そうに、座りつかれたのかクビをまわし、大きなあくびをした。

「俺がいいって言ってんだからいいんじゃないやねえの。・・・もつとドリンク頼めば？」

「え?・・・ええと・・・はい・・・」

会話が续かなくて、場が持たなくてがぶ飲みしてた私のグラスは空っぽになっていた。・・・頼んでいいって言ってくれるのは嬉しいんだけど・・・私はちらりと杏ちゃんと凜ちゃんを見た。もともと杏ちゃんと凜ちゃんが呼んだお客さんだし・・・いくら私も本指名もらってるからって、どんどんドリンク頼んじゃうのも、なんか気が引けるし・・・。

私がおもたもたしていると、ヤオーがいきなりそばを通ったボー

イを大声で呼び止めた。テーブルの一番奥に座ってるから、こうするしかないんだけど・・・その大声にテーブルに居たみんなが一瞬びくったとした。

「おい、お前ソルティードッグ飲めんの？」

ヤオーが私にぶつきらぼうに尋ねた。・・・え？ええと・・・飲んだことはあった気がするけど・・・どんなだったかな・・・。

「は、はい！」

私はとにかく何か返事しなきゃと、そのカクテルがどんなものかよく分かってないまま大焦りで答えた。

「・・・おい。こいつのドリンク。・・・お前、名前なんだっけ？」

ヤオーはボーイを捕まえたまま私のほうを向いた。

「み、ミキです・・・」

大声でボーイを呼び止めたヤオーに気づいたテーブルのみんなの視線が、いつのまにか私達に集中していた。

「ミキのドリンク。ソルティードッグ10杯な。10杯全部今すぐ持ってこいよ。」

「じゅ、10杯!？」

私が思わず声を上げると、ヤオーはまたぎろつと私を見た。

「・・・お前、変わったヤツだよなあ。」

一言そう言うと、ヤオーは初めて笑いを浮かべた。席では他のヤカラ客達が再びわいわいと盛り上がってる。

「もつとさあ、欲とかねえの？」

「欲？」

きょんとした私を、ヤオーは面白そうに見ている。

「ドリンク一杯頼めば、その分自分の売り上げにもなるし、幾らかバック入るんだろ？フツー客に頼んでいいって言われたら、ガンガン頼むもんじゃねえの？」

ヤオーの言うとおり、キャストがドリンクを頼めば、その分の売り上げも上がるし、一杯につき幾らかのバックも入る。それは本指名料や場内指名料もそうなんだけど。・・・確かにそうなんだけど

ね。なんだかイマイチまだ一杯飲んで儲けようと思えないって言うか、できないっていうか・・・。

「お前、何年水商売やってんだよ？」

ヤオーはちよつとからかうように私に聞いてきた。機嫌は悪い様子じゃなくって、むしろさつきより全然よくなってる風だ。

「えっと・・・2週間・・・3週間くらいになります・・・」

「はあ!？」

あれ、なんかまづかったかな・・・。私はもう一度答えた。

「今月のアタマあたりから、初めてここで・・・キャバクラで働き始めたので・・・」

「おい、つまんねー冗談言うなよ。」

思いもかけず、ヤオーは大笑いした。

「じよ、冗談じゃありませんってば!」

別に怒ることもないんだけど、なんかムキになってしまう。

「おいおい。どこにこんな玄人くさい新人がいるんだよ。マジうける、お前。」

そういつてヤオーはまた笑った。見た目はガタイ良くて色黒で、見るからにおっかないんだけど・・・意外と、そうでもない・・・のかな?それにしても玄人くさいって・・・イメチェン大成功ってことで喜ぶべきなのか、どうなのか・・・。

「おい、お前の名刺よこせ。」

ヤオーの言葉に私は、はっとした。・・・やばい、私の名刺まだカラ名刺だった・・・!あれだけ名刺注文するように言われてて、注文しなきゃって思ってたのに・・・私もすっかり忘れてたし。岩村も自分の店長レースのことで忙しくて私の名刺のことなんて忘れてたから・・・。

「・・・あの・・・これなんですけど・・・」

私は店名のみ印刷されたカラ名刺に、ボールペンで『ミキ』と書いた、なんとも情けない名刺をためらいながら差し出した。

「・・・ぶっ!・・・おいなんだこれ!」

ひと目見るなり、なんだかもうヤオーのツボにハマってしまったらしく、大笑いをする。・・・なんだか馬鹿にされてるかんじなんだけど。

「うわぁー。超だせえ！手書き名刺だよ。」

最悪な事に、ちょうど名刺を取り出した所を、隣の杏ちゃんに見つかってしまい・・・凛ちゃんやそのお客さんも一緒になって私の手書き名刺を覗き込んでは大笑いをはじめた。

しばらくヤオーも身体をよじって大笑いをしている。・・・そんなに笑わなくてもいいじゃん。なんかだんだんイラっとしてくる自分が出た。ヤオーだけならともかく、なんで杏ちゃんや凛ちゃんや、その他見ず知らずのお客さんにまでこんなに笑われなくちゃいけないんだ。そりゃ、さっさと名刺作らなかった私が悪いっちゃ悪いんだけどさ。こんな着きたくもない席について、嫌な思いするなんて本当にイラつく。

そう思ってるのが顔に出てしまっていたのか、ヤオーは私の様子に気づくと笑いを堪えながら、カラ名刺を私につき返してきた。・・・受け取らないなら受け取らないでいいから、本当にもう指名はずしてくれないかな。その言葉が喉まで出掛かった時、ヤオーが先に言葉を発表した。

「はは！そう怒んなよ！お前のアドレスと電話番号ねえぞ。書け。」

・・・え？・・・今、なんて・・・？

32、ライター

突き返されたと思った私のカラ名刺に、連絡先を書けというヤオー。意外な反応に、私はどう返事を返したらいいのかと一瞬戸惑ってしまった。

「…おい、オレに連絡先教えるのが嫌なのかよ。」

「い、いえ！そんなことないですっ！」

私は焦ってポーチからボールペンを取り出そうとゴソゴソ探した。カラ名刺の裏側に電話番号とメールアドレスを書き、改めてヤオーに手渡す。「…あとでメール送ってやるから登録しとけよ。」

名刺を受け取ったヤオーは、ジャージのポケットにそれをしまい、再びソファーに背を預けてどっかりと座り込んだ。

「お待たせしました。」

ボーイの声にはっとして振り向くと、ちょうどさっき頼んだソルティドッグ10杯がずらり目の前に運ばれてきて…成り行きで頼んじやったけど…こんなに飲めないよ。わりと小さなグラスに用意されたカクテルだったけど、流石に10杯ともなるとかなりの量。それに、さほどお酒に強いわけじゃないし…

目の前にずらっとならんだグラスに呆然としていたら、ヤオーがグラスを1つ手に取り、いきなり飲み干した。

「あー！うめえ！」

…と、続いて2杯目を口にする。あ、あれ？ヤオーが飲んじやってるけど…。私が呆然と見つめていたら、それに気づいたらしきヤオーがめんどくさそうに口を開いた。

「あ？…ああ、オレ焼酎とか飲めねーんだ。こいつらと飲み歩くと焼酎ばかりだからな。だからイヤなんだよ。」

そう言って、杏ちゃんや凜ちゃん指名のヤカラ仲間をチラリと見た。

ヤオーは本当に焼酎が苦手らしく、最初に作ったグラスのお酒は

ちつとも減っていない。その代わりに出てきたばかりのソルティドッグはジュースみたいにガブガブ空けていた。

「あゝ！またヤオー、ヘタレな酒飲んでんのお？マジウケるゝ」

めざとくヤオーの様子を見咎めた凜ちゃんが、茶化するように口を挟んだ。ついでに杏ちゃんもキャッキヤと囃し立てて笑う。

「るせーな、お前ら。どうせ全部俺が払うんだから文句ねえだろ。お前らは水しか飲ませねーぞ。」

ヤオーは再びめんどくさそうに、ソファーに背を預けた。

私は結局、ヤオーが頼んだソルティドッグを一杯だけもらい、チビチビ飲みながら席に座っていた。私があまり酒に強くないとわかったのか、特にヤオーは私にお酒を強要する訳でもなく…自分が飲みたいだけ飲んで、たまに喋りたい時に私に話しかけていた。

テーブルでノリノリになった他のヤカラ達がゲームをし始めても「めんどくせえ。」

と言って、ヤオーは参加せず。私もヤオーと一緒にひっそりとソファーに座っていた。

…なんだかヤオーって、想像してたのと全然違うかも…

私はそんなことを思いながら、不機嫌そうにしているヤオーの横顔をみた。

「…あ？何だ？俺の顔がそんなにおかしいか？」

私の視線に気がついたのか、ヤオーはギロっとまた私を睨む。

「あ、いえ、その…や、ヤオーさんは何でヤオーって呼ばれてるのかなって思っ…」

私はとっさに、当たり障り無いような質問をしたつもりだった。…が。

「……」

ヤオーはそれきり黙ったまま、一言も口をきこうとしなかった。

…やばい、なんかまずい事聞いちゃった！？私は焦りながらも、何言葉も見つからなくてただ黙ったまま、隣に座っていた。

「あの、ごめんなさい…」

私はとりあえず、消え入りそうな声で謝罪の言葉を口にした。なんとなくヤオーの機嫌が良くなっていたっぽいのに、悪いこと聞いたような気がして……。

「別に。」

ヤオーは私を見るでもなく、ソファアに背をあずけたまま退屈そうに大あくびをした。

「：何か知らねえけど、周りが勝手にそう呼んでんだよ。気にいらねえけど、本名言う必要もねえし、いいんじゃない？みたいな。」

「は、はあ……」

それだけ言っているとヤオーは突然立ち上がった。

「おい、俺はもう帰るからな。」

ヤオーの大きな声に、ゲームをしてバカ騒ぎをしていたテーブルの全員が、一斉にヤオーを向く。

「えーヤオーさん、まじすか？」

「まだ飲みましょうよ」

「もう一件行きましょうよ！」

口々に他のヤカラ達がヤオーを引き止める。

「るせー。眠いんだよ。おい、ここで一回チェックしろ。」

ヤオーが急に私に話を振ってきた。

「え！？は、はいっ！」

大慌てで近くのボーイを呼び、会計してもらうように伝える。その間にヤオーは席を離れフロントまでスタスタ歩いていってしまった。ふと、ヤオーが座っていた隣のソファを見たらヤオーが使っていた細身のライターが落ちていた。

「や、ヤオーさんっ。忘れ物！」

私はライターを手に、人数いっぱい出入りするのも大変なテーブルから半ば無理やり抜け出し、ヤオーを追いかけた。

「：あ？なんだお前、来たのか。あいつらまだ残ってくんだから一緒に座ってりゃいいのに。」

フロントでカード支払いのサインをしていたヤオーは、私の姿を

みてまた不機嫌に言った。

「い、いえ：そういう訳には…」

あのテーブルにあのまま着いているのはちょっとゴメンなんだけど…。

私がまたぼんやりそんな事を思っていたら、さっさとヤオーは扉に向かって歩き出してしまった。深々と頭を下げる店長やボーイを、全く気にかける事もなくさっさ外に向かうヤオーの背を、私はまた追いかけた。

「ヤオーさん、これ！」

大急ぎでヤオーに追いつき、振り向いたヤオーにライターを突き出す。

「やる。」

「・・・え？」

一瞬何のことかわからずにいると、ヤオーはめんどくさそうに口を開いた。

「お前にやるって言ってんだろ。ライター。」

相変わらずヤオーは短い言葉で乱暴に話す。

「い、いえ、そんなもらうわけには・・・。」

細身だけどなんかずっしり重くて、高そうなライターだし・・・。

私が使ってる100円ライターとは比べ物にならない高級感・・・

「やるっていったからもらえよな。・・・お前、そんな100円

ライターなんて使ってんなよ。100円ライターみたいな客しかつかねえぞ。」

「えっ」

考えていたことが見透かされてしまったようで恥ずかしくなり、とっさにポーチと一緒に持っていた100円ライターを隠そうとしてしまった。

そんな私を見てちよつと笑ったヤオーは、「じゃあな」とだけ言うとそのまま歓楽街の雑踏の中に消えていってしまった。

・・・なんだか・・・よくわからないけど変わった人・・・

「・・・ありがとう・・・ございました・・・」
ヤオーの姿が見えなくなってしまったあとで、誰も居ないエントランスで、私は独り言のようにつぶやいた。

33、カースト制

「つか、マジでありえないんだけどっ!!!!!!!!!!」

営業終了後のメイクルーム。皆、口々に文句を言っではいたけど、ひととき綾奈ちゃんの声が響いた。

「あいつらマジでありえないって!!何なの!？」

自分のロッカーにポーチを乱暴に投げ入れる綾奈ちゃん。あいつらとは・・・そう、凜ちゃんと杏ちゃんだということは、そこに居る誰もがわかっていた。

「マジむかつく!ずっとキャストの入れ替えは無いし、着いた客に営業しようとしたら邪魔するとかホント、ありえねー。超ー時間の無駄!」

今までに無いくらい爆発している綾奈ちゃんを、誰もが止めようとは思わなかった。だって、ほとんどのキャストが同じことを思っていたから・・・

「つか、岩村も超つかえねえー!!!!ほんとむかつく!!!!」

綾奈ちゃんには岩村にまで怒りが達したらしい。岩村に直接文句を言おうとフロアへ繰り出してしまった。

ヤオーが帰ってからも、1セットくらい延長して残っていた凜ちゃん・杏ちゃん指名のヤカラ客。来店していた他のお客さんのほとんどが、指名有りの常連のお客さんということもあり、最初にヤカラ客に着いた女の子達はほとんど入れ替えが無いままだった。本来ならウチの店では指名ナシのフリー客についた女の子は、店内の状況にもよるけど1セットで3〜4人くらい入れ替わる。自分の指名のお客さんが来ている場合でも、同じ時間に『良いお客さん』になりそうなフリー客がいる場合、少しの時間だけでもその女の子をフリー客に回したりしてる。・・・が、今回はそれは無かったようだった。

綾奈ちゃんや他の女の子が言うには、他のヤカラ客・・・つまりは凜ちゃん・杏ちゃん指名のお客さんの『枝』であるお客さんに着いた女の子が、そのお客さんと番号交換しようとしたり、場内指名を取ろうと営業するものなら、すかさず凜ちゃんと杏ちゃんが邪魔をしていたらしい。営業妨害ってやつだ。

さらにはゲームで負けた女の子にもイッキ飲みをさせ酔い潰したり、同じようにヤカラで潰れてべろべろになるのもいて、グラスは何個も割れるわ、ボトルは倒して床が水浸しになるわで・・・とにかく、ぐちゃぐちゃな感じだったらしい。

あのグループで一番偉いのはリーダーらしい杏ちゃんのお客、次は凜ちゃんのお客・・・といった感じだったから、他のヤカラ客は自分の好きなようにはできなかっただろうし、文句も言えなかっただろう。

ヤオーは・・・なんかちよっと『別物』って感じなのかな？ いまいち関係性は分からなかったけど、凜ちゃん・杏ちゃん指名のお客さんに遠慮することもない立場なんだろうなとは思った。一人で先にみんなの分会計して、眠いとか言って勝手に帰るくらいだし・・・。

今日は、まりあさんのお客さんが結構来店していたこともあり、私はヤオーが帰ってからはずぐにヘルプにまわされてしまったから、詳しいことはよく分からないんだけど・・・みんな綾奈ちゃんのように爆発はしないにしても、かなり不機嫌に、仲が良い子同士でぶつぶつ文句を言いながら着替えと帰り支度をしていた。

当の凜ちゃんと杏ちゃんは

「送りキャンセル！アフター行ってくっからあ！」

・・・と、営業終了後すぐさま、ドレスを脱ぎすて、靴だのドレスだのを片付けることも無くその辺に放り出したまま出て行ってしまっていたのだ。

「・・・岩村さあ、あれでいいわけ？」

アキラちゃんがちょっと乱暴にタバコに火をつけて、煙を吐いた。みんなが帰りの車や、アフターに出て行ってしまった後の店内。閉店作業に忙しいフロアの一角に座るアキラちゃんと、私と、それから岩村。・・・いつものように送りをキャンセルしてアキラちゃんとラーメンを食べに行くところだったんだけど、店を出る前にアキラちゃんが岩村を見つけて、ソファに座らせ話し出したのだ。アキラちゃんもあのヤカラグループへの不満があったらしい。

「・・・んな事言ってもなあ。入店させるって決めちゃったの店長だし、ウチの店じゃ禁止してるゲームとかイツキ飲みとか・・・目をつぶってろってことだったしさあ・・・」

岩村はちよつと疲れたように、困った顔をして頭をかいていた。他の女の子も送りの車に向かう前に、岩村を囲んで散々責めていたので・・・ちよつと可哀想な感じだ。岩村はネクタイを外し、一つため息をつくと話が続けた。

「・・・わかったと思うけど、凜も杏も、自分の指名客が連れて来た『枝』は絶対にとらせようとしなからね。これはもう、ずっと昔、池袋で一緒だった頃から。自分達の売り上げは自分達のもの。あいつらの仕事はいつもそう。そんな使い物にならない『枝』だってわかってても、キャスト回すのが付け回しとして当然だとは思って・・・」

・今日のキャスト、他に誰がいる？『MOON』ナンバー1・まりあさんや、ナンバー2・ゆいちゃん、歌舞伎町の人気嬢エナちゃんをさ、あの席の下っ端の『枝』客なんかにつける訳ないだろうー。

しかもお客にならないってわかってて。唯一お客になりそうなジャージの人はミキちゃん指名になってたしさあ。やっぱりそのお客様と色々な意味で釣り合うキャストを付けないといけないんだよ・・・
・他の指名が入ってるキャストだって、わざわざ指名の席から抜いて、あの席に付ける必要なんて無いだろ。そんなの指名のお客様とキャストに失礼だよ。だからさ、付きっ放しだったキャストには我慢してもらうしかなかった・・・つか、アキラちゃんの事は

すぐ抜いてまりあさんのヘルプに回したじゃん!?なんで怒ってんの?」

ちらっとアキラちゃんは岩村を見て、またタバコをふかす。

「別に。あんな接客のキャストが働いてたり、あんなお客が出入りする店になるのが嫌なだけ。・・・で?閉店作業ほったらかして、店長と宮道は?」

「え?あー・・・さっきの凜と杏指名のお客様が一緒にアフターに誘ってってさあ・・・2人で出てったよ。」

アキラちゃんの質問にそう答えて、岩村は大きいため息をついた。「凜と杏はさあ、・・・態度は悪いし、遅刻に無断欠勤当たり前だし。枕だの裏引きなんかも当たり前。色々問題も起こす奴等だから・・・池袋の既存店じゃ、もうどこも働けないって話なんだよね。おそらく宮道は店長レースの売り上げの為だけに2人を引っ張ってきたんだと思うから、この店にも長くいるとは思えないし。だからちよっとだけ我慢してよ。それでもあいっらは在籍してる間は、大金使う客を連れてきて、かなり売り上げあげるからね。店としては凜と杏に強く出ることはまず無いと思う。凜も杏も無断遅刻だの欠席だの多いから、罰金で引かれまくって、あいっらの手に渡る給料は毎回メチャクチャ少ないからさ。店の儲けだけ出して、給料出すの少なくて済むなんて店としてはウハウハだし。」

・・・ふーん。やっぱり色々問題あるんだ、凜ちゃんと杏ちゃん・・・それにしても『MOON』らしくない2人と、そのお客さん。それでも店長が雇ったってことは、やっぱり売り上げが上がるからなのかな・・・

「この世界は本当の意味で格差社会だからね!わかる?ミキちゃん!!!!」

岩村が妙に力説しだした。

「え、ええっ!?!」

アキラちゃんと岩村のやり取りを横で傍観し、一人でぼーっと考えていた私はビクツとした。い、いきなり私に話を振らないでほし

いんだけど・・・。

「水商売はカースト制だぞ！一番偉いのは、お金を使うお客様！次に偉いのがそのお客様から大金を引き出せる女の子！次に黒服！そして・・・一番身分が低いのは売れない女の子！だから・・・他の女の子や店に文句や要望があるなら、自分の売り上げしっかりあげてから！！」

「う・・・売れない女の子・・・」

一瞬ヒヤツとして言葉に詰まっていた私。そこへアキラちゃんが岩村に反論する。

「まあ、ウチはそれにまだ色々と付くけどねぇ。一番偉いと思ってるのは林田店長、次に偉いのは店長とヤツた女の子、次がお客様、そしてお客様から大金を引き出せる女の子、黒服、売れない女の子・・・」

「おいおいおいおいっ。ア、アキラちゃん、言いすぎじゃない？ミキちゃんもいるんだし、変なことあまり言わないでよ。」

岩村は大焦りでアキラちゃんの話をごまかそうとする。・・・いや、ごまかさなくても、もう色々知ってるんだけど。

「だって本当の事でしょ。ミキちゃんは大丈夫ー。もう色々レクチャーしといたから今更驚かないし。ね？ミキちゃん。」

「え、えええ・・・と。うん・・・」

私はどんな表情をしていいかわからず、アキラちゃんの言葉にあまりにまいに返事をした。

そんな私とアキラちゃんの様子を見て、岩村はちよつと苦笑いしながらも、しょうがない、といったようにまた大きなため息をついたのだった。

34、月の魔力

嵐のような杏ちゃんと凜ちゃんの入店。あれから『MOON』では毎晩、同じ様な光景が繰り返られていた。杏ちゃん達は今も二人一緒に指名客を呼び、そのお客さん達は毎回大人数で来店した。一日に呼ぶ指名客は一組、たまに個別でもう一組くらいで・・・指名本数自体は少ないのだが、グループの頭数と、バカ騒いでどんどんお酒を開けるので、毎晩相当な売り上げが立っているようだった。私が偶然指名をもらったヤオーは、たった一度

『登録しとけ』

と、一言だけのメールをくれたきりで：こちらからメールをしても返事があるわけでもなく、ヤオーから何かメールが来るわけでもなかった。

ヤオーはいつもあのヤカラ達とつるんでいるわけでもないらしく、杏ちゃんと凜ちゃんのヤカラ客はヤオー抜きで何度か飲みに来ていた。特にヤオーの席の売り上げが欲しいとか、狙っていたわけではないから別にいいんだけどさ：来店する度に杏ちゃんと凜ちゃん、指名のヤカラ客とでコソコソ私のほうを見ては何か話してるのだけはやめてほしいんだけど。

「はあゝ：」

私は大きなため息をついた。営業終了後の店内。周りではボーイさんたちが明日の『ドレス新調デー』イベントの準備に忙しくしている。

「：名前っていってもなあ：」 バタバタしすぎて伸ばし伸ばしにしていた名刺注文。まあいいや、と思っていたのだけど：ついには岩村に未だに私がカラ名刺を使ってる事が見つかってしまい、今日

は居残りさせられてしまったのだ。なんでも一番早い所で1日で名刺ができあがってくるという。

目の前には膨大な厚さの名刺見本ファイル。

「こんなに数あったら選べないってば…」

ハートモチーフの名刺一つとっても、色・柄・さらには台紙の素材など様々。さらには既に誰かが使用しているデザインは使えないとか、文字を黒文字にするのか金文字にするのかとか、字体はサンブル通りにするのかどうかとか…選び出したらなんだか大変。更にもう一つ、私を悩ませているのが…

「名字っていいもなあ…」

なんでも『MOON』では高級感を出す為？なるべくキャストの名刺には名字をつけるようにさせているらしい。私は別に『ミキ』だけでいいと思ってただけど…そうもいかないらしかった。そういや、エナさんも雑誌には藤咲エナって出てるし、まりあさんも桜井まりあって出てたしなあ…。

私は幾つか候補を紙に書き出してみた。けど、なんだかしっくりこない。そもそも『ミキ』って源氏名自体、店長が勝手に決めた名前だから…そこに名字をつけるのって、すごく大変なんだけど。

「芸能人みたいな名字のほうがいいかなあ…加藤ミキ？西野ミキ？…なんか普通だなあ。前田ミキ？…なんか違うし。倅田ミキ？…キヤラ違うし。うーん…」

ぶつぶつ言いながら考え込む私。周りでは黙々とボーイさん達が作業を続けている。

頼みの綱のアキラちゃんといえば、『今日はちょっと飲みすぎて疲れた』と言って珍しく早々に送りの車で帰ってしまっていた。

仕方なく自分であれこれ考えているんだけど…まとまらない。そんな気も知らず岩村は

「源氏名ってめっちゃ大切なからね！人気のモデルとかタレントみたいなカリスマ性がある名前にしてよく！なんなら、芸能人の名字パクってもいいしね！…そしていずれは、ミキちゃんの名前

も業界では永久欠番になるような…売れっ子になってほしいからさ！ね！！」

そう言って、ぱしっと私の背中を叩くと明日の用意で忙しいのかどこかへ行ってしまった。店長レースがかかっている最初のイベント。色々忙しいんだろう。担当の女の子みんなと面接をして同伴や来店予定などを書き出していた。長くいる女の子で明日の同伴や来店私は、明日の来店予定も特に無いから…ちょっと気まずいんだけど…。

「はあ…全然わかんないや…」

参考までに、と岩村がメイクルームから持ってきたキャバ雑誌。

いかにもって名字は沢山あるけど…なんだか他の人が使ってるの真似ちゃうのなあ…

「ミキちゃん、何してんの？」

不意に、背後から誰かが覗き込む。

「うわっびっくりしたあ！！」

ぬっと顔を出したのは、細田君だった。

「前田ミキ…倅田ミキ…藤本ミキ…って、何これ？」

私が源氏名候補として適当に書き殴っていた紙を手に取り、まじまじと見る細田君。…いや…適当に書いたヤツだから、見ないでほしいんだけど…。

「ちよっ！勝手に見ないでよっ！」

細田君の手から慌てて紙を奪い取り、名刺ファイルの下に隠した。

「あ。なんで隠すのさ。源氏名考えてるんでしょ？いいじゃん、見せてよ。」

「だって、恥ずかしいし。」

「…そんな恥ずかしい名前考えてたの？」

「そ、そういう訳じゃないって！」

「じゃあいいじゃん。見せてみて。」

「……。」

なんだか上手く丸め込まれた。しぶしぶ隠していた紙を差し出す。
「ふーん……何これ？芸能人のパクリ？」

「だからっ！まだ考え中なんだってば！！」

図星に突っ込まれ焦ってしまふ。…だってさ、岩村が人気のタレントさんとかモデルさんの名字パクると良いよ！とか言うもんだからさ…。

「もっとミキちゃんらしい名前にしたほうがいいんじゃない？オリジナル感っていうか…芸能人のパクリしてもその芸能人と違うと名前負けするっていうか。」

「…そりゃそうだけど…」

そう簡単に思いつくわけもない。自分だって書き出した名前にしつくりこないなあって思ってるんだけど。

私が一人焦っていた横で、細田君は顎に手をあて、少し小首を傾げて何かを考えてた。

「…うん、思いついた。」

「え？」

細田君はソファに座り、紙の余白にサラサラと何かを書き始めた。

「はい。」

手渡された紙を見る。

「…月嶋・ミキ…？」

「そう。なかなかいいと思うけど？気に入らない？」

ちよっと心配そうに細田君は私の顔を覗き込んだ。いきなり言われても…とはいえ、私が考えていた芸能人パクリネームよりはずつとしつくりきていた。

「でも、なんで月嶋？」

細田君の隣のソファに腰掛け、名前の書かれた紙を見つめながら何気なく聞いた。他にも色々思いつきそうなものだけど、あえて月嶋にしたのは何でなんだろう。…もしかして、元カノの名前とか！？

「…うーん。うちの店って『MOON』って名前でしょ。だから月に関する源氏名っていいんじゃないかってさ。『MOON』っ

て名前の店だけど、今在籍する女の子、誰も源氏名に月がつく子いないんだよね。みんな大抵好きな芸能人の名字とか、彼氏の名字とか、なんだか宝塚みたいな名字とかさあ…そんなのばっかりなんだよね。せつかくだから月がつく名前の子が居てもいいかなって。」

月がつく源氏名…ふーん、今お店で誰も使って無いんだ？みんなの源氏名をフルネームで知ってる訳じゃなかったから、それは知らなかった…

「それにさ、月って特別だと思うんだ。」

「…特別？」

細田はそう言うのと、何だか楽しそうに語り始めた。

「昔から人間も動物も、月からの凄く影響を受けてるんだ。海の潮の満ち引きだってそう。ルナティックシンドロームって言って、満月の日には交通事故や犯罪が増加するってちゃんとしたデータもあるんだよ。」

「ええっ…なんか怖くない？」

「怖いっていうより、月の魔力って感じかな。それに月って、星と違って色々な姿を持ってるし。見上げる度に変化する美しい姿に…昔から人は心を惑わされるんだよ。月が綺麗な夜は他の星なんて霞んで見えちゃうしね。星の名前は知らなくても、夜空に輝く月の姿は誰もが知ってるし。」

熱く語る細田君の横顔はキラキラと楽しそうだった。

「…そ、そんな人の心を惑わす月を名前に持つのは、素敵じゃないかな？こういう仕事だしさ…」

熱く語り過ぎたと思ったのか、細田君はちよつと照れくさそうに頭をかいた。

人の心を惑わす…星の名前は知らなくても、月の姿は誰もが知ってる…かあ。細田君、なんだか詩人みたい。…でも、ちよつとその月の名前が気に入ってしまった。そんなに色々考えが合あった名前だったのに、元カノの名前なんじゃないかと思って…ちよつと申し訳なかったかな。

「月嶋ミキかあ・・・まあ悪くないから、これにしてもいいかな。」
私はそういつて、細田君が書いてくれた名前の上に大きく丸をした。

「おい、ミキちゃんがなんで上から目線なんだよ。」
そういつて細田君は私の頭をこっん、と小突いた。

人の心を惑わす、月の魔力・・・その名前で私にもそんな魔力が備わるというな・・・。

35、ドレス新調デー

11月の最後の週末のイベント『ドレス新調デー』

年末に向けてどんどん加速するイベントシーズンにふさわしく、そしてまた新店舗の店長レースの最初のイベントでもあり、とても華やかなイベントの始まりだった。

この日も私は舞台の稽古を終えて、大急ぎで22時過ぎにお店に到着した。もうすでに60分以上のウェイトイングのお客様が出ているらしく、すぐに入店できず他で時間を潰そうといったん店を離れるお客様や、列を作っても店で待っているお客様など・・本当に店内は大盛況だった。相変わらず店に到着するや否や、仕度を急かされ、さっちゃんにもブーブー文句を言われながらヘアメイクをしてもらい、同時に急ぎでメイクを直す。

今日のイベントの為に、岩村にも前日までに色々営業指導はしてもらったんだけど・・今日の私のお客様の来店予定は、残念ながら無い。みんなに今日のイベントの告知メールを送っては見たものの『行けたら行くよ』とか、そんな感じの返信ばかり。返事が来ないものも多かったり。予定があるからいけない、と、はっきり返信されたほうが残念ながらも諦めがつくものだなあ・・なんて思った。

もちろん、樋口さんにもメールで案内してみたんだけど・・相変わらず返信は無かった。もう連絡してくれないのかなあ・・。そんなこともあって、なんだかモヤモヤした、すっきりしない気持ちでフロアに向かった。まあ、いいか・・私はまりあさんの専用のヘルプなんだし。今日はきつとヘルプだけでも大忙しのはずだ。

「おっはよう！ミキティ！！そのドレス、超似合ってるじゃん？」

そう言ってフロントで私を待ち構えていたのは岩村ではなく・・・店長だった。今日はこの日の為に先日アキラちゃんと一緒に選んだ、

薄いピンクのロングドレスを着ていた。

「ミキティ、どんどんキレイになってくじゃん。すげーいい女。」

店長がそばに来て、わざとらしく背中をさすってくる。……ま、まさか酔ってる？ わけないよね？？でも、店長は酒臭いわけでもなく、至ってフツ―に、私の背中をさすり、しばらくして何事も無かったかのように手を離れた。

「今日は俺が付け回しするからさ！ やっぱイベントの日は俺じゃないと、店回せないんだよ！」

フロアをちよつと覗いてみると……いつも付け回しの岩村は他のボーイさん達と同じようにボトルを運んだりオーダーを取ったり、テーブルの灰皿を交換したりしている。……店長も付け回ししたりするんだ！？ 入店してから一度も店長の仕事っぷりは見たことない・というか、いつも目にするのは酔ってたり、怒鳴ってたり……まともに仕事しているの見たことないんだけど。大丈夫なのかな……「さ、ミキティ行こうか！！ もう随分指名のお客様、待たせてるから。ちゃんと挨拶しろよ。」

「はい……え？」

大きく頷いたものの……今、なんて？？

「ヘルプに着いてくれた子にちゃんとお礼言えよ。」

そう言って店長は強引に私の背中をフロアへ押し出した。

「あの……指名って、まりあさん指名のお客様さん？？」

あわただしく席に連れて行く店長に、ちよつと焦りながら聞いてみた。

「は？ 何言ってるの。お前の指名だよ、ミキティ指名！ 本指名2本と、いつもの飯岡さんの場内指名で今3本被ってるから！ 自分の来店くらい把握しとけよ。時間ねえからさっさと挨拶してっ！」

「あ……す、すみません……」

そう言うか言わないかのうちに席に案内された。

あれだけ営業メールの反応が悪かったので、絶対誰も来ないと思ってたのに……。いつもの飯岡さんの場内指名はともかく、ほか

の2組のお客さんはいずれも前回の来店の際は確か場内指名をもらって、連絡先を交換していたお客さんだった。ちょっと品のいい感じのおじさまと、いつだったか舞ちゃんのお客さんが大暴れした日に、私があわただしく着いたおじいさんだった。

場内指名を本指名にして返すこと・・・一つ、クリアできたのかな？

そんな事はともかく、私は慌ただしく席に着き、ヘルプに入ってくれていた子にお礼を言い：勧められるままにドリンクを頼み、話をして：指名の席を周り、自分の中ではいっぱいいっぱいに忙しかった。

飯岡さんはいつも通りにニコニコと良いお客さんなんだけど、場内指名から本指名で来店してくれた、品が言いおじさんと、おじいさんも、どちらもとつても穏やかなお客さんで：ちょっと助かった。だって、たった3組指名が被っているだけで、こんなに大変なんだもん。いい感じに話が盛り上がってきたのも関係ナシで次に席に動かされ、ちょっと化粧直ししたいなと思ってそんな暇はない。混んでることもあってドリンクを頼んでもなかなかすぐに出てこなくて、出てきたとたんに次の席に移る羽目になったり・・・もちろんその都度、お客さんが不快にならないようにフォローをいれるんだけど・・・今日は常にフォローばかりしてるかも・・・目が回りそうだった。

いつも幾つも幾つも指名が被っているまりあさん達って、一体どうしてるんだろう・・・？

そのまりあさんがちょうど視界に入ってきた。お客様の送り出しに席を立ち、フロアを横切る。優雅に歩くその姿に思わず釘付けになってしまった。今日はとってもゴージャスなシャンパンゴールドのロングドレスで、いつもはちょっと降ろしている髪をアップにまとめ、小さなティアラを乗せていた。見るからに上質な素材を使っ

てそう、それでいてゴテゴテしていないデザインのドレスは、ス

タイルが綺麗に見えて、品のいい、高級感がある。いつもイベントの時は8万はくだらないというそのドレス……。今日のドレスが幾らかはわからないけど、私の全身コーデ1万円のドレスとは、やっぱり迫力というかオーラが全然違っていた。まりあさんはどこかの国のお姫様そのもの。

そうなると他の女の子も気になってしまい、接客しながら色々フロアを見渡すと……。ゆいちゃんはいつも黒ばっかりなのに今日はシルバーのロングドレスで大人っぽく、エナさんは相変わらずミニ丈のドレスなんだけど、刺繍とフリルが豪華な真っ白なミニドレスで、可愛すぎてお人形さんみたい。アキラちゃんも一緒に選んだ真っ赤なボンテージ風のミニドレスをバッチリ着こなし美脚をアピールしていて……。今日のドレスは人それぞれがっていたけど、みんな綺麗で。さらにいつもと違う雰囲気も見れて、見ているこちらにも楽しくなってしまう。

「おっはーミキティ」

ちょっぴり酔ったように陽気な声をかけてきたのはアキラちゃん。指名の席を周り、次に飯岡さんの席に着くというので、一度フロントに来ていた時やっとアキラちゃんと話すことができた。アキラちゃんもまりあさんのヘルプ回りで次の席に移動するところだったらしい。

「今日のまりあさん超々綺麗だよねえ。みんな気合入ってんだけど、激混みすぎてへとへとだわあ」

そういいながらアキラちゃんは楽しそうに笑っている。

「今、まだ沢山ウェイティングのお客様いるみたいなんだけど……。待ちつつたって、その前に店の営業時間終わっちゃいそうだわね。」

そういつてアキラちゃんが視線を走らせたお客さんのウェイティング席には数組のお客さんがいた。……。私が出勤してきた時間に比べると大分減ったけど……。入店できたのか、それとも諦めて帰ってしまった人もいるのか……。それでも店内は満席。女の子も足

りていないらしい。

「やっぱり今日、そんなに混んでるんだ・・・」

おもわずボソツとつぶやいた私に、アキラちゃんが目配せをした。
「？」

アキラちゃんが目配せしたフロアの奥・・・店内か混んでいるのでよくわからなかったけど・・・ありえない大人数でフロアの奥を陣取り、大騒ぎしているお客さんたち。

「・・・あ！？もしかして、奥の席全部！？」

よくよく見れば見知った顔がちらほら。似たような服装、似たような雰囲気のお客さんが大人数。杏ちゃんと凜ちゃんのヤカラグループだった。最初に来店したときよりも、もっと多い！？満席で混んでいて、自分の席だけでいっぱいいでフロアの奥の席まで気がつかなかったけど、今日もあのグループ来てたんだ！？人数が多すぎてひとつのテーブルにまとめる事ができなかったらしく、あちこちの席にまたがっているので、てっきり別々のお客さんなのかと思ったら・・・全部杏ちゃん・凜ちゃん指名のヤカラグループらしい。

「いくらMOONが大箱の店って言っても、あの人数でオープンから居座られたら・・・ねえ？まりあさんのお客さんも沢山来店してるから、アタシ達は助かってるけど・・・あの席のに着きっぱなしの子もいるんじゃない？」

「ええっ・・・また！？」

おもわず また？ という言葉を発してしまい、アキラちゃんがあわてて私の口を押さえる。

「しっ・・・今日は岩村じゃなくて、店長が付け回してるからみんな文句が言えないんだよねえ。何も揉めなきゃいいんだけどさあ・・・」

「おいっ！アキラ！さっさと席戻れっ！・・・！何やってんだ！！」

噂をすれば、影。店長がイライラしながらフロントにやって来た。

「・・・あとでね！」

私にしかわからないようにアキラちゃんはそう言うのと、まりあさんの席のヘルプにあわただしく戻っていった。私も店長に急かされるままにVIPルームの飯岡さんの席にむかう。

MOONの営業終了時間まであと1時間ちよつとなはずなんだけど。ウェイティングしているお客様もまだ何組もいるけど・・・大丈夫なのかなあ・・・

36、歪み

「ごちそうさまでした〜！」

私とまりあさん、そして飯岡さんでシャンパングラスを合わせる。グラスの涼やかな音が静かなVIPルームに響いた。

ドレス新調デーは大盛況のうちに終わり、もうすっかり閉店時間。私も飯岡さんの席の他にも指名が被り、もちろんまりあさんも幾つも指名が被っていて・・・結局二人揃って飯岡さんの席に着けた時間はほとんど無かった。それでも飯岡さんはオープンからラストまでいてくれた。・・・なかなか着かないから延長するのか・・・それともやっぱり飲みなれているから全然着かなくてもこんなに延長してくれるのかな・・・相変わらず飯岡さんは本当に『良いお客さん』だ。指名した女の子がこれだけ着かなくてもいつもと同じようにニコニコと・・・むしろいつもよりも楽しそうにしていた。シャンパンだって、一体何本空けたんだろう・・・席に戻るたびに違うボトルがテーブルにあった気がするんだけど。

私とまりあさんはお見送りの為に飯岡さんと一緒に席を立ち、通常のフロアを抜け、エントランスへ向かう。他のお客さんはもう送り出しをされてフロアからは一切姿を消していた。『MOON』では飯岡さんがラストまで居る時は、飯岡さんが一番最後の送り出しと決まっている。これはもう暗黙の了解のようなものらしいけど・・・他にどんなお客さんが居ても飯岡さんの会計を出すのは一番最後、もちろんボーイから飯岡さんに帰りを急かしたり、閉店を促すようなことも無い。お店にとって特別なお客さんですよ、といった意味なんだろうなあ・・・。

「今日も遅くまでありがとうございました。あんまり着けなくてごめんなさいね。でも、どこに居ても早く飯岡さんのお席に着きたいなあ〜って思ってたのよ。」

まりあさんがやんわりと、冗談交じりに飯岡さんにフォローを入れた。

「あははは。なかなか着かないのはいつものことじゃないか。イタリアで買ってきたそのドレス、ぴったりで良かったよ。1点ものだったから衝動買いしちゃったよ。」

この高そうなまりあさんのドレス、飯岡さんが買ってくれたドレスなんだ!？・・・どうりで高級感があるドレスのはずだよ・・・しかもそれを飯岡さん、衝動買いって・・・。

「今度はミキちゃんにもドレス買ってこないとなあ。あとでスリーサイズ教えてね。僕の予想だとねー・・・。。バストが86くらいで・・・Dカップ? 当たり?」

楽しそうに笑う飯岡さん。

「えつつつ!？な、なんでそれを・・・」

凶星・・・なんだけど。

飯岡さんのエロ親父トークは酔うといつもの事だけど、なんていうか、あっけらかんとしていて嫌な感じは全く無い。・・・それにしてもなんでサイズわかるの？

「もおー。飯岡さん、ミキちゃんにエロトークはダメだってば!」

まりあさんがわざとらしく呆れて見せる。

「はははは! ミキちゃん、凶星だったでしょ!？まりあちゃんのも一発で当てたんだよ。ね、まりあちゃん?」

「もう! それも言わないでってば!・・・じゃあ飯岡さんの秘密もミキちゃんにしゃべっちゃうわよ」

「あはは。それは困ったなあー」

大笑いをしながら3人でエントランスへむかう。今日一日、本当にバタバタしてて疲れちゃったけど・・・この最後の短い時間が楽しくて、なんか好き。疲れもどこかに飛んでっちゃうような気がした。

「マジでえ!？すげえーっ!!!」

フロントに出たあたりでなんだか柄の悪い・・・だれの声かは想像がついたんだけど・・・酔っ払って騒ぐ声が聴こえてきた。

「あ。」

私とまりあさんが一緒に声を発した。扉に続く階段下のエントランスのちよつとした広間には、あの杏ちゃん凜ちゃん指名の大人数のヤカラグループがまだ帰らずにたむろっていたのだ。店長と宮道が一緒になって談笑している。そこには酔っ払ってさわぐ杏ちゃんと凜ちゃんの姿も・・・一緒に着いていたと思われる女の子達は半ば呆れたようにちよつと距離を置いて『早く帰れ』といわんばかりに白けた目で見つめている。

それまでニコニコしていたまりあさんも、明らかに一瞬ムツとした表情になった。

「あれえ！？あれ、ナンバーワンのまりあじゃね！？」

グループの一人がまりあさんに気づき、その声に他のヤカラも一斉にこちらを見た。

「すげー本物はじめて見たー」

「まりあちゃん、俺達の席にも着いてよ」

「超すげえー！ねーねーナンバーワンっていくら稼いでんの？」

まりあさんはそんなヤカラ達に応える事無く、ちよつと微笑んだだけで、飯岡さんに申し訳無さそうに頭を下げた。

「ごめんなさい。・・・すぐに店長に言っ先にお客様達のお見送りしてもらうから・・・」

「いやいやいいよ。一番最後じゃなきゃいけないなんて、僕がお願いしたわけじゃないから。お店のご好意なんだからさ、強要しちゃあいけないよ。」

飯岡さんは全く気にする様子も無く、陽気に「ごちそうさまー！」と言いながらエントランスの人ごみを抜けて階段に向かった。

「い、飯岡さんっ」

私とまりあさんは急いで飯岡さんの後を追って階段を駆け上がった。いつもは飯岡さんがラストまで居る日は、出口まで一緒に見送

りに来る店長も、ボーイも誰一人として上がってこなかった。飯岡さんの姿も見えてたはずなのに、店長以外のボーイは色々仕事もあるだろうけど、店長すら見送りに来ないなんて・・・あのグループとの談笑がそんなに大事だったのか・・・

「・・・さてその辺で車でも拾おうかな。」

飯岡さんはコートの前ボタンを閉めながらあたりを見渡していた。
「・・・あれ・・・？」

そういえば飯岡さんのタクシーを随分前にまりあさんがボーイに頼んでいたはずだけど・・・あたりを見渡しても呼んだと思われる車は全く無い。飯岡さんが帰る時は今まで必ず店の前までタクシーを用意してるんだけど・・・いくら週末の夜と言っても、都内を流しているタクシーは山のようにいる。呼んでもまだ来ないなんて、ありえない。なんだか嫌な予感がして私は階段を戻ろうとした。

「私、ちょっと確認してきます！」

「ミキちゃん、いいからいいから。」

飯岡さんが私の肩を優しく叩いて引き止めた。

「大きな通りに出ればすぐに車拾えるよ。たまには僕も歩かないと、メタボにひっかかるからね。最近ちょっと出てきたかな」

わざとらしく自分のお腹を叩いてみせる飯岡さん。

「・・・本当にごめんなさい。あとで店長には私からちゃんと言うておきます。」

いつにもまして真剣な様子のまりあさんの肩を、ぽんぽんと飯岡さんがなだめるように叩いた。

「本当にいいから。ね。みんな色々都合ってものがあるんだよ。ほらほらそんな困った顔したら美人が台無しだよ・・・まりあちゃんも、ミキちゃんも今日はありがとう。いや、今日も、楽しかったよ！」

「でもっ・・・」

「いいの。僕が楽しかったなら、それでいいんだよ。」

そういつて飯岡さんは私とまりあさんの肩を組んで楽しそうに笑った。

店側が明らかに飯岡さんに対して失礼な対応をしているのにも関わらず、怒るそぶりどころか、逆に私達は飯岡さんになだめられてしまっていたのだ……。そんなニコニコしてくれている飯岡さんを見ると、こんなに良い人に対してなんて失礼な事をしてるんだと、心が痛む……。せっかく楽しく帰る所だったのに……。ついさっきまで、あんなに3人で大笑いしていたのが、とても昔の事のようになさえた。

冷んやりとした冬の夜風が体に吹き付ける。だけど、それよりもっともっと気持ちちは沈んで凍えそうだった。

「飯岡さんっ！！！！」

大声と共に、バタバタと階段を駆け上がってくる音がした。

「良かった間に合った……。！」

息を切らして駆け上がってきたのは細田君だった。肩で息をしなから、飯岡さんを前にピシッと姿勢を正す。

「タクシー、あちらの通りに待ってもらってます！諸事情で店の前には呼べなくて……。申し訳ありませんでした。ご案内致します。」

「うん。忙しいのにありがとう。それじゃ、まりあちゃん、ミキちゃん、おやすみ！」

そう言うとき飯岡さんは私達に手を振って、細田君と一緒に大通りに向かって消えて行った。

「さて……。！」

二人の背中が見えなくなったあたりで、まりあさんが口を開いた。「……。とりあえず、下に戻ろうか。薄着のままだから寒いし、冷えちゃった。」

まだエントランスからは、あのヤカラ達の騒ぎ声が聞こえてくる。「さっさとあの人達に帰ってもらわないと。」

まりあさんは階段の下をちらっとみて、冷ややかにつぶやいた。

もうすっかり閉店時間過ぎてるんだけど、一向にあのヤカラグル
ープを帰そうとしない。お店にとって上客なはずの飯岡さんにもあ
んな調子だし・・・店長も岩村も宮道も、一体何やってんだろう・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1494p/>

月と影と踊る

2011年5月18日12時40分発行